

教会学校教案誌

2012.1.2.3月号



悲しむ者は幸いです。
その人は慰められるからです。

マタイ5章4節



No.44

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2012年1～3月カリキュラム（第44号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの二年目—

月 日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
1月1日 新年	ペトロの信仰告白	マタイ 16:13－20	詩編 62:7a
	天の父から与えられた信仰を喜び、告白することへ励まそう		
1月8日	死と復活の予告	マタイ 16:21－28	コリントー 1:18
	信仰を自分の信念にしまい、キリストの上に立とうとする罪を捨てよう		
1月15日	天の国でいちばん偉い者	マタイ 18:1－5	マタイ 18:4
	子どものように無力なものを引き上げてくださる神の恵みを喜ぼう		
1月22日	「ぶどう園の労働者」のたとえ	マタイ 20:1－16	マタイ 11:28
	分け隔てなく、同じように神の国に招く、神の決意を喜ぼう		
1月29日	エルサレムのために嘆く	マタイ 23:29－39	詩編 51:6
	神に反抗する人々の不幸を嘆いて十字架へとおもむく主イエスの愛を知ろう		
2月5日 (11信教の自由)	神殿の崩壊の予告	マタイ 24:1－14	エフェソ 6:11
	キリストを神として生きる信仰の戦いに約束された、勝利を信じよう		
2月12日	目を覚ましていなさい	マタイ 24:36－44	マタイ 7:24, 25
	ノアの信仰にならい、再臨のキリストを待ち望み、信じて備えよう		
2月19日 (22- レント)	「十人のおとめ」のたとえ	マタイ 25:1－13	マタイ 7:21
	日々、御言葉に聞き、主との交わりに生き、信仰のともし火をともし続けよう		
2月26日 レント	タラントンのたとえ	マタイ 25:14－30	マタイ 25:29
	すべては主なる神から与えられたもの。感謝して受け、喜んでささげよう		
3月4日 レント	過ぎ越しの食事・主の晩餐	マタイ 26:17－30	コリントー 5:7
	神の小羊として自らを献げる主イエスが新しい契約の食卓へと招いておられる		
3月11日 レント	ゲツセマネの祈り	マタイ 26:36－46	マタイ 26:39
	祈りにおいてわたしたちの苦しみを背負われた主イエスをいつも見つめよう		
3月18日 レント	ペトロの裏切り	マタイ 26:69－75	マタイ 26:75
	独りよがりのキリスト理解を打ち砕き、悔い改めへと導く主イエスを仰ごう		
3月25日 レント	死刑判決	マタイ 27:15－26	マタイ 27:26
	キリストの裁きをとおしてわたしたちの罪を知り、愛の神を仰ごう		

も く じ

2012年1・2・3月カリキュラム

まえがき	弓矢健児	4
巻頭説教	吉岡契典	5
特別寄稿 第2回東部中会教会教育研修会 「託されている祝福と責任」(後編)		
発題 (2)	島野美佳子	8
発題 (3)	稲田正平	9
副読本のご案内		12
自由募金のお願い		13

聖書研究・説教展開例・分級展開例

1月 1日	16
1月 8日	23
1月15日	30
1月22日	37
1月29日	44
2月 5日	51
2月12日	58
2月19日	65
2月26日	72
3月 4日	79
3月11日	86
3月18日	93
3月25日	100

2012年4・5・6月カリキュラム	107
2012年度年間カリキュラム	108
執筆者よりひとこと・あとがき	110

まえがき

弓矢健児（千里山教会牧師）

教会学校の教師が子供たちを教える時に大切なことは、教師一人ひとりが自由な者として、神への喜びと感謝を持って生かされているということです。教育は子供の人格を育むものです。人間は神のロボットとして創造されたものではありません。人間は神の形に創造された人格的な存在です。人間は神から自由な意思と良心を与えられた存在なのです。だからこそ教育においては、教師と生徒の人格的な意志と良心の自由が何よりも尊重されなければなりません。

このことは、教会学校教育だけでなく、この世の公教育にも当てはまります。もちろん、教会学校の教育と、この世の公教育とは同じではありません。なぜなら、教会学校の目的は礼拝指針の第百八条で、「信者とその子たちを信仰と生活において教え導くことである」とあるように、神の国をめざしてのキリスト者の成長と完成にあるからです。しかし、教会学校教育もこの世の公教育も、子供たちの人格形成を担っているという点では同じです。子供たちの健全な人格形成のためには、教会学校教育も、この世の公教育も、共に適切になされていくことが大切です。そのどちらかでも歪められるなら、それは子供たちの人格形成に大きな問題を引き起こします。

日本のようにキリスト者の人口が1%にも満たない社会では、とりわけ公教育が子供たちに与える影響は絶大です。ですから日本の教会とキリスト者は、この世の公教育の内容や、あり方について深い関心を持って関わっていく責任があります。もし、この世の公教育が特定の政治権力や為政者に都合の良いように行われるならば、それは子供たちに対しても、社会全体に対しても非常に深刻な影響を与えます。そのこ

とは戦前・戦時下の日本の皇民化教育が、いかに教育を歪め、子供たちの人格形成に大きな問題を与えたかを見れば明らかです。

戦前、日本の学校では教育勅語と「日の丸・君が代」の強制によって、日本は天皇を中心とした「神の国」であり、日本人は天皇の臣民であるという皇民化教育が徹底して教えられました。戦前の日本社会における「忠君愛国」の天皇制ナショナリズムは、公教育における徹底した皇民化教育があってこそ生まれたものです。そして、その影響は日本のキリスト者の人格形成にも大きな影響を与えました。その結果、日本の教会は、神社参拝や天皇崇拝に抵抗できませんでした。さらには、朝鮮半島や中国大陆への日本軍の侵略戦争を、正義の戦争だと言って支持し、戦争に協力までしたのです。こうして、日本の教会は神に対しても、近隣諸国に対しても大きな罪を犯しました。

今また日本の国では、公教育における「日の丸・君が代」の強制に見られるように、教職員 の思想・良心の自由が強く圧迫され、教職員に対する管理・統制が強まっています。特に、大阪府においては、橋下知事と維新の会によって、「君が代」起立を強制する条例が制定されました。さらに、橋下知事と維新の会は、「君が代」斉唱において起立しない教師を免職したり、公教育そのものを府知事が直接管理統制できるような条例までも作ろうとしています。そのめざすところは、時の政治権力に都合の良い人間を作り出すことにあります。

この問題は、決して教会とは関係ない政治の問題ではありません。神こそすべての人間の良心の主であると思ふ私たちにとって、これは信仰の根幹に関わる問題ではないでしょうか。

「血の通った現実」

～創世記24章1～67節による説教～

吉岡契典（東北中会休職教師）

地震から十日が経ちました。何かの悪い夢を見ているのじゃないかという感覚、物事が、自分の目に映る景色が色を失っている、それが現実的なものとして、自分の中に入ってこないような、夢の中にいるような感覚が、ずっとありました。電話がつながってからというもの、特に教会関係の各方面からの電話とメールの対応に一日中追われていましたが、色々な人が心配し、励ましてくださるのですが、しかしこの地では、私は被災者であって、被災者ではないのです。電気が復旧して、ユーチューブで名取川の津波の映像を見ました。涙も出ないぐらいの、感情の起伏が無くなってしまふほどの衝撃を受けました。

そういう色のない景色に、ようやくリアルティーが備わり、ようやく生き生きとした現実味を感じたのは、地震から6日目に、K君の妹さんの無事が確認されたということをニュースを受け取ったときでした。恥ずかしながら、正直に言って、震災が起こってから初めて、心から、強く神様に感謝できた時でした。

けれども、この今朝の御言葉を読みながら、そういう私の心も、少しずつ落ち着いてきました。やはり、聖書の言葉しかないのだと思います。色々な励ましのメール、電話、大学卒業以来、12、3年振りに便りをくれた方も居ましたし、知らない方々からの電話もきました。電話が通じた日、この教会にはオランダからも直接電話がかかって来ました。本当に有難かったです。けれども、やはり、本当にこの私たちの、傷つき、悲しみ、今かなり疲れている。現実を

受け止めきれずにいるようなこの心に、落ち着きと、この現実を受け止める力を与えることができる唯一の言葉は、聖書の神様の言葉なのだと思います。今こそ私たちには聖書の言葉が必要で、今こそ聖書の言葉は、この私たちに強く語りかけているのだと思います。今こそ私たちは、このような現実の中であるからこそ、神様からの言葉を強く求め、テレビで繰り返される原子炉の映像や、あの繰り返される記者会見を通して知る以上に、神様というお方を通して、この今の現実を知り、受け取る必要があるのだと思います。

今朝の御言葉はとても長い物語ですけれども、この物語を読んだあとに、皆さんはどんな気持ちになるでしょうか？このイサクとリベカの結婚のいきさつ、この二人の出会いを読むときに、私たちの心に、なんとも言えない清らかな、澄んだものが残るのを感じないでしょうか？

この物語は、私たちに実にさわやかな読後感を与えてくれるものだと思うのです。まるできれいな透き通った水が流れている川辺にいるような、そんな清らかさがここには流れていると思います。これでいいのかな？ 本当にそれでいいのかな？ と思うほどに、何か読んでいるこちらが心配になるぐらいに、この物語は清らかにサラサラとスムーズに流れていきます。

ここには、繰り返し神様に祈りながら事を運ぶ人と、その祈りに答えて現実的な導きを与えてくださる神様の御業が、繰り返し現れて、人間の祈りと行動と神様の御心とが、ここでは非

常に見事に調和しています。

息子イサクの嫁探しを命じたアブラハムにも、その使者として立った老僕にも、リベカにも、イサクにも、人間的な計らいや、カミヤ、悪い意味での人間臭さとか、頑張りといったものが、不思議なほどありません。清廉なのです。

物語の全体は、静かな祝福の調べで覆われています。ここには満ち足りた世界が広がっています。その原因は何でしょうか？ その原因は、神様への澄み切った信頼です。

この満ち足りた感覚は、この物語が描く全ての場面において、その背後に、神様の存在があるという信頼によって成立しています。全ては神のみ手の中にあるという信頼。これは全てを満たされたものにするのです。神の導きが届かない、足りない場所など一寸もない。その感覚、その神様のリアリティーが、静かにこの物語全体を包んでいます。そしてそのことが、この物語の全てに、安定と安心を与えています。そして、この物語に登場する全ての登場人物は、神様によって満ち足りた世界、その安心の中を歩むのです。

アブラハムに遣わされた僕は、今自分が神様に導かれて嫁探しに行っていること、自分の背後には神様のお導きが確かにあるということを、当然のように、ゆるぎなく確信しています。そこには何ら、超自然的な奇跡が起こっているわけでもありません。奇跡であるかのように、素晴らしく事がスムーズに運ぶわけですが、ここにあるのは奇跡ではなく、日常です。しもべが祈っていたら、乙女が水がめの水を飲ませてくれた。そしてラクダにも水を与えてくれた。何の特別なことはない。普通のことです。井戸の前に座っている旅する老人に、やさしい若いお姉さんが、たまたま、そして普通に親切にしてくれた。リベカも、ここで何か特別なことをしたわけではありません。水どうですか？

のどが渴いているでしょうに、ラクダにもどうですか？ ただそれだけのことをしたまでです。しかしそこでもうこのしもべは、この人だと確信するのです。そして48節49節にありますように、リベカさんをくださいとラバンに迫るのです。

ラバンはその唐突さにどう答えるのかというと、50～51節です。「ラバンとベトエルは答えた。『このことは主の御意志ですから、わたしどもが善し悪しを申すことはできません。リベカはここにおります。どうぞお連れください。主がお決めになったとおり、御主人の御子息の妻になさってください』。彼は主なる神の御心を僕の言葉の中に聞き分け、それに従うのです。そして、こんなにもトントン拍子で進んでいいのかなと思うほどに、リベカも、そのことの中に神様の御心を認めて、無垢にそれに従っていくのです。

この24章の御言葉は、私たちが神様の御支配の中で生きるといえることとは、どういうことなのかということを、具体的に語っています。そういう生き方を実際にやってみたら、それはどういう具合になるのかということを、この御言葉は私たちの前に描いて見せているのです。本当にこれは具体的な物語です。何か現実離れたことがここに書かれているのではありません。ここにあるのは、イサクの嫁探しという、全くの日常的な、そして具体的な、あるいはちょっと下世話かもしれない、私たちの人生の一コマです。私たちの人生にもこれと全く同じことが起こります。私たちも嫁探しをし、婿探しをし、本当にこの人が御心の相手なのかということをそこで必ず問いますし、嫁や婿に限らず、私たちにも色々な出会いがあり、色々な出発があり、色々な事柄が日常の中で起こり、どこに行こうか、これから何をしようか、あれをやってみようか、などという色々な決断が普通にあります。そしてそのような私たちの現実に

対しても、そのような私たちの全ての人生の具体的場面の全てにも、神様はこのようなして、鮮やかに、そして力強く働かれる。既に力強く働いておられる。それを導いておられるのです。

この3月11日以来、色々なものを見ましたし、悲しみの涙、有り難さに流す涙、色々な涙を流しましたけれども、この現実には、そしてあの先週の一週間の中にも、血が通っている。そこには血管が通っている。あの涙を流したあの時、あのことの中にも、神様の導きがある。それを知り、信ずる。これが、今の私にとって、この目の前の現実から逃げないで、この現実をまともに受け止めるための、唯一の方法です。

地震の少し前の時期に考えていたことがあります。それは、「期待」することと、「委ねる」ということとの違いです。

私たちは人に期待し、神様に期待します。しかし私たちは多くの場合、人に期待する時には、人が私の思うとおりに動いて欲しいと願い、神様に期待する時には、私の思いを神様が叶えて欲しいと願うのだと思います。それは全くおかしな事ではありませんし、自分の願いばかり祈って、という風にそれを否定的に見る風潮がありますが、期待し、自分の願いを祈ることは、大切なことで、決して否定されてはなりません。

主イエス・キリストも、あの十字架に掛かる前の夜、オリーブ山のゲッセマネの園で、こう祈られました。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。」この杯を飲むこと、つまり十字架に自分がかかるのが嫌ですと、父なる神よこのことを止めさせてくださいと、あの主イエス・キリストも期待し、祈り願ったのです。

けれども、「委ねる」ということはどういう

ことかという、それは、事の成り行きや結果が、自分が期待し自分が望んだとおりになるうがなるまいが、その結果も含めて、全部任せるということです。そういう意味で、「委ねる」ことは、「期待する」ことを、超えているのだと思います。それは自分の願いを超えて、すべてを任せること、決して投げやりになるとか、どうにでもなれと放り投げる事なのではなくて、どうなろうが、全てを信頼する方に託すということです。

主イエスも、「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。」と祈られたことに続けて、「しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」と祈られました。

この、神様の御心に信頼して、委ねる。すべてをこの方に託すという信仰を、今私たちは問われているのではないかと思います。

先行きは全く分かりません。まだ電気が通らない中、ラジオを通して原子炉が爆発したというニュースを聞いた時には、本当に、そこにいたみんなが泣き顔になりました。どうなるのか、まだわかりません。事柄は開いたままで、今何が起こるのか予想できません。けれども、この現実には神様の血が通っている。この先の未来にも、私たちの期待や願いを更に上回る神様の導きがあります。このカナン教会はもちろん、東北中会に13の改革派教会がありますが、そこに属する全員の無事が確認されました。この先の情勢は、全く分かりませんけれども、しかし現にその血の通った現実の中で、私たち生き残り、今朝も、この被災地の只中で、カナン教会の礼拝は途切れることなく守られているのです。

(2011年3月20日、仙台カナン教会主日礼拝説教より、執筆時は仙台カナン教会牧師)

「託されている祝福と責任」

～次世代を担う子どもたちのために～

《発題 (2)》

「子どもたちを呼び戻そう、世の光となって」

島野美佳子（坂戸教会執事）

子どもたちの姿が教会から減っていき、頭を悩ませるようになってから、もう何年もたちました。私たちは様々なことを考え、世の中や子どもたちのなかにその理由を見いだそうとしてきましたが、うまくいっているとはいえません。今日、お話しすることは聞きづらい事だと思いますが、あえて申し上げます。

子どもたちが教会に来ないのは、私たちに魅力がないからです。

もちろん、私たちの救い主イエス様は誰よりも魅力的な方です。しかし、わたしたちはどうでしょう？

教会の中にトラブルがあると、よくこんな言葉を聞きます。

「人を見ないで、主だけ見て。」

しかし、この言葉が子どもたちに通用するでしょうか。

子どもたちには具体的なモデルが必要です。「この人、すごい！」「あの人みたいになりたい。」

私たちは子どもたちにこう言ってもらえるような生き方をしているのでしょうか。たとえ今そうでなくても、「なりたい自分」を具体的に描いて、日々近づく歩みをしているのでしょうか。

2009年、私に大きな変化が訪れました。新聞記事や本を通して社会に目が開かれ、自分の信仰を問われ、都内のNPOでホームレスと呼ばれる生活困窮者や、DVなどの暴力に苦しむ女

性たちの生活再建を支援する活動に導かれました。きっかけは、ある本にこう書いてあったのを読んだからです。

「久さん（様々な困難の後、NPOの相談にたどり着いた方）の記憶にあるのは、苦しかった時に社会から受けた仕打ちだ。寝る場所がなく、教会に駆け込んだことがあった。牧師は、『ここはみんなの場所だから寝させてあげるわけにはいかない。その代わり、祈ってあげるから』と言って追い出した。」

私はこれを読んで、いきなり平手打ちされたような衝撃を受けました。恥ずかしさで顔が真っ赤になる思いでした。しかし、この事実に向き合わなければ、神様と子どもたちの前で偽りの人生を送ることになると思いました。そして天国の入り口で問われるだろうと……。

私は毎晩の家庭礼拝で、こう祈っていました。「住むところ、食べるものに困っている人をどうぞ助けてください。」この祈りを、口先だけのものにする訳にはいかなかったのです。どうしても真実な祈りにしたかった。子どもたちの前で、真実なクリスチャンでいたかったのです。

本当に、自分にそれができるのか、不安ももちろんありました。しかし、その後も繰り返し同じ祈りをするうちに、私が行こう、と思えるようになりました。すると、口先だけの祈りから解放された平安がやってきました。

私の背中を押してくれたメッセージを紹介します。坂戸教会のキム・キョンヒ協力宣教師

が、2010年元旦礼拝の後にプレゼントしてくれたQTガイド（Quiet Time……黙想のための本）にこう書いてありました。

3月24日

……私たちは、クリスチャンの集まりの中では「善良で忠実なしもべ」でれますが、世の中では、助けの必要な「弱き者」を見て見ぬふりをする「多忙で悪徳な」宗教人にもなりえるのです。誰のために忙しくし、誰のための働きでしょうか。私たちはこれ以上、教会の中の親しいクリスチャンだけと付き合う、霊的な色事をやめなければならないのです。

4月14日

……しかし、私たちは隣人が滅びいくのに自分たちが箱舟の中にいることを喜び、パーティーを開いているのではないかと考えさせられます。……教会は、箱舟を乗り越えて隣人のために泣きながら出て行くべきなのです。

私に訪れた変化は、すべてのクリスチャンに当てはまる訳ではありません。神様が与えてくださる動機が、それぞれ違います。私の場合は、今の日本の状況を考えて、四人の子どもの内、将来、派遣切りにあったり、過労死させられたり、ワーキングプアになってしまう者がいるかもしれない、と切実に思ったのがきっかけです。長男が12歳になり、10年後には社会に出ます。10年後の日本が少しでも良くなっているように、そして日本のすべての子どもたちが安心して暮らし、必要な教育を受けるために、底辺から世の中を変えたい。そのために私の次の10年を使おうと思ったのです。それは私が神様からいただいたテーマです。

一人ひとりが神様から与えられたテーマに誠実に取り組むとき、イエス様が望まれるように世の光となり、子どもたちも地域の人々も、教会を、クリスチャンを魅力的に感じるようになる

でしょう。恵みに押し出されて、助けの必要な人々の友となるために、世の中に出て行こうではありませんか。（マタイ25章31節以下）

《発題 (3)》

「わたしの経験から」

稲田正平（東京教会長老）

今回、中会教育委員会から「契約の子の教育に対する信仰と姿勢」というテーマで発題をしてほしいとの依頼を受け、安請け合いをしてしまった感がありますが、自分の普段考えていることを述べ、発題に変えたいと思います。

1 東京教会での契約の子の教育

教会による契約の子の教育と言いますと、何か特別なことに取り組んでいるのではないかと想像される方がおられるかもしれませんが、東京教会は私が知る限り何も特別な取り組みをしてはおりません。初代の矢内先生から現在の今井先生に至るまで、CSの体制はほとんど変わることなく現在に至っております。また、クリスチャンにとって、信仰を養うために最も重要な主の日の礼拝に、親も子も共に礼拝を捧げることも、教会が設立されて以来変わらずに今に至っております。しかし、「特別なことをしているわけではない東京教会には、目には見えない何かがあるので、それを語っていただきたい」と教育委員会の鈴木先生に言われ、私なりに考えてみました。

私どもの教会は、会員が教会の近辺には住んでおらず、約1時間をかけて四谷に通っております。そして、大人も子供も共に10時半からの朝の礼拝を捧げ、昼食をはさんで、子供たちはCSに参加します。その後、子供たちはそれぞれ教会内で遊びながら、大人の集会などが終わるのを待って、だいたい3時過ぎから4時ぐらいに教会を後にして帰宅します。私が幼かったときから、このような主の日の過ごし方は何ら変わっておりません。あえて違いがあるとす

れば、私が幼い時はCSが9時から始まり、10時から朝の礼拝、午後は子供どうしで遊んで、大人の集会の終わりを待っているような日曜日の過ごし方でした。

教会が何か特別なことをとと言われて思い起こすのは「これからの教会」というテーマで、機会があるごとに協議会が行われていたことです。私が幼かったときのことはわかりませんが、高校生や大学生になったころには、毎年というわけではありませんが、協議会でこれからの教会をどうしていくか、また、信仰の継承についての話し合いがもたれていました。こうした機会をとおして、教会によってさまざまに方策を立てて、契約の子の教育を考えていたのだと思います。ただ、主の日の礼拝は親も子も一緒に礼拝を捧げるという一貫した姿勢は変わっていません。

2 自分自身を振り返って

二つ目に入ります。私自身がどのように教会で育てられてきたかについてです。幼い小学生のころは、9時からのCSに間に合うように、8時前には親と家を出て教会に向かっていきました。CSでは礼拝と分級があり、分級の担任は、今では引退された長老さんや青年会の方々でした。テキストが難しく時折、憂鬱になることもありました。中高生になると、矢内牧師との聖書の輪読。時には矢内先生とマンツーマンで聖書の輪読ということもありました。また、同年代の仲間が多く中学生会、高校生会といったグループができ、午後には聖書研究などの例会を行っていました。そして、連合高校生会の集会やキャンプへの参加も楽しいものでした。

しかし、今も問題として取り上げられる、習い事や部活動、塾などと教会生活とのかかわりは、当時も話題となりました。私自身も部活動で日曜日に礼拝にいけないことがあり、一応、日曜の練習や練習試合には参加せず、公式戦だけ部活にいくように決めていましたが、同じ部

活の者や顧問から、「練習には参加しないくせに公式戦だけは参加するのか」と嫌味を言われたこともあり、少し心が折れそうになったこともあります。

教会の高校生会で話し合い、「朝の礼拝に出られなければ、夕拝に出よう。」「礼拝出席が叶わないなら、家で聖書を読み祈る時間をしっかりもとう」などの取り決めをしました。それからは、試合が終わってから夕拝に行くということが何度かあったと思います。

また、先ほど述べた「これからの教会」という協議会の話し合いを受けて、中高生から青年層の信仰教育の観点から、水曜日の祈禱会で奨励するように言われ、中高生の伝道について話をしたり、また、青年になると夕拝の司会をしたり、教会の方針に沿って教会内の奉仕が多くなっていったこともありました。また、中学生になると説教をメモするように親から言われ非常に難解でかつ長い説教に耳を傾けることになりました。いつからかは覚えていませんが、子供は一番最前列の席で礼拝を守ることになりました。これはかなりの苦痛を覚えたと思いますが、やはり同年代の仲間がいたからできたのだと思います。

私自身は高校二年生の時に信仰告白をしました。が、連合高校生会や学生会、連合青年会での学びや交わりによって多くの恵みを与えられたと思っています。私が学生、青年のころは、学生会では大会的な学びをということで、主に宣言の学び、連合青年会では中会の課題についての学びをするというように、一定の方向性がありました。また、修養会などで、同じクリスチャンホームに育った仲間や、自ら求道し受洗に至った仲間との交わりは多くの刺激を与えられました。生まれた時から教会にかよい、主を讃美し聖書を読むことができた幸いがいかに大きく、そして、信仰告白をしてからも、教会に行くことが何となくの習慣になっていて、それになかなか気づくことができない弱さを実感さ

せられるようなことが多くありました。

また、忘れてはならないのは親の姿勢です。これは後になって知ることになるのですが、なぜ父親は厳格に主の日の礼拝にこだわるのか、安易に礼拝を休むことを子供に許さなかったのか……、私の父は晩年、「信仰が個人のレベルでとどまっていることが日本のキリスト教の弱いところの一つであり、親から子へ、子から孫へと、途切れることなく信仰が継承されることが願いである」と述べていました。これを聞かされたのはつい3年前ですが、父がこのように考えていたとは全く知りませんでした。今、小学五年生の子供を持つ親として、このことを考えると、与えられている責任の重さを感じます。

3 自分の子供の信仰の成長について考えていること

さて、最後の三つ目、私が親として子供の成長をいかに考えているかです。先ほど述べましたように、父の考えをそのまま受け取るには、いかに責任をもって子供の信仰を育てていくかが問題です。私の息子はいまミニバスケットボールのクラブチームに入っています。また、娘はなぜか空手を習っています。毎週の日曜日にはミニバスの練習や試合があり、息子はミニバス仲間からいつも来るように誘われています。また、娘は昇級審査が日曜に開催されることがあり、教会を休むことがあります。家庭では特別なことがない限り、教会は休まないことを約束としています。東京教会も子供の数が多いとは決して言えません。息子は年代が近い男の子もいないので、少々つまらないこともあるようです。ただ、二人の子供とも教会に行くことがいやだとは言いません。親に逆らえな

いから？ というのもあるからかもしれませんが、今のところ教会に行くことに抵抗はないようです。また、私が夕拝まで出ていますと、別の部屋で夕拝が終わるのを待っています。それぞれに何かをしながら夕拝の終わるのを待っているようです。子供たちが教会に魅力を感じられることがこれから大事になっていくと思われます。我が家の二人は今年の夏、初めてサマーバイブルキャンプに参加しました。同年代のお子さんたちとふれあい、また、中高生のお兄さんやお姉さんたちと楽しい一時を過ごしたようで、「来年も参加する」と言っています。こうした機会を大切にしていきたいと願っています。

この後、中学生、高校生と成長していくとともに、部活動との兼ね合いなどで、親子でじっくり話し合わなければならないだろうと考えていますが、基本的には、幼い時から主にあって選ばれ、主を讃美し、聖書を読み祈る喜びが与えられていることを熱心に伝えていきたいと思っています。私どもの子供はこれから難しい思春期や反抗期を迎えますが、子供とはじっくりと主の恵みと礼拝に出席することの大切さを伝えていきたいと思っています。私が教会と親によって一人の信仰者として育てられたように、私の子供たちも育てていきたいと願っております。

※これは、2010年11月14日(日)に開催された「第2回東部中会教会教育研修会」の記録の後半です。基調講演と発題(1)は前号に掲載しました。初出は東部中会機関紙『まじわり』2011年5月号。掲載をお認めくださった関係者の皆様に感謝を申し上げます。



副読本のご案内

『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

❶ 人生の目的―神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました。一わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのだ、知らずにいるのとは、やはり生きがたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は瞬間にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身の何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあがめます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに11年目に入り、第44号まで発行して参りました。中部中会ではほとんどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円／年
送 金 先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

私たちの信仰の本質と、教会の本質とがこの御言葉の中に現されている。

(1) 主イエスの問いかけへの人々の反応

(13～14節)

「イエスとは誰か」ということについて、この時人々の間に定まった見方はなかった。ここで述べられている様々な反応は、確かに主イエスの中に神の働きを見る好意的な声ではあったが、同時にイエスはキリスト（救い主）ではなく、メシアには及ばないという留保付きの声であった。

(2) 主イエスの問いかけへのペトロの応答

(15～17節)

しかしペトロの口が、イエスを救い主メシア、つまりキリストであると真理を告白した。イエスがメシア・救い主であり生ける神の子であるということ、これこそ信仰の本質を表す告白である。信仰とはこの事実を告白し信じることである。そしてこの告白がペトロの口から突如発せられたことの裏には、神の導きがあった。イエスが神であり救い主であるという告白は、私たちの内側に宿ってくださる神が、そこまで私達を導いてくださるゆえに成せる告白である（コリントー12:3）。主イエスへの正しい信仰告白は、それを告白している者が既に神に結び付けられていることの証明である。

(3) 主による教会の建設（18～20節）

主イエスが語られたペトロへの御計画とは、彼を教会の礎とするという厳かなものであった。カトリック教会はこの箇所を教皇制度の根拠とし、教皇はペトロの職務を受け継ぐ者であり、教皇こそが教会の土台であるとしてきた。しかしプロテスタント教会はペトロの告白とその信仰こそが、

教会の土台であると理解している。しかし何より重要なことは、その信仰という土台を据えてくださるのが主であるばかりか、さらにその土台の上に教会を建て上げてくださるのも、他ならぬ主御自身であるということである。教会は主のものであり、そうであるからこそ「陰府の力もこれに対抗できない」のである。「陰府の力」とは死の神である「ハデスの門」という言葉であり、当時人は死によって、決して帰ってくる事の出来ない死者の国のその門の中に閉じ込められてしまうと考えられていた。しかし主の教会において、人間にとって克服不可能な死の力さえも無力なものとなるのである。「つなぐ」とは「排除する」、つまり禁ずるという意味を持っており、一方「解く」とは「許可する」、つまり天の国への入場を許すという言葉である。すなわち教会は、天国の門を地上において開閉させ得る程の重要な存在なのである。

ペトロはこの後、この告白にもかかわらずその同じ口から、「私は主イエスを知らない」と三度も語った。彼は主に信仰を言い表しながらも依然として弱さの中にあったが、主はペトロの告白と、彼への約束を無にはされなかった。主はペトロの罪を十字架によって清算し、すべてを赦して下さり、ペンテコステの日には彼に聖霊を注いで、彼を約束どおり教会の土台として用いてくださった。

このペトロの歩みを、彼の上に建てられた私たちの教会もまた歩む。教会に集う私たちは、弱く不確かな者であるが、教会を建て上げ、今もその上にかしらとして立たれている方は、唯一確かなお方である。私たちと教会はこの方によって立つ。

（吉岡契典）

※第24号（1月28日聖書研究）からの再掲載です。

テキスト マタイによる福音書 16章13～20節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問67

〔単元のねらい〕

この箇所要点は、ペトロすなわち岩とは何を指しているのかを正しく理解するところにある。ローマ・カトリック教会はペトロその人を岩であるとし、それゆえここをペトロの後継者たるローマ教皇の権威を証明する箇所と見なす。しかし、そうではない。岩とはイエス・キリストをメシアと告白する信仰であり、さらにはイエス・キリストご自身である。教会はキリストを岩としているからこそ、その歩みは揺らぐことがない。その大いなる幸いを覚えたい。

「わたしたちの岩であられるイエスさま」

あるとき、イエスさまは弟子たちにお尋ねになりました。「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」(15)

イエスさまをどのようなお方として信じ、仰いでいるか。このことはわたしたちにとっていちばん大切なことです。なぜならイエスさまを正しく信じる信仰によって、わたしたちは救われるからです。イエスさまのことを、偉大な人ではあるけれども人間のひとりにすぎないと考えていた人々もあります。けれどもイエスさまは、どんな人間ともことなります。このお方はまことの神さまがまことの神さまであられるまことにまことの人となられたお方です。そのようなお方であられるからこそ、人を罪から救うまことの救い主であられるのです。

「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」—この問いかけに、弟子たちはどう答えたでしょうか。シモンがこのように答えました。「あなたはメシア、生ける神の子です」(16節)

正しい答えです。イエスさまは生ける神のみ子、人を罪から救う救い主であられます。

イエスさまはこのシモンの答えをたいへんお喜びになりました。そして彼におっしゃいました—そのように答えることができたあなたは幸いな人です。そして、あなたの答えは人間が導き出したものではありません。あなた自身が答えたものではありません。天の父なる神さまが導いてくださっ

たからこそ、あなたはわたしについてこのように信じ、告白することができたのです。

このとき、イエスさまは彼に、「ペトロ」という新しい名前を与えてくださったのです。

ペトロとは「岩」という意味です。このときからシモンは「岩」と呼ばれるようになったのです。ただ、ここでわたしたちはよく理解をしなければなりません。彼が「岩」と呼ばれることは、どういう意味なのかということなのです。

これは、シモン・ペトロが岩のような存在だということではありません。この人が岩のように頑丈で、強く、揺るぎない人であったということではありません。この人自身はわたしたちと同じように、ひとりの人間にすぎません。弱く、無力で、頼りない人間にすぎません。

では、なぜ彼は「ペトロ」—「岩」と呼ばれるのでしょうか。それはイエスさまを正しく信じ、告白したからです。ここでイエスさまを「あなたはメシア、生ける神の子」と告白したのは、ペトロひとりではなかったのです。イエスさまの弟子たちは、みな同じようにイエスさまを信じていたのです。その弟子たちがみな分け持っていた信仰の告白を、ペトロは代表するしかたで言い表したのです。

そして、イエスさまをそのように信じ、告白するところに教会があるのです。イエスさまは「こ

の岩の上にわたしの教会を建てる」(18節)とおっしゃいました。教会はどこに建てられるのでしょうか。岩のように揺るぎない教会の礎、土台とは何でしょうか。それはそこに集っている人々の力や知恵や、立派さや有能さといったものではありません。教会がその上に建てられている岩とは、イエスさまを信じる信仰です。「あなたはメシア、生ける神の子」との信仰告白です。もっと言うと、メシア、生ける神の子であられるイエスさまご自身です。

人間の力、人間の知恵、人間のわざを土台としているかぎり、教会はいつも頼りなく、ゆらゆら揺れ動くほかはありません。この世の力に負けてしまうほかはありません。けれども、イエスさまが教会の岩であってくださいます。信じる者たちをしっかりと支え、守ってくださいます。そ

れゆえ、教会の歩みは揺らぐことはないのです。この世のどのような力にも勝利するのです。

わたしたちは自分の力で何かをなしとげなければならぬとか、自分で力んでもちこたえなければならぬというではありません。信仰とは自分自身ではなく、イエスさまを岩とすることです。イエスさまの偉大な力により頼むことです。岩であられるイエスさまに、わたしたちの命と人生のもといを据えることです。

新しい年の歩みが始まりました。この一年も、イエスさまがわたしたちの岩であってくださいます。それゆえ、わたしたちは心強いのです。「あなたはメシア、生ける神の子」—このようにイエスさまを信じ、告白する信仰が与えられていることは何と幸いなことでしょうか。この一年も、ともにこの信仰に生きていきましょう。(木下裕也)

〔今週の暗唱聖句〕

詩編 62編7節前半

神はわたしの岩、わたしの救い、砦の塔。



〈ねらい〉

幼稚科の子供たちには、比喩的な理解はまだ難しいと思い、ペトロという名、“岩”が何を意味するかについては省きました。もし語るとしたら、「ペトロは岩という意味。それはペトロが岩ではなくて、岩のように頑丈で頼りになる神様が共におられるということ。イエスさまのことをキリストとお呼びする私たちにも、岩のように頑丈で、頼りになる神様がいつも共にいてくださいます。」という語り口になるでしょうか。

〈展開例〉

【お話】

ある日、イエスさまは弟子たちと山の上にいました。鳥はさえぎり、さわやかな風が吹いていました。すてきなピクニックみたいな日でした。その日ペトロさんはイエスさまからほめられました。どうしてかというと、ペトロがイエスさまのことを「メシア」とお呼びしたからです。

わたしたちの教会に来る人はみんなイエスさまのことをメシアと信じています。メシアとは「救い主」という意味です。おかあさんのことをおとうさんと呼ぶのはへんですね。おとうさんをおかあさんと呼ぶ人はいますか。幼稚園（保育園）の先生のことを総理大臣と呼ぶ人はいますか？ やっぱり先生のことは先生とお呼びしなければいけません。おなじようにイエスさまのことを、メシアと正しくお呼びしなければいけません。そうお呼びするとイエスさまは、「よく言えましたね！ あなたは幸せだ！」と言われるでしょう。さあみんなでイエスさまのことを「救い主」イエスさまと正しくお呼びしましょう。

【祈り】

私たちのメシア、イエスさま。あなたを救い主と信じます。これからもわたしたちを守ってください。わたしたちのお母さん、お父さん、兄弟、

姉妹もみんな守ってください。イエスさまのお名前でお祈りします。アーメン。

〈幼稚科カテキズム（イエス・キリスト）〉

* ハつ切り画用紙などの表裏を使って作成します。クラスの小道具として毎週用いてください。かわいい絵なども添えて素敵なカードにしてください。

いえすさまは、
めしあ

すくいぬしです

〈暗唱聖句カード〉

* 堅めの紙にコピーして利用してください。他科にも利用できます。カラー版は日本キリスト改革派豊明教会 HP からダウンロードできます。

いえすさまは めしあ



あなたは^{めしあ}メシア。生ける^{かみ}神の子^こです。（マタイ^{またい}8:4）

ねらい

カルヴァン派では、12歳頃に信仰告白することが期待されていました。多分、少年少女時代こそ、信仰の姿勢を教え告白する最適の時期であると考えたのでしょう。親が信者の子女は信仰告白する機会が与えられることを祈りつつ、神の働きを信じて教えていきましょう。告白を導く方は神であることを確認しつつ祈りましょう。

展開例

フィリポ・カイサリア地方は異教の地で、多くの偽りの神々が存在していました。そのような中で、イエスはあえて弟子たちに「人の子」（イエス様を指している名称）を誰と考えているかと質問しました。

この「イエス・キリストって本当は誰なのか」という質問はたいへん難しい質問です。イエス・キリストについて説明している聖書か

ら学ぶ以外に道はありません。なぜなら、「聖書はわたしについて証しをするものだ」（ヨハネ 5:39）と書いてあるからです。ですから、自分で考えてもわからないとき、聖書から学んでイエス様は誰なのかを学びます。

この聖書の学びを続けていくことが、神様ご自身がその人に啓示（教えて）くれることなのです。「イエス様が生きた神の子です」と理解できることは、天の父なる神様がその人に神の聖霊を通して教えてくれたことと同じことです。そうして、ペトロのように信仰告白することができます。そして、神の教会の一員に加えられるのです。

祈り

ペトロは多くの神々が存在する中で、神様から教えられて信仰を告白しました。私もイエス様を聖書から教えられて信仰告白できるように導いてください。

～ 話し合ってみよう ～

奈良の大仏とイエス様との違いは何でしょうか？



自由メモ

**聖書日課**

マタイ 16:13～20

暗唱聖句

神はわたしの岩、わたしの救い、
岩の塔。

わたしは動揺しない。

（詩編 62:7）

〈ねらい〉

- ① イエスさまのご生涯の目的の一つは、この地上で父である神さまを、弟子たちにお示しになり、それによって、ご自身が神の子であることを知らせることでした。さらにもう一つの目的は、ご自身が救い主であり、永遠の命をお与えになることができることを知らせ、そのことを約束し、それを成就することでした。このことによって弟子たちを「あなたはメシア、生ける神の子です」という信仰告白へと導かれたのです。
- ② キリストの教会は、このイエスさまの約束によって生まれ、イエスさまが宣べ伝えられた神の国の福音が語り継がれ、「あなたこそメシア、生ける神の子です」という信仰が告白し続けられるために建てられているのです。「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」と宣言されたとおり、イエスさまご自身が、わたしの教会をこの岩の上、つまり、この信仰告白の上に建てられたのです。
- ③ 「あなたはメシア、生ける神の子です」という信仰告白も、イエスさまが約束された教会も、すべては人間によるものでなく天の父によるもののなのです。

〈展開例〉

- (1) イエスさまは弟子たちをどのように教え導かれたのでしょうか。弟子たちはいつもイエスさまといっしょに生活をしていて、イエスさまの生きている姿のすべてを間近で見て、その語られている言葉を聞き、病人をいやし、弱い人た

ちや罪ある人たちに寄り添い、愛されておられるイエスさまを自分の目で見、耳で聞き、この方こそメシアであり、生けるまことの神の子だと信じるようになっていったのではないのでしょうか。イエスさまは、弟子たちに父である神さまを示され、話されました。この生き方こそ、父である神さまの栄光をあらわし、永遠に父である神さまを喜ぶ完全で最高の生き方でしょう。

(2) 聖句

ヨハネによる福音書14章9節、「わたしを見た者は、父を見たのだ。」

ヨハネによる福音書16章25節、「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。」

ヨハネによる福音書10章38節、「父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るであろう。」

- (3) わたしたちの人生のおもな、最高の目的である、神の栄光をあらわし、永遠に神を全く喜ぶ生き方こそ、このイエスさまの生き方から学ぶことができるのではないのでしょうか。このイエスさまを地上の生活の中で示すことこそがわたしたちの究極の歩みなのかも知れません。

「あなたのそばにいと、イエスさまの香りがします」と言われたいと思いませんか。



対話の手掛かりとして……

①フィリポ・カイサリア地方は、風光明媚な場所です。主イエスは、大事な問いを投げ掛けるために、わざわざ弟子たちを静かな場所に連れていかれました。主が尋ねられたことは「人々は、人の子（イエス）のことを何者だと言っているか」という問いです。どうしたら私たちはクリスチャンになることができるのでしょうか。様々な言い方ができますけれども、ここで教えられるひとつのことは、主イエスからの問いかけに答えることです。しかもその問いとは、「イエスとは何者か」という問いです。クリスチャンになったら、あなたはどのように変わるのかとか、クリスチャンになったら何をするのかといった決意表明を問うものではありませんでした。

②人々は、「洗礼者ヨハネ」「エレミヤ」「預言者の一人」と、色んなふうに答えます。しかし、大事なのは、「それでは、あなたがたは……」とあるように、他の人が何を言うのかということではなく、「あなたがたは」「あなたは」何と答えるのかということです。主イエスはあなたにとって、どのようなお方なのでしょう。色々と話し合ってみてもよいでしょう。

③弟子を代表してペトロは、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えました。「あなたは私たちの救い主です」と告白したのです。主イエスはこのことをたいへんお喜びになられ、こうおっしゃいました。「あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。」つまり今、あなたが告白した言葉は、天の父なる神さまの導きによるのだということです。弟子たちは、これまで主イエスに従い、主の言葉を聴き、主の奇跡を見てきました。私たちもまた、聖書を通して、様々な主イエスのお姿を見てきたことでしょう。弟子たちは、主に従う中で、この方こそ待ち望んでいたメシアに

違いないという確信が与えられたのでしょうか。しかし、信仰を告白するというのは、私たちの側の確信に基づいて生れるものではありません。天の父が、聖霊を通して与えてくださる賜物なのです。

④「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。」「この岩の上」とは、ペトロが告白した言葉のこと、つまり「イエスこそ私たちの救い主」という告白です。ところで、ペトロという名前は、「岩」という意味です。しかし、すぐあとに明らかになるように、「岩」と呼ばれたペトロは、イエスがどのような意味で救い主であるのかが十分に理解することができず、主から「サタン」と呼ばわりされてしまいます。やがて、「イエスなど知らない」と裏切ってしまう罪深さを抱えている岩でもありました。それはペトロだけではなく、他の弟子たちも、また私たちも同じもろさ持っているのではないのでしょうか。しかし、その上でなお「わたしの教会を建てる」とおっしゃってくださった主イエスの言葉に励まされる思いがします。また、そのために十字架で命をさげてくださいった主の恵みを覚えましょう。

⑤「陰府の力もこれに対抗できない」(16:18)。「陰府」とは「死の力」のことです。人生の最後には、必ず「死」という大きな門が待ち構えています。その先に、誰も命を見出すことはできません。地上でいくらこの世的な成功や実績を積み重ねてきたとしても、死を前にして立ちすくむしかない私たちです。しかし、イエスを私の救い主と信じる者たちには、死に打ち勝つ力が与えられています。十字架で死に、三日目によりみがえった主を信じる者たちは、死を克服してくださった主イエスの命の希望を見て、安心して死ぬことができます。キリスト教会は、死を越えた確かな希望の門が開かれている場所なのです。

テキスト マタイによる福音書 16章21～28節

公の宣教が最盛期（10章1節～16章12節）を迎えた後、16章13節から、十字架へ歩む姿がよく表れ始める。ここの内容は弟子たちが対象。異教の只中のフィリポ・カイサリア地方で、弟子たちはキリスト告白をしたが、彼らの理解や働きはまだ不十分だった。

〈受難予告とペトロの無理解（21～23節）〉

「このとき」とはペトロの信仰告白がなされた時であり、主イエスにとって重要な転機であった。ここで最初の受難予告がなされ、以後繰り返される。罪を贖うための受難はメシアとして絶対不可欠の働きであり、「必ず」と言われる。

ユダヤ人最高議会サンヘドリンの構成は、長老、祭司長、法律学者の三者による。この三者の登場により、公の議会の意思であることがわかる。この三者の名が同時に出てくる場面は、受難予告と、主イエスが捕らえられる場面、また十字架の場面だけである。

三日目とあるが、ユダヤでは日数を数え始めたその日を起点とする。

人々の考えていたメシア像は、異邦人と戦ってユダヤ人たちに勝利をもたらすメシア像だったが、本当はメシアが長老・祭司長・長老たちに殺されるのだと、主イエスは教えた。また、復活することも教えた。

ペトロは善意からいさめ始めた。「始める（ギリシャ語 アルコー）」は、支配する、治める、とも訳せる言葉である。十字架へと歩む苦難の道を歩むことが、救い主メシアとしての働きであった。そこから道を外れさせ、苦難にあわないように指示したり、支配しようとすることは、4章1

～11節のサタンの誘惑や、ゲツセマネの園で襲われた誘惑と同じである。

ペトロは善意でしたことだったが、以上のことから、善意ですら罪にならない、という考えは違うことが分かる。ペトロは、メシアがこの苦難を必ず受けなければならないことを理解していなかった。ペトロの無理解が前面に出ている。ペトロは神の御心ではなく人間的な同情に従って動いた。メシアであることが何を意味するかはわからなかったのである。

〈イエスに従うこと（24～28節）〉

ここは10章38～39節の言葉の発展。苦難と死はメシアだけではなく、弟子になろうとするものも覚悟すべきものである。私たちは大きな決断を迫られるが、それはただ苦しいままで終わるのではなく、復活の栄光に連なる栄光ある歩みである。

「自分を捨てる」とは、直訳すると自分を否定すること。ペトロが三度否んだ「知らない」という語にも同じ原語が使われている。自分が築いてきた持ち物や地位や名誉などに頼って生きることを止めるのである。止めないまま主イエスに従う道は残っていない。「自分の十字架を背負って」とは、何かの重荷を負うという意味ではなく、死の宣告を受けた者の立場に立つこと。「自分の命を救いたいと思う」とは、自分を捨てず、自分の十字架を負わないことと同じ。自分の命は、全世界という莫大な価値をもってしても、贖うことはできない。

主イエス再臨の日、裁きの座において、主イエスに対する応答が問われ、人間は天国と地獄のどちらかに振り分けられる。（酒井啓介）



テキスト マタイによる福音書 16章21～28節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問28

〔単元のねらい〕

十字架の言葉はこの世にあっては愚かであり、つまずきである。ペトロもまた十字架の言葉、十字架につけられるメシアの愚かさにつまずいた。しかし、主イエスは彼の目をも開いて、十字架をとおして世を救う神のくすしいご計画をさとらせてくださった。神の道と人の道とはことなる。神の道をさとる知恵ある者でありたい。そして、十字架の主に従っていく者でありたい。

「神さまのご計画」

イエスさまが弟子たちに「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」とお問いになり、ペトロが弟子たちを代表して「あなたはメシアです」と答えたことを見ました。このときからイエスさまは弟子たちに、ご自分が多くの苦しみを受け、十字架につけられて殺され、三日目に復活することになっていることを弟子たちに打ち明け始められました。

イエスさまは十字架に死なれ、三日目に復活することに「なっている」。つまり、もうこのことは変えることができない、避けることもできない、かたく定められたことであつたのです。なぜなら、これは父なる神さまがお決めになったことだからです。ひとり子イエスさまが苦しまれ、死なれ、よみがえられる。これは、神さまがこのことをとおしてこの世を、わたしたちをお救いになるために、すでに永遠から計画しておられたことなのです。

イエスさまはこれから、父がお定めになったそのご計画にしたがって歩いていかれます。そして弟子たちにもそのことをはっきりとお話しになったのです。これからわたしは十字架への道を歩んでいくのだ、父なる神さまのみこころに従って歩んでいくのだと、まっすぐにお語りになったのです。

このイエスさまのみ言葉を聞いて、弟子たちはどうしたのでしょうか。「あなたはメシア、生ける神の子」とイエスさまへの信仰を告白したばかり

のペトロは、イエスさまをわきへお連れして、いさめ始めたとあります(22節)。あなたは何ということをおっしゃるのですか。あなたのようにご立派な方、力のある方が、そんなみじめな道筋を通られるなど、あってはならないことではないですか—そのように言ったのです。

するとイエスさまはペトロに言われました。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」(23節)。

ご自分の弟子のペトロに、イエスさまはサタン、と呼びかけられたのです。びっくりすることです。ペトロとしてはイエスさまを思っていたことなのに、そのペトロをサタンと呼ばれるなんて、と思うかもしれませんね。

けれどもよく考えるなら、確かにこのときにペトロのうちにサタンが身を宿していたのです。サタンとは、人を誘惑して神さまから引き離す者です。サタンは人が神さまのみ言葉を聞くことをじゃまして、み言葉よりも自分のはかりでためし、はかり、判定するようにとそそのかすのです。ペトロは確かに、このときにそのようでした。ペトロは人間にすぎないのに、イエスさまの上に立っていたのです。神さまのことではなく、人間のことを思っていたのです。

そのペトロに、イエスさまは「サタン、引き下がれ」と仰せになりました。「引き下がれ」とい

うのは、わたしの目の前から立ち去ってしまえということではありません。わたしの前に立つのではなく、わたしのうしろにまわれということです。わたしに従えということです。これこそが、イエスさまを信じる姿勢です。

ペトロがイエスさまをいさめたのは、十字架につけられるイエスさまのすがたが、自分の期待していた救い主、偉大で立派な、英雄のような救い主のすがたからあまりにもかけはなれていたためです。それはあまりにもみじめで、無力な救い主のすがたであったからです。

けれども、このときにすでにペトロは、イエスさまの上に立っていました。それで、先生が生徒をしかるようにして、また親が子供をしかるようにして、イエスさまをしかったのです。ペトロはイエスさまを、自分の思うとおりに自分を救ってくれるお方だと思っていたのです。イエスさまを自分の後ろにしたがえることができるとさえ考えていたのです。

そうであるかぎり、まだペトロにはイエスさまの本当のすがたが見えていなかったと言わなければなりません。父なる神さまがイエスさまをとおしてこの世をお救いになる、その救いのご計画がわかっていなかったと言わなければなりません。

彼は「あなたはメシア、生ける神の子」と告白し、この信仰告白をイエスさまはお喜びになりました。でも、この信仰告白の本当の意味を、このときにはまだ理解していなかったのです。よみがえられたイエスさまが彼と出会ってくださったときに、ペトロは本当の意味でイエスさまがメシアであられ、神の子であられることを理解したのです。

イエスさまは、わたしは道であり、真理であり、命であると仰せになります（ヨハネによる福音書14章6節）。イエスさまは真理であられ、イエスさまのもとに命があります。救いがあります。では、わたしたちはどうしたら、真理を見出し、命を得ることができるのでしょうか。救いを見ることができるのでしょうか。

イエスさまのうしろにまわることによってです。イエスさまのみ後に従っていくことによってです。そのとき、わたしたちの目にイエスさまのすがたが見えてきます。この世を救う神さまのご計画のすばらしさが見えてくるのです。イエスさまがわたしたちの目を開いてくださるのです。

（木下裕也）

〔今週の暗唱聖句〕 コリントの信徒への手紙一 1章18節

十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、
わたしたち救われる者には神の力です。



〈ねらい〉

ペトロの失敗を通して、メシア、救い主イエスさまの大切な働きである十字架と復活を語ります。イエスさまの厳しい叱責も、ペトロをサタンの誘惑から救うためでした。

〈展開例〉

【お話】

イエスさまにほめられたペトロさん。とっても嬉しかったでしょうね。でも人間って、ほめられると「えっへん！ 僕ってすごいんだーっ」なんて思うようになります。でもそういう時、気をつけましょうね。サタンがさっと心に入ってきて悪いことをさせようとするからです。ペトロさんの心に、サタンがこっそり入ってしまったのです。その時イエスさまは言われました。「わたしは兵隊たちにつかまり、十字架の上で死刑になります。そして三日目によみがえります。」ペトロはこれを聞いて、イエスさまのことをしかりました。「イエスさま。なんてことを言うのですか。あなたは救い主です。死刑になってはいけません。」弟子であるペトロが、キリストであるイエスさまを叱ってしまったのです。するとペトロはイエスさまにこう言われてしまいました。「サタン！ 引き下がちなさい！ あなたはわたしのじゃまをしている！」サタンって悪魔のことです。ペトロはサタンと呼ばれてしまいました。ペトロはドキッとしたことでしょう。そしてイエスさまにごめんなさいとあやまりました。するとサタンはペトロの心から出てどこかへ逃げてゆきました。ペトロはイエス様のおかげで、サタンから助けだされたのです。イエスさまが十字架に付けられて死刑になることは、救い主キリストとして、どうしてもやらなければならないことでした。イエスさまのお働きを邪魔してはいけません。そしてイエスさまはその通りになさり、しかも三日目によみがえら

れました。わたしたちもイエスさまの十字架とよみがえり（「復活」といいます）を信じましょう。

【祈り】

主なる神様、わたしたちを、サタンから、守ってください。そして、イエスさまの、十字架と、よみがえりを、信じることができますように。イエスさまのお名前で、お祈りします。アーメン。

〈幼稚科カテキズム（十字架・復活）〉

イエスさまは、
じゅうじかの
うで しに、

みっかめに、よ
みがえられま
した。

〈暗唱聖句カード〉

さたん、ひきさがれ



あなたは、神^{かみ}のことを思わず、
人間^{にんげん}のことをおもっている。
(またい^{またい}8:4)

ねらい

人間の命だけでなく、すべての命は食物連鎖と言って、他の命を食べて生きている。命は孤立しては死である。他者との関係の中でしか、命は生存できない。これは生物学的事実である。神と人間との関係も同様である。神の命による供給がなければ、人間は霊的に死ぬ。人間の命は、神の命である霊の助け(神の息)によって生きたものとなっている。だから、神に従えば命を得て、神から離れて孤立したら死である。

展開例

人の命は全世界よりも重いとよく言われます。「人は、全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があらうか。」イエス様もこう言われました。全世界も欲しいし、自分の命も失いたくないと思います。そのためには、何よりも神に従うのが賢明なのです。なぜなら、世界も人間もすべて神の作品であっ

て、神の所有物であるからです。ですから、賢い人は、神に従うことによって、自分の命も、そして地を受け継ぐこともできるのです。愚かな人は神を信じない人です。なぜなら、神を無視して自分の命だけを自分のものと考えて抱え込む人は、結局、自分の命も世界も同時に失うからです。

すべての所有者である権威ある神が、世界と人の救いのためにご自分を捨てて十字架に架かれた以上、人間はなおさら、小さな自己中心の自分を捨て、神と世界のために自分を犠牲にする心構えこそ、すべてを得る秘訣なのです。

祈り

自分中心の小さい自我を十字架につけて、イエスを信じて生きる大きく豊かな自分になれるように、自分を新しく造り変えてください。イエス様に従う人が自分を豊かにできる秘訣であることを教えてください。

～ 話し合ってみよう ～

なぜ、自分中心の行動をすると損をするのか話し合ってみよう。



自由メモ

**聖書日課**

マタイ16:21～28

暗唱聖句

十字架の言葉は、減んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。

(コリントー 1:18)

〈ねらい〉

- ①わたしたちの人生において、真の勝利者とは、たとえ地上での生活が苦しみや悲しみや貧しさの中にあっても、また病や障害を持つということであっても、永遠の命の約束が与えられた者こそが、それなのです。その反対に、真の敗北者とは、たとえ全世界を手に入れることができた最高の人生だったとしても、永遠の祝福を受ける命を失う者こそ、それなのです。
- ②その永遠の命を約束された者は、自分の命をも、イエスさまのために失う者となるのです。

〈展開例〉

- (1) ペトロは言いました。「あなたはメシア、生ける神の子です」と。ところが、そのすぐ後で言いました。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。メシアであり、神の子であるあなたのような方が、長老や、祭司長や、律法学者などのような者から苦しみを受けて殺されるなんて、あってはなりません。あなたさまは、わたしたちイスラエルの民をこのローマの支配から救い出して、新しい神の国をこの地上に建ててくださる方なのでしょう。神の子であるあなたさまが、十字架におかかりになり殺されるなんて、たとえ三日目に復活なさったとしても、それがわたしたちにとって何になるんですか」と。

このペトロの言葉は、イエスさまの十字架と復活とによってわたしたち罪人を救い出すという神さまの永遠のご計画に抵抗するサタンの挑戦なのです。このサタンに向かってイエスさまは激しく怒って言われました。「サタン、引き

下がれ」と。そしてペトロに、「あなたは、神のことを思わず、人間のことを思っている。わたしの父の願いは、あなたがたをこの地上だけの偽りの勝利者、サタンの手下になることによって得る偽りの幸せな者になることではない。永遠の勝利者、父である神に従うことによってのみ与えられる真実な幸せな者になることなのだ」と言われました。

それから、弟子たちに言われました。「わたしについて来たい者は、自分を喜ばせ、満足させ、評価されようとする自我を捨て、さらに、わたしに従うことによって、自分自身が非難され、世から憎まれることを覚悟して、わたしに従うことだ。自分の名誉、成功、富、権力など、この地上にある魅力的なものを自分のものにしたりしても、永遠の命を失うことになればあなたの人生は何もないものになってしまう。この永遠の命をあなたは、何をもって得ることができるのか。全世界の富をもってしても、買い取ることができないほどの価値あるものなのだ。この命は」と。

(2) 聖句

ヨハネによる福音書5章24節、「わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。」

ヨハネによる福音書17章3節、「永遠の命とは、唯一まことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」



対話の手掛かりとして……

- ①前回、主イエスは「あなたはわたしを何者だと言うのか」と問われました。この問いに、弟子たちを代表してペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えたのでした。「メシア」とは、「救い主」という意味です。では、ここで言う「救い」とは、何からの救いなのでしょう。主イエスは、ご自分がどういう意味で「救い主」なのかをはじめて明らかにされました。21節で、主は何をお語りになっているのでしょうかを確認しましょう。
- ②これを聞いたペトロはどのような反応をしましたでしょうか（22節を見る）。おそらくペトロは主のことを心配して「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」と答えたのでしょう。でも、ペトロの本心には、もっと違う思いがあったようです。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」と主がたしなめられたように、ペトロは「人間のことを思って」いたのです。「神さまの思い」とは、主の十字架と復活によって、人間を「罪」から救い出すことです。しかし、ペトロが求めている救いはそうではなかったようです。ペトロは、自分たちを苦しめているローマ帝国を打ち滅ぼし、ユダヤの国に平和を取り戻してほしかったのです。いわば、政治的英雄としての救い主を願っていたペトロにとって、人々から苦しめられ、殺される救い主など「救い主」の名に値しないと考えたのです。しかし、主イエスは、神さまが考えておられる救いを求めず、人間の思いに支配されていたペトロに、「サタン、引き下がれ」と激しく叱責されました。「引き下がれ」というのは、「後ろに回れ」という意味です。私たちも神さまの願いを無視して、自分の願望に心奪われてはいないでしょうか。主はそのような思いを「後ろ」に捨てて、私たちの前を歩く主に従うように招いておられま

す。

- ③主は、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」とおっしゃいました。人は、「全世界」（26節）を手に入れたいと願うほど自分の願望に生きています。たとえ全世界でなくても、自分の小さな世界を造って自分の思うようにその世界を動かしてみたいのです。しかし、そのような自分の思いが、主の前に先行しているために、見えるべきもの、本来、生きるべき命が見えないのです。信仰の基本は、主が願っておられること、主が実現されようとすることを第一にすることです。
- ④「自分の十字架」について、具体的に記されていませんが、ひとつ言えることは、「愛の重荷」ではないでしょうか。なぜなら、主イエスが背負っていた十字架は、私たちを愛するがゆえに背負ってくださった十字架だからです。「こんな重荷を背負うのは嫌だ」と、もし主イエスが、十字架を途中で降ろしたのならば、私たちが救われることはありませんでした。主イエスは十字架を最後まで背負ってくださったがゆえに、私たちは罪から救われ、神さまに従う者とされたのです。私たちを救ってくださった主イエスが開いてくださった道を歩く者は、「自分の十字架を背負う」のです。しかし、自分の十字架を背負って生きる時、私たちは孤独ではありません。なぜなら、私たちが与えられた十字架は、キリストが与えてくださるものであり、主イエスが知っていてくださる重荷だからです（11:28～30）。私たちは、キリストが背負ってくださる重荷の一端を背負わせていただくのです。その人の歩みは幸いです。労苦して虚しく終わってしまう人生ではなく、終わりの日、必ず神さまが報いてくださるからです（27節）。そのような素晴らしい命を主は私たちに与えてくださるのです。

テキスト マタイによる福音書 18章1～5節

弟子たちの交わりに関する教えが、18章1節から35節に連続して登場し、その最初に、天の国で一番偉い者は誰か、という教えが来ている。最初の教えというものは、その後の教えを規定するので、ここに続く箇所はそうのように理解していきたい。

〈順位論争のきっかけ〉

「そのとき」というのは、17章24節以下の神殿税納税の出来事に引き続いてのこと。神殿税の集金人たちがペトロに質問してきたのは、彼らがペトロを弟子たちのリーダーと認めたからであろう。このことは、もともと弟子たちの間にあった、誰が一番偉いのかという議論を、再燃させるきっかけになったと考えられる。この順位論争は、この受難予告後だけでなく、再度の受難予告(20:17～21)や主の晩餐の時(ルカ22:24)にも登場する。

〈天の国に入るために〉

主イエスは悔い改めて子供のようにならない限り、天の国に入ることは出来ないと教える。天の国に入るには、自分の力によっては出来ない。入るためには、自分を全く無力で無価値な立場に身を置き、主イエスに寄りすがることが必要不可欠である。このような者が天の国に入れられるのである。そのために、主イエスは、無力でありまた十分な働きのできない者である一人の子供を呼び寄せられた。(ここで、子供の無垢さや素直さが示されていると読み込むことは間違い。)無力、無価値なものと認めることが、天の国に入る条件にあるならば、そこで一番偉いのは、やはり自分

を低くする者である。

「はっきり言うておく」とは主イエスが重大なことを語る時の定型句。ここでの主イエスの教えが少しも割り引かれてはならない。

一般的な価値観は、自分がいかに価値あるものになろうかとすることである。この価値観を少しの改善ではなく、まったく逆転させ、自分はとても誇れない無力で無価値なものでひたすら神に寄りすがる生き方をすることが、「心を入れ替え」ることである。このことは、天国に入る時だけ必要なのではなく、天国に入ってから以後の生活にも必要なのである。

〈主イエスを受け入れることになる〉

わたしの名のために……する、とは、自分の中で沸き起こる数々ある動機があっても、やはりイエス・キリストに忠実であろう、とすることを一番の動機にすること。そのようにキリストの言葉に忠実であろうとして、子供のような無力で無価値な者を受け入れることは、主イエスを受け入れることである。これは、まさに自分を捨てイエスに従うことである。(先週の聖書研究参照)

また、新約聖書で「わたしの名のために」と語られる箇所の多くは、大きな苦しみや困難を受けることとあわせて語られている。(マタイ10:22、18:5、19:29、24:9、マルコ9:37、13:13、ルカ9:48、21:12、17、使徒9:16、黙2:3)。よって、子供のような無価値で無力な存在を受け入れることが、一般的に非常に難しいことであったことがわかる。価値がないと見なされた人々(徴税人、罪人など)は、一般的に、避けられ、放っておかれていた。(酒井啓介)



1月15日 「天の国でいちばん偉い者」 説教展開例

テキスト マタイによる福音書 18章1～5節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問28

〔単元のねらい〕

大きな主題は天国、次主日もまた天国です。天国とはどのような場所なのか、どのような世界なのかを語るテキストです。地上の弟子たちには、「いちばん」また「偉さ」ということへの強いこだわりがあります。つまり、天国をなお地上の価値観の延長線上にイメージしているわけです。しかし、主イエスは逆転させます。自分を低くする人。低い人を受け入れる人。そこに、天国を目指して生きる神の民の地上における倫理が示されます。天国の価値基準、つまり神の価値観を知ることによって、地上の価値観に流されない信仰の土台は据えられてまいります。私どもの現実、何度も壊され、流されてしまう脆弱な土台でしかありません。しかし何度でも、この土台を据え直すことが許されています。天国の価値基準のゆえに、罪人であるわたし自身が救われた驚くべき奇跡とその幸いを、子どもたちに証ししたいと思います。

「天国に入る」

皆さんは、これまで「一番」になったことがありますか。勉強とか運動など、絵とか作文とか、なんでもかまいませんから、クラスで一番とか、一等賞になったことがあるお友達はいませんか。

きっと、「これまでそんなことは一度もありません」というお友達も多いと思います。反対に、「ビリになったことならあるよ」というお友達もいるでしょう。

一番になったことのあるお友達は、きっと、「どう？　すごいでしょ！」という気持ちになったかもしれません。ビリになったときには、「悔しい、恥ずかしい、もうイヤ……」って思ったかもしれません。

さて、ある日のことです。いつものように、イエスさまは、一生懸命、天国のお話を語っておられました。お弟子さんたちは、何十回も、何百回も、天国のお話をきいていたのです。ところがその日、お弟子さんたちは、実はいつも心の中で考えていたことを、とうとうおさえきれずに、イエスさまに質問しました。

どんな質問でしょうか。「イエスさま、いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか。」

このとき、お弟子さんたちはきっとこんな気持ちだったはずです。「イエスさま、もちろん、イエスさまの弟子たちのわたしたちこそ、もっとも偉いということは、分かっています。でも、そのなかでも、いちばん偉いのは、誰ですか。」

おそらく小学生のお友達なら、もう知っていると思います。実は、わたしたちは、いつも自分と誰かのことを比べたがっていると思うのです。そして、自分のほうが勝っていると思うと、すぐに自慢したくなってしまったり、自分の方が負けていると思うと、自分なんてだめだな、なんて思ってしまうのではないですか。あがったりさがったり、さがったりあがったりしてしまうことが、多いと思います。

お弟子さんたちも、実は仲がよさそうですが、心の中で、ライバル心があったわけです。彼には負けたくない、負けるはずがない、負ける気はない……という気持ちです。

とうとう、抑えられなくなって、イエスさまに白黒をはっきりつけて頂きたくなくなってしまったのです。

さて、イエスさまは、お弟子さんたちの質問を聞かれました。すると、そばにいた、一人の子どもを呼び寄せて、「さあ、こちらに来てください。」とおっしゃいました。

実は今から2000年前、イエスさまの時代は、子どもたちは、大切にされていませんでした。今では考えられないかもしれませんが、子どもは、ひとりの人間としてみとめられていなかったのです。

ところが、イエスさまは、子どもたちをお弟子さんたちの真ん中に立たせられました。つまり、大人の人たちが真ん中ではありません。お弟子さんたちが真ん中でもありません。ひとりの人間としては、まだ認められていなかった子どもを真ん中にされました。つまり、天国は、このような子どもたちが真ん中にいる場所なのだということです。

イエスさまは、こうおっしゃいます。「はっきり言います。心を入れ替えて子どものようにならないければ、決して天の国に入れません。」つまり、心を入れ替えて、子どものようにならないと、天の国でいちばんになるどころか、天国に入れないのです。これは、大変なことです。

それなら、「心を入れ替えて、子どものようにな」というのは、どういうことなのでしょう。イエスさまは、こうもおっしゃいます。「自分を低くして、この子どものようになる人がいちばん偉い。」

心を入れ替えるということは、考え方を変えるということです。だれが一番偉いのかという考え方を変えるということです。変えるということは、「ちょっと」変えるということではありません。逆、正反対にするということです。

きっと、お弟子さんたちは、大人の反対だけではなく、偉いの正反対も、子どもたちだと考えていたのです。子どもなんて、イエスさまのお弟子さんになることなどできないし、イエスさまのお

役に立つことなんて絶対できっこない。むしろ、子どもなんて邪魔になるだけだ、そう考えていたようです。

ところが、イエスさまは、まったく違います。イエスさまは、子どもたちがイエスさまのところに来ることを、大人が来る以上に、喜ばれ、歓迎されました。それは、イエスさまのまわりに、いつも病人や苦しみ悲しんでいる人たちがいたようにです。つまり、イエスさまは、当時の人々からは、顧みられなかった人たちを、いちばん、お心にかけておられたのです。

当時の人たちは、子どもたちのことを、「後にしておいて構わない」と考えていました。ところが、イエスさまは、子どもたちのことを一番大切に考えておられたのです。

そればかりではありません。なんと、イエスさまは、大人たち、つまり、少しでも人より偉くなろう、力のある人になろう、思い通りにできるような人になろうとする人ではなく、子どもたち、つまり、自分ひとりでは生きていくことのできない、弱い人たちを、ご自身と重ね合わせて見ておられるのです。だから、イエスさまは、イエスさまを受け入れる人は、子どもたちを受け入れなければならないのだと、強く、激しく教えられました。

イエスさまが、先生をお救いくださったのは、先生が、偉かったり、すばらしかったからではありません。正反対です。イエスさまは、そんな弱い先生だからこそ、大切にして、お救いくださったのです。つまり、天国には、小さな人が入れるのです。

神さまの子どもとされたことを今日も心から感謝します。いつまでも、神さまの前に、小さな、弱い子どもであることを、心に刻みましょう。そして、イエスさまの考え方を身につけましょう。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 18章4節

自分を低くして、この子供のようにになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。

〈ねらい〉

偉くなりたいという子供はあまり多くはないでしょうけど、一番になりたいと思う子供はたくさんいるでしょう。地上の世界では、何でも一番になることが賞賛される世界です。親も学校の先生もトップを目指すことを奨励します。そして私たちも……、まず私たち自身の価値観を顧みる必要があるのかもしれません。そのような価値観とは正反対の天国の価値観を語ります。その価値観は世においては、平和と愛をもたらすことでしょう。

〈展開例〉

【お話】

ペトロさんの他にイエスさまのお弟子さんの名前を知っていますか。ヨハネという弟子もいました、ヤコブという弟子もいました。ペトロ、ヨハネ、ヤコブという三人はいつも自分こそ一番だ、という思いで、イエスさまのお手伝いをしていました。その三人がとても気になることがありました。それは天国では誰が一番えらいのだろうということです。みなさんは天国を信じますか？人はやがて死に、天国か地獄へ行きます。みんな天国へ行きたいですね。ペトロも、ヨハネも、ヤコブもみんな天国へ行きたいと思っていました。そして天国でも自分が一番になりたいと思っていたのです。

ある日、三人はイエスさまに尋ねました。「天国では誰が一番偉いのでしょうか。」するとイエスさまは、「〇〇くん(ちゃん)ここへおいで。」(*実際に一人の生徒を呼び寄せましょう。)こんな風に近くにいた子どもを呼び寄せました。そして言われました「心を入れ替えて子どものようにならないければ、決して天国に入ることができない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国で一番偉いのだ。」ペトロもヨハネもヤコブもこの答にはびっくりでした。子供のようになるってどういうことかな？会社をやめて、うちのお仕事もやめて、もういちど幼稚園や保育園へいくことですか。お父さんやお母さんがそんなことをしたら大変ですね。イエスさまが教えてくださったことは、「おとうさんやおかあさんに

いろいろなことをしてもらっていた子供の頃を思い出しなさい。あなたがたは子供の頃はみんな弱かった、力もなかった。一人で生きてはいけなかった。食べるものも、飲むものも、着るものも、みんなただで与えられた。おなじように、イエスさまを信じる人はすべて、ただで天国へいけます。また天国ではみんな自分のことよりお友達の方が大切なので、競争がありません。みんな助け合っているんだよ。」ということです。

【祈り】

天のおとうさま、わたしたちには、罪があるのに、ただで天国へいけますことを、ありがとうございます。そしてみんなやさしくて、助け合っている天国へ私も行けますように。イエスさまのお名前で、お祈りします。アーメン。

〈幼稚科カテキズム(天国)〉

てんごくでは、みんなたすけあっているの、

きょうそうがない。

〈暗唱聖句カード〉

こどものように



自分を低くして、この子供のように
なる人が、天の国で一番偉い
のだ。(マタイ8:4)

ねらい

弟子の中で誰が一番偉いのかという議論に対して、イエス様の答えは、天国で一案偉いのは子供である、という返答であった。この聖句では、心の中で自分を低く考えることがポイントであると書かれている。「子供は弱く、誰かの助けがないと生きていけないという可塑性があるからこそ、教育の可能性がある」と言ったのはルソーであるが、イエスも子供を神の国の住民として高く評価している。子供を比喻にした大人への教えではなく、文字通り、どの子供も神の国に属する性質を持っていると考えたい。

展開例

フランスのルソーという教育者は、「子供の発見者」とも言われています。子供は誰よりも弱い存在であることを、「可塑性」(外部の力に

よる変形がそのまま残る)の性質を持っていると表現して、教育の可能性の根拠だと考えました。

イエス様は、だれよりもまず子供が神の国に一番入りやすいと言いました。その理由は、力がなく弱いので、誰かに頼る気持ちがいっつもあ
る、ということでしょう。その頼る気持ちが神様への信仰につながるきっかけとなるということです。

マルコ福音書10章16節には、イエス様は「子供を抱き上げ手を置いて祝福された」とあります。子供を単なる教材としたのではなく、本当に子供を受け入れていることがわかります。

祈り

神様は子供を愛し、祝福して、実際に受け入れてくださる神様であることを心から感謝します。

～話し合ってみよう～

なぜイエス様は子供が大好きなのかを話し合ってみよう。



自由メモ



聖書日課

マタイ 18:1～5

暗唱聖句

自分を低くして、この子供のように
なる人が、天の国でいちばん偉い
のだ。

(マタイ18:4)

〈ねらい〉

弟子たちの天の国の理解はまったく間違っていました。彼らはこの地上における価値基準で天の国を理解していたようです。

それは、この地上では価値ある者が重要視され、また、尊ばれ、偉い人と呼ばれますが、天の国ではもっとも価値のない者、もっとも小さな者が、神さまから尊ばれ、価値ある者と見られるのです。

ここに人間の考えや思いと、神さまのみ心とはまったく正反対であることがわかります。神の国、天の国の価値基準が、真理であり、公平であり、正しいのです。

〈展開例〉

イエスさまは、いつも天の国について語られ、そして、天の国をご自身が示されました。イエスさまがおいでになられたのはこのためでした。しかし、弟子たちの天の国に対する理解は不十分というよりも、全く正しく理解できていなかったのかもしれません。天の国は肉の目、肉の心では理解できないものです。「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」（ヨハネによる福音書3章3節）

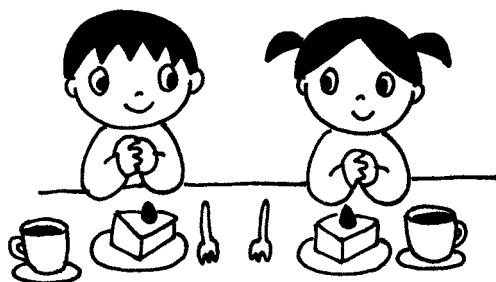
「いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」とイエスさまにお聞きした弟子たちの天の国の理解は、この地上の事柄と同じような理解だったようです。この地上で偉大な人たちとは、

世の人たちの上に立ち、大きな仕事ができる人であり、重要な人物であり、人々を従わせることができる地位にある人たちなのです。しかし、イエスさまは、「はっきり言っておく。心を入れ替えて子どものようにならなければ、決して天の国に入ることすらできないのだ。自分を低くして、この子どものように、自分を価値のないような者になる人が、天の国でいちばん偉いのだ」とおっしゃいました。

イエスさまの語られ、示される天の国の福音はこのようなものであり、この地上で、悲しんでいる人たち、心の貧しい人たち、病の中にある人たち、義のために迫害されている人たち、飢えの苦しみの中にある人たち、価値のない人と見られている人たち、罪人とされている人たち、彼らのために天の国の福音はあるのです。イエスさまは今も、彼らと共にいて、福音を、愛のわざを待たれているのです。「わたしの名のためにこのような一人の子どもを受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」

天の国の福音は、その人たちが持っています。わたしたちが、彼らを受け入れるとき、そこから聖霊は流れ出し、わたしたちに真の天国の福音が示され、神の国を見ることができるようになります。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」（マタイによる福音書25章40節）

神さま ありがとうございます



対話の手掛かりとして…

- ①集団生活を営む私たちは、いつも順位や人の評価を気にしながら生きてしまうところがあります。もちろん、一番になることがわるいことではありません。一所懸命努力して、目標に到達することはとても大きな喜びです。しかし、自分より順位が上の人や、自分にはない優れた点を持っている人を見ると、羨ましくなったり、妬んでしまうこともあります。逆に、自分が誰かより上になったとき、自分より下のものを見下してしまうことも少なくありません。人間というのは、ある意味単純なところがあって、上位になることができたり、周りから良い評価をいただくと嬉しくなります。しかし、自分が周りに比べて劣っていることが分かったと、すぐに機嫌がわるくなるのです。
- ②主イエスを信じ、いつも主の言葉を聞いている弟子たちにとっても、「だれが一番偉いのか」という問題はなお根深く残る問題だったようです。主イエスは、「だれが天の国でいちばん偉いのですか」という弟子たちの質問にどうお答えになったのでしょうか。また、天の国に入ることができるのはだれなのでしょう。主は、「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」(2節)とお答えになりました。つまり、天の国に入ることができるのは「子供」です。では、大人になった私たちは天の国に入ることはできないのではないのでしょうか。そうではありません。もう少し丁寧に主の言葉に聴くと、「心を入れ替えて」とあります。子供のようにならなければいけないのは、「体」ではなく「心」のことです。
- ③さらに問いが重なります。子供のような心とは、どういう心のことなのだろうと。子供のように純真無垢な人になるということでしょうか。どうもそうではないようです。主は「自分を低くして、この子供のようになる人が……」(18:4)

とおっしゃいます。「自分を低くする」と聞くと、偉そうに振る舞わず、いつも謙遜な心を持って生きる人になることだと考えます。しかし子供は、皆、謙遜なのでしょうか。むしろ、誰が偉いかをよく競い合うのではないのでしょうか。また自分を誇ったり、卑下したりしてしまう罪の中にある存在でもあるのです。

- ④「一人の子供を受け入れる」(18:5)とはどういうことでしょうか。当時、子供は無価値な存在とされていました。主イエスは、そのように受け入れるに値しない子供を受け入れることが、キリストを受け入れることだと言います。考えてみますと、私たちの信仰の源は、神さまに受け入れられることから始まります。「子供」とは親に受け入れられ、愛されている存在です。そして、それは、子供の立派さや純真さのゆえに受け入れてくださるわけではありません。私たちは罪深い者ですが、神さまにとっては子供であることに変わりありません。それゆえに、神さまは、御子キリストをお遣わしになり、主の贖いのゆえに、私たちは父なる神の愛を疑わずに、より頼んで生きていくことができるようになったのです。
- ⑤神さまが小さな私を重んじてくださったにもかかわらず、なお子供になり切れないことや、自分や他人を重んじることができないことがあるかもしれません。しかし、神さまによって子供とされたことを信じる私たちは、キリストが受け入れてくださったように、私たちも小さな者を受け入れていくことができる心に変えられています。心が変われるとは、私たちが神さまの子供として、神さまのことを「父よ」と祈りつつ生きる人のことではないのでしょうか。神さまに祈り、悔い改めて歩み出す時、もう一度、小さな者を受け入れるという生き方へと押し出されていくのです。

テキスト マタイによる福音書 20章1～16節

〈はじめに〉

マタイによる福音書20章1節～16節は、主イエスが19章23節から弟子たちに語った天の国についての話の続きである。19章26節で、主イエスは、天の国に入るることについて、「それは人間にできることではないが、神は何でもできる」と語り、神に主権があることを示した。

その後、弟子たちに「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子供、畑を捨てた者は皆、その百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ。しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」(19章29節～30節)と語った。主イエスは、弟子たちに自分の持っているものをいっさい捨てたものだけが永遠の命を受け継ぐことができると教えられた。「永遠の命を受け継ぐ」は、言いかえると「天の国に入ること」である。弟子たちは、天の国に入るために自我を捨て、いっさいを神に明け渡すことが求められている。

そして、20章1節から天の国のたとえとして「ぶどう園の労働者」の話をした。話の構成は以下の通りである。〈1節～7節〉労働者の雇用、〈8節～10節〉賃金の支払い、〈11節～12節〉主人への不平、〈13節～15節〉主人の返答、〈16節〉結論。以下、この構成に従って注目したい部分をみていく。

〈労働者の雇用—1～7節〉

ここで、家の主人は、「夜明け」、「九時ごろ」、「十二時ごろ」、「三時ごろ」、「五時ごろ」と頻繁に労働者を雇うために出かけて行く。

〈賃金の支払い—8～10節〉

主人は、約束通り(2節)、労働者に賃金としてデナリオンを支払った。

〈主人への不平—11～12節〉

労働者の主人への不平は、暑い日を辛抱してま

る一日働いた自分と、後から来て、一時間しか働いていない者が同じ賃金であることは、おかしいというものであった。

〈主人の返答—13～15節〉

主人は、不平を言った労働者に「友よ」と呼びかけている。このことに注目したい。

そして、15節で「自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか」と言って、賃金の支払いについては、主人に主導権があることを強調した。この主人が支払う賃金は、労働時間とは全く関係がない。主人は、全く恵みとして賃金を支払う。

〈結論—16節〉

19章30節で主イエスが語ったことが少し変えられて語られる。また、ルカによる福音書13章30節にも少し違う形で語られている。

〈まとめ〉

働きに応じてたくさんの賃金がもらえると期待した人は、自分が与えられた分に満足しない。逆に「だれも雇ってくれないのです」(7節)とあきらめていたような人でも、主人から十分な賃金がもらえる。

天の国に入ることは、人の働きの程度で決められるのではない。人が努力して天の国に入れるようになるわけでもない。天の国は、人の努力で勝ち取るものではない。

人が天の国に入ることができるのは、労働者を雇うために何度も出かけて行く主人の熱意が背後にあるからである。主人は、熱意を持って雇った労働者に分け隔てなく同じだけの賃金を払ってくださる。

すなわち、神は、御自身の熱意で救いに選んだ者に分け隔てなく恵みを与えてくださる。

(浅野正紀)

1月22日 「『ぶどう園の労働者』のたとえ」 説教展開例

テキスト マタイによる福音書 20章1～16節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問29

〔単元のねらい〕

神の考え方・天国の価値観と、人間・地上のそれとの違いが明らかにされます。午後5時から働いた人間は、雇われる機会を失い広場に立っていました。神は、彼らの不安を顧みられました。神は、労働の対価としてではなく、ご自身の恵みを注がれます。早朝から働いた人間は、神と共に働くことができたことを喜び、感謝すべきです。ところが、人間の公平は、神の公平に対してつぶやきます。私たちの「働き」に、他人と比べてより豊かに、より高くなろうとする意識がひそんでいることが明らかにされます。値なくして救われた罪人としての認識を深めるときだけ、地上にあって、天国の価値に生きることができます。子どもたちに、この神の恵みのなかでこそ、正しく努力することが可能になることを伝え、神の国の拡大、その栄光のために共に働くように招き、励ましたいと思います。

「イエスさま、わたしたちの宍らぎ、居場所」

イエスさまは、天国は、どんなところか、神さまはどのようなお方なのかを、譬え話で教えてください。

ある家のご主人が自分のぶどう園で働く労働者を雇うために、広場に出かけて行きました。そこは、働きたいと願っている人たちが集まる場所でした。朝一番、おそらく6時頃に集まっている人たちに、こう呼びかけました。「一日働いてくれたら、一デナリオンさしあげましょう。」

朝の9時にも、行ってみました。すると、まだ人がいました。ご主人は言いました。「さあ、わたしのぶどう園で働いてください。ふさわしい賃金をはらいますから。」その人たちは、喜んで行きました。

さらに、ご主人は、お昼の12時、そして午後3時にも行って、同じように言いました。

日も傾く5時、一日ももう終わろうとしています。ご主人は、また、広場に行ってみました。なんと、まだ人が立っていました。ご主人は、たずねました。「何故、一日中、ここに立っているのですか。」彼らは、暗い目をして、こう答えました。「誰も雇ってくれないのです。ご覧の通り、丈夫な体ではありませんし……。」すると、ご主人は、大きな声で言いました。「さあ、急いでください。

わたしのぶどう園に行ってください。」

その人たちがぶどう園につく頃には、もう、夕方になってしまいました。ご主人は、働いていた人たちを監督していた人に、命じました。「さあ、働いてくれた人たちを呼んで、約束通り、お金を払ってあげてください。」「いちばん最後に来た人から順にしてください。」こうして、ぎりぎり間に合った人たちに、一デナリオンがはらわれました。

さて、後ろからこれを見ていた人たち、つまり、朝から働いていた人たちは、目の色が変わりました。「あんな奴らでも、一デナリオンか。元気に、バリバリ働いた私たちには、いったいいくらくれるのだらう。」ところが、監督は、約束した通り、一デナリオンだけ払いました。

そのとき彼らは、真つ赤な顔をして、ご主人に文句を言い始めました。「こいつらは、1時間しか働いていませんよ。私たちは、朝から晩まで、暑い中を辛抱して働いのです。何故、いっしょにするのですか。不公平です。」

さて、皆さんは、どう思いますか。きっと、「そんな不公平だね。1時間で一デナリオンも

らったんだったら、朝の6時から夕方6時まで働いた人だったら、12時間で十二デナリオンもらわないと損だよ。」きっと誰もがそう考えることだと思います。

ところが、ご主人は、こう答えました。「愛する友達の皆さん。あなたたちに、悪いこと、不当なことはしていませんよ。最初に約束した通りのはずです。」「わたしの友達の皆さん。あなたたちが、よく働いてくれたのは、分かっています。でも、わたしは、最後に来たあの友達にも、同じように払ってあげたいのです。彼らは、働きたかったのだけれど、雇ってくれる人がいなかったのです。彼らは、どれほど、悲しい思い、空しい思い、不安な思いで、広場にいたことでしょう。わたしは、あなたたちと同じようにお金を払ってあげたいのです。」

もしも、朝から一生懸命に働いていた人たちが、最後にやってきた人と比べることをしなければ、どうだったでしょうか。きっと、「今日も暑かったなあ。でも、一日、一生懸命仕事ができまし、お金もきちんともらうことができた。うれしいな。さあ、家族が待っている家に帰って、皆でご飯を食べよう。」そんな風に、喜んで家に帰って行ったと思います。どうしたら、よかったのでしょうか。比べなければよかったのです。

あるいは、悲しいですが、もしかすると、朝から働いた人たちは、こんな風に考えていたのかもしれない。「自分がたくさんお金をもらうのは、当然だ。働けるのも当然だ。頑張って早く起きて、広場に来たのだ。努力もしたし、最後に来た人たちとは違う。」

さて、これは、天国の譬えでした。皆の中で、「自分は、天国に入れて当然だ」と考えている人はいますか。その人は、ここで文句を言った人に似ています。

先生は、自分が天国に入れる人になったのは、

奇跡だと思います。神さまの恵み、なによりもイエスさまのおかげだと信じています。天のお父さまが、先生のことを「かわいそうだ。この友達にも、わたしの恵み、祝福を与えてあげたい。」そう考えてくださったから、イエスさまを信じることができたし、教会に来ることができたと思います。

ただ、正直に言うと、ときどき、文句を言った人と同じようなことを思ったり、言ってしまうことがあります。そんなとき、先生は、この譬えを思い起こします。

誰かが、こんなことを言います。「ここは天国じゃないよ。最後に来た人に、一デナリオン払う人なんているはずないよ。もし、そんなことをしたら、誰もまじめに働かなくなるよ。そんな教えは、おかしいよ。」

いいえ、違います。イエスさまは、もう、ここに天国を始めておられます。ここに教会があるのでその証拠です。

先生は、教会で奉仕できることを、大変なときもありますが、心から喜び、楽しんでいます。実は、天国の恵みを知った人は、一生懸命働きたくなるし、努力したくなるのです。人と比べなくても大丈夫だ、そんな必要はないのだと分かったら、自分の力を思いっきり出そうとするし、出せるようになるのです。

僕たち私たちは、天国に入れて頂ける約束を受けています。もう今、教会にいます。何にもすごいこと、立派なことをしていません。でも、神さまは、僕たち私たちに、天国の喜び、幸福を与えてあげたいと願ってくださったのです。つまり、神さまの恵みによって、祝福を受けているのです。だから、礼拝できているのです。神さまに、心から感謝します。僕たち私たちにできる神さまのお手伝い、天国を広げる奉仕をしたいと思います。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 11章28節

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。

〈ねらい〉

信じる人には全てただで与えられる、天国のすばらしさに思いを馳せてみました。天国のすばらしさの多くは、まだ隠されていますが、聖書の言葉から、その一端を垣間見ることができ、それだけで心躍る思いがします。主はその恵みを、ぶどう園のたとえを通して、ただで受けなさいとわたしたちに促しておられます！

展開例ではぶどう園のたとえそのものの説明はしませんでした。労働賃金をごほうびと言い換えて、成績にかかわらず、皆に同じように与えられる天国の恵みを語ることはできると思います。

〈展開例〉

【お話】

天国ってどんなところかな？

そこにはイエスさまがいる。

けんかがない、

悲しみもない。

憎しみもない

苦しみもない

仲間外れもない

いじめもない

戦争もない

死もない、罪もない。

みんなやさしい

みんな仲良く愛し合っている。

さわやかな空、きれいな花々、

やさしい動物たち

こわくないし

しんばいもない

みんなでイエスさまを賛美して

いつまでもたのしく、よろこんで、

しあわせに暮らせるところ

そんなすばらしいところへどうしたら行けるのでしょうか答えは信じる人です。信じる人はみんなただで天国へ行けるのです。天国では一番も二番

もありません。だから成績もありません。どれだけ勉強したか、どれだけ働いたかに関係なく、先に天国に入った人も後から入った人も、天国でのしあわせはみんな同じように与えられるのです。

【祈り】

天の神様、あなたを信じてすばらしい天国へ行けますように。お父さんも、お母さんも、先生も、みんな天国へ行けますように。イエスさまのお名前でお祈りします。アーメン。

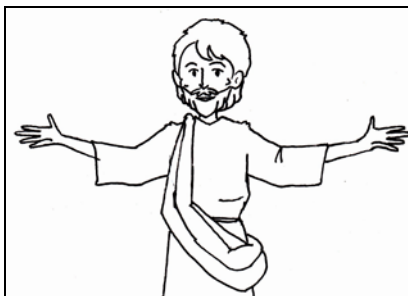
〈幼稚科カテキズム（天国）〉

てんごくへ、いけるのは、

いえすさまを、しんじるひとです。

〈暗唱聖句カード〉

わたしのもとにきなさい



つか もの おもに おももの だれ わたし
 疲れた者、重荷を負う者は、誰でも私
 のもとにきなさい。休ませてあげよう。
 またい
 （マタイ11:28）

ねらい

ブドウ園の主人（神）が労働者（人間）を雇い、朝の9時から雇った人と一日一デナリオンの賃金の約束をしたように、昼の12時から、午後の3時から、そして夕方5時から雇った労働者にも同じ一デナリオンの賃金を支払った。それに対して朝から働いた労働者が主人に文句を言ったところ、それは通じなかったという話である。つまり、人間の労働や文化活動は、神に対しては、神の恵みに感謝する意味での働きであって、決して労働時間に準じた功績にはならないという話である。

展開例

人間の世界では、時間給であれば長い時間働いた分、給料は多く与えられる。それは、人間の労働には価値があるからと考えているからである。しかし、人間が神のために労働するというのは、人間の労働の価値・功績というより

も、神の恵みへの感謝の応答である。従って、時間の長短で差別が出ることはない。

神様への奉仕は功績にはならない。神様の恵みは、無価値な人間への一方的な神からの働きかけであるため、人間の神への仕事はただ感謝の応答という意味しか持たないのである。

それを他人との比較で、自分は他人より多く奉仕しているので、自分の価値がその分増えると考えerことは間違いである。神への奉仕は他人と比較して論じる性質のものではない。

祈り

私たちはいつも他人と比較して、神様に文句を言ったり、不平を言ったりしますが、それは間違いであることを知りました。自分と神との関係のみによって自分のなすべきことを考えさせてください。他人と比較して、自分のことを考えるくせを無くさせてください。

～ 話し合ってみよう ～

他人と比較して生きる場合と、神様と自分の関係を考えて生きる場合と、どちらが良いのか話し合ってみよう。



自由メモ



聖書日課

マタイ 20：1～16

暗唱聖句

疲れた者、重荷を負う者、だれでもわたしのものにきなさい。休ませてやすませてあげよう。

(マタイ 11：28)

〈ねらい〉

イエスさまは、天の国（神の国）の福音を宣べ伝えました。

「ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならぬ。わたしはそのために遣わされたのだ。」（ルカ4章43節）

そして、イエスさまは父なる神さまをお示しになることによって、ご自身が神の子であり、メシアであることを示されました。また、力ある神のみわざによって、この地上でもイエスさまと共にいる所には、天の国（神の国）が存在することをお示しになりました。

今日の聖書の箇所は、この天の国（神の国）とはどんなところかということを、たとえではなされました。当時のユダヤ人の人たちの日常なことを用いて、天の国（神の国）をよくわかるようにお話しになりました。今日はこのぶどう園の主人と労働者とのたとえから学びましょう。

〈展開例〉

わたしたちは、1時間働いた者が1,000円の賃金をいただけるのであれば、5時間働いた者は当然5,000円の賃金が支払われるのが公平だと考えます。つまり、多くの時間働いた者は、少ない時間しか働いていない者よりかは、多くの報酬を受け取ることができると考えますね。

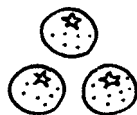
しかし、イエスさまのお話しされた天の国（神の国）では、午後5時ごろから夕方までのごくわずかな時間しかはたらいていない者も、夜明けの時間から夕方までまる一日中はたらいた者も、報酬は同じデナリオンでした。まる一日中はたらいた者たちから主人に対して、「最後に来たこの連中は、1時間しかはたらいていません。まる一日、暑い中を辛抱してはたらいたわたしたちを、この連中とを同じ扱いにするとはい」と不平を言い

ました。天の国の主人である神さまはその人に答えた。「友よ、あなたは不当なことはしていない。あなたはわたしとデナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないのか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか」と。

このたとえのおはなしから、天の国（神の国）の福音について少し学びましょう。

天の国でわたしたちが受け取る報酬は、約束によるものであって、わたしたちの働きの大小ではないということです。天の国の主人の約束によって、ただ一方的な恵みによる報酬なのということです。その報酬の持ち主は神さまなのです。天の国（神の国）では、その主人である神さまのみこころがすべてであり、絶対なのです。ほとんど働かない、働く機会が少なかった人たちにも同じものが与えられる。これは恵みによるもの。ただそれだけなのです。わたしたちもこの地上において、自分自身の持ちもののなんて何もないですよ。すべて神さまからの恵みによるものです。だから、今与えられているもので、充分ですと、その主人である神さまに感謝したいものです。

また、天の国の主人である神さまは、たとえ遅くなくても、必ずわたしたちを招きに来てくださいます。すでに招かれてご主人のご用のために働いている人もいますし、まだ招かれていない人もいますが、神さまはそのどちらの人も同じように大切な人として愛してくださっているのです。先に招かれたもの、最後に招かれたものも、神さまにとっては全く同じようにしてあげたいと願っているのです。「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」



対話の手掛かりとして……

- ①聖書を読む時に、大事なひとつのことは、御言葉の中に、自分自身の姿を見出すことです。聖書を読みながら、「あっ、これは私のことだ」と気付くことです。そして、神さまはそういう私に何をしてくださったのか、何を望んでおられるのかということに気付くことです。今回、主イエスがお語りになった譬え話においても、同じことが言えます。私たちは、この譬え話の中のどこに自分を見出すべきなのでしょう。どこに自分を見出すかでこの譬え話の理解が、ずいぶん違ってきます。
- ②どうも、私たちは一日中働いたにもかかわらず、一時間しか働いていない者と同じ賃金しかもらうことができなかった労働者と重ねてしまいます。私はこれだけ頑張っているのに、全然報われない。そう思って周りを見渡すと、明らかに、私よりいい加減な生き方をしているのに、私より幸せそうにしている。そういう人たちを見ると、何て神さまは不公平な方なのだと腹を立ててしまうことがあります。あるいは一時間しか働かなかった労働者と自分を重ねることもあるでしょう。一日働いても、一時間働いても、同じ賃金が与えられるのならば、楽をして稼いだ方がいいと考えるのです。そして、怠惰な生活、好き勝手な生活をしようと聞き直るのです。
- ③しかし、上にあげたいずれの立場で聖書を読んでも、そこに本当の喜びを見出すことはできないのではないのでしょうか。そこで、少し考え方を切り変えて、譬え話に出て来る「ぶどう園の主人」の姿に注目してみましょう。主人とは、神さまのことです。主人はここでどういう行動をしているのでしょうか。繰り返し同じようなことをしていることに気付かされます。それは、何度も労働者を探しに出掛ける主人の姿です。たいへん熱心です。しかし、手間が掛かり、

効率がわるいことをしていると思う人もいるでしょう。一度にたくさんの労働者を見つけてこれば手間も省けるではないかと思うのです。しかし、主人は効率の良さを第一にして行動しているわけではありません。そうではなくて、誰にも雇ってもらえず、何もせずに立ちすくむしか他ないひとりの存在を捜すことに熱心でられるのです（6～7節）。

- ④この譬え話において、私はどこにいますのでしょうか。夕方になっても、職を得ることができず、立ったままにいる者たちであることに気付かされるならば、主イエスがお語りになった譬えのありがたみが深く伝わってきます。誰にも雇われず、自分は何の役にも立たないのだと落ち込みながら、立っている私を見つけてくださり、わたしのぶどう園で働きなさい、そう言って、私をひとりの価値ある人間として愛して関わってください。たとえ、一時間しか働くことができなくても、一日中働いた者と同じだけの恵みを与えてくださるのです。
- ⑤また、神さまは「気前のよい」お方です（15節）。気前のよい神は、私たちが考える次元で報いをお与えになる方ではありません。神さまの気前のよさは、誰がどれだけ働いたかということを超えて、その人に必要なものを、またその人にとって最も大切なものを与えてくださいます。私たちにとって最も大切なものとは何でしょうか。それは、主イエス・キリストによって与えられる救いの恵みです。私たちが今までどのように生きてきたかどうかを問うことなく、無償で、つまり賜物として与えられるのです。気前のよい神さまによって、救っていただいた自分、愛されている自分を再発見する時、この世的な平等の原則やものの見方に縛られる生き方から解き放たれるのです。

〈背景と文脈〉

主イエスは十字架の死を目前にされ、宗教的指導者たち、特に律法学者とファリサイ人を厳しく批判された。23章1～36節で、「あなたたち偽善者は不幸だ」と繰り返し語られ、彼らの偽善と傲慢の罪、また霊的な指導者として神の期待に応え得なかった責任を厳しく追及されている。

24章2節で、主はエルサレム神殿の破壊を予告されている。これは紀元70年にローマ軍によって成就したが、その裁きの背後にあったのが、霊的指導者たちの罪、また、民衆の神に対する反逆だった。彼らは預言者たちを迫害し殺すことによって、与えられた悔い改めの機会を意図的に拒絶し続けたのである。

〈預言者たちを拒んだ罪と裁きの予告（29～36）〉

ネヘミヤ記9章26節には次のように記されている。「しかし、彼らはあなたに背き、反逆し、あなたの律法を捨てて顧みず、回心を説くあなたの預言者たちを殺し、背信の大罪を犯した。」またステファノは、「いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が、一人でもいたでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを預言した人々を殺しました」と言っている（使徒7:52）。また主イエスも「ぶどう園と農夫」の譬え（21:33～41）を通して同様の罪を指摘され、最後には神の子である主を人々が殺すことを示唆された。

律法学者やファリサイ派の人々は、「預言者の墓を建てたり、正しい人の記念碑を飾ったりして」る（29）が、実際には神の使者を迫害している、と彼らの矛盾を指摘された。それは悔い改めの拒否であり、神はその罪のゆえに彼らを裁かれるのである。旧約聖書にある正しい者が殺された最初の記録がアベルに関してであり（創世4:8）、最後がゼカルヤに関するものである（歴代下24:20～22）。

主は「はっきり言うておく。これらのことの結果はすべて、今の時代の者たちにふりかかってく

る」（36）と言われ、その時代の人々に裁きが下ることを予告された。

〈人々の罪に対する嘆きと彼らへの愛（37～39）〉

ここからは批判の矛先が律法学者やファリサイ派の人々から、民衆を含めた神の民全般に向けられている。民衆も同様の罪を犯し続けてきた。そしてその罪のゆえに、彼らも裁かれるのである。

エルサレムは神の都と呼ばれていた。「エルサレム、エルサレム」という呼びかけは、第一義的にはその都に住む人々を指している（ルカ19:41～44参照）。その代表が宗教的指導者たちだったが、これは、エルサレムという都が人格化されていると考えられるので、神の民であるユダヤ人全体への呼びかけと考えられる。

めん鳥がひな鳥を羽の下に集める行為は、ひな鳥を危険から守り、保護し、養い、親としての愛を示すものである。そのように、主は神の民をご自身の羽の下に何度も集めようとされた。しかし彼らはその思いに応えず、拒み続けたのである。その結果、「お前たちの家は荒れ果てる」（38）と言われ、彼らへの裁きが来ることが予告された。そして、そのように反逆し続ける人々が、主の再臨のときまで再び主を見ることはない（39）、と宣言された。こう言い残されて十字架へと赴かれたのである。

十字架の上で「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのかわからないのです」（ルカ23:34）と、主はご自身を十字架につけた人々のために祈られた。またローマ書5章8節では使徒パウロが「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」と言っている。キリストは神の子であられたのに、罪人の救いのために命を献げてくださった。ここにわたしたちの希望がある。

（後藤公子）

1月29日 「エルサレムのために嘆く」 説教展開例

テキスト マタイによる福音書 23章29～39節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問66～70
 ウェストミンスター小教理 問86～90

〔単元のねらい〕

旧約の時代から、ユダヤ人は、主がお遣わしになった使者の言葉（罪を悔い改めること）に聞き従うことなく、かえって神の使者を退けていた。主が求めておられることは、苦々しい言葉であっても、主がお語りになる言葉に、私たちが耳を傾け、主の御声に聞き、自らの罪を悔い改め、主がお示くださる救いを受け入れることである。誰でも、罪を指摘されると耳を覆いたくなるものである。しかし、私たちが救いにお導きくださる主の御言葉に聞き従うことによって祝福と喜びがあたえられること、そして逆に主の御言葉に背くことによって裁きもたらされることを、適切に示すことが求められる。

「偽善者にならず聞く耳を持ちなさい」

みんなは、学校の先生や家の人に叱られたり、注意されたりすることもあるかと思いますが、そうした時、先生や家の人の言葉をちゃんと聞いているでしょうか？「嫌だな」、「まだ」、「聞いたふりをしておけばいい」などと思うこともあるかと思いますが。怒られたり、注意されることは、誰だって嫌なんです。だからこそ、みんなの思いも良く理解出来ます。先生だって、怒られたりすることは嫌なもの。

でもね、何で怒られているのか、何で注意されているのかを考えなければいけません。宿題を行うのを忘れて怒られているのであれば、なぜ忘れたのかを考えなければなりません。遊びすぎて、疲れて寝ちゃったのであれば、「これからは遊ぶ前に宿題をしなければならぬ」とか、「遊ぶ時間を短くしなければいけない」と思い、そのように実行するようにしなければなりません。

大切なことは、先生や家の人が、なぜ怒っているのか、なぜ注意しているのかを考えることです。そして怒られている言葉、注意されている言葉を聞いて、反省・悔い改めをして、同じ失敗を繰り返さないようにすることです。

イエスさまは「律法学者たちやファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ」とお語りにな

ります。「偽善者」ってどういう人？ 見せかけだけ立派なようであって、本当はそうでない人のことです。

イエスさまは、律法学者やファリサイ派の人々に、「あなたたちの先祖であるイスラエル人はどうでしたか？」とお尋ねになります。つまり「イスラエル人は偽善者であったのであり、あなたたちも同じように偽善者なのだ」とイエスさまはお語りになっているのです。

旧約の時代、神さまはイスラエルの人々に繰り返し救いをお示しくださいました。神さまの救いの御業がもっとも示されたのが出エジプトの出来事です。モーセをとおして行われた数々の奇跡に神の恵みが現れており、その御業をとおして主の御力がイスラエル人に示されていたのです。

しかしイスラエルの民は、繰り返し神さまから離れて行きました。そして偶像崇拜を行ったり、神さまの力を信じることなく自分たちで武器をとって戦ったりしていました。こんな時、神さまは繰り返し、預言者などをお送りくださり、「偶像崇拜をやめて、主なる神さまに従いなさい」、「武器を捨てて、神さまに委ねなさい。神さまは敵に勝利を遂げてくださいます」と預言者をとおしてお語りになり、イスラエルの民に注意し、時には怒るように働きかけてくださったのです。

しかしイスラエルの民は、「預言者、うるさいな」、「自分たちは神さまを信じているのだから、それで良いじゃないか」と語り、預言者の言葉を聞くことはしませんでした。そればかりか、「お前、生意気だ」と語り、神さまがお送りくださった預言者を殺してしまうこともあったのです。

しかし同時に、イスラエルの民が預言者を殺したとの自覚はまったくなく、「素晴らしい預言者が殺されていった」との思いで、彼らの墓を建てたり、記念碑を飾ったりしているのです。このことをもってイエスさまは、イスラエルの人々が「偽善者だ」と語られているのです。

そして、今の律法学者もファリサイ派の人々も同じであると語られています。イエスさまは、イスラエルの人々たちに対して、御自身がメシア(救い主)であること、イスラエルの人たちが間違った聖書解釈を行っていること、そして悔い改めてイエスさまに従うように、語り続けてきたのです。しかし律法学者もファリサイ派の人々も、イエスさまをメシアとして受け入れることはせず、かえってイエスさまを罪人として、逮捕して、十字架に架けて殺そうとしているのです。

主なる神さまが、罪を指摘して、罪を認めるように、悔い改めるように語られながら、その言葉に耳を傾けない、さらには神さまがつかわされた預言者やイエスさまを殺すことを、主なる神さまはそのままにしておかれることはいたしません。罪に対する刑罰は、最後の審判における裁きであり、永遠の死です。

イエスさまは、イエスさまを信じて、イエスさまの御声に聞き従う人には、罪の赦しを与え、天国における永遠の祝福と喜びをお与えくださるために、この世に來られたのです。私たちに代わって、十字架で苦しみ、死を遂げてくださったのです。しかし、「自分は信じている」、「自分は聖書の言葉に従っている」と語りながらも、実際にはイエスさまの存在を無視して、イエスさまが語られる言葉に耳を傾けなければ、神さまは最後の審判で裁きをもたらします。自分勝手な判断で神さまの語られる御言葉を受け流すことなく、主なる神さまがお語りになる言葉に耳を傾け、神さまを信じ、イエスさまによる十字架によって罪が赦され、救いにあることを感謝をもって、聖書の御言葉に耳を傾けて、毎日を歩んでいくことが求められています。(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句]

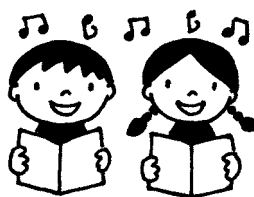
詩編 51編6節

あなたに、あなたのみわたしは罪を犯し

御目に悪事とみられることをしました。

あなたの言われることは正しく

あなたの裁きに誤りはありません。



〈ねらい〉

イエスさまの嘆きの言葉の内に、旧約の預言者
 が取り次いだ主の言葉（エゼキエル18:32、アモ
 ス5:4）を思い起こします。エルサレムのかたく
 なさに嘆きながらも、イエスさまは「生きよ！」
 と願いつつ十字架の道へと歩まれました。イエス
 さまの悲しみと堅い決意を子供たちにしっかり伝
 えたいと思います。

〈展開例〉

【お話】

町を見つめて、悲しみに沈んでいる人がいます。
 泣いています。誰でしょうか。イエスさまです。
 イエスさまが見ている町はエルサレムです。エル
 サレムの人々はイエスさまがメシアであると信じ
 ないからです。それどころか、中にはイエスさま
 のことを憎んで、イエスさまを殺す相談さえする
 人たちもいました。そんなエルサレムの人々は
 いったいどうなるのでしょうか。神様のさばきが
 待っています。それは死とほろびです。イエスさ
 まは「このままではみんな死んでしまう！」とエ
 ルサレムの町を見て泣いていたのです。

でもイエスさまは悲しむだけではありません。
 ご自分を憎んで殺そうとする人たちのことを許し
 て下さいました。そしてイエスさまはすべての
 人々の罪の罰を十字架の上で受けて死んでくだ
 さいました。そして今も待っておられます。すべ
 ての人がイエスさまのところへ来ることを。

みなさんがおなじように、イエスさまをメシア
 と信じないならば、イエスさまは涙を流されます。
 とっても悲しまれます。でもイエスさまは「わた
 しを求めよ、そして生きよ。」（アモス5:4）と、
 いつまでも待っておられます。

【祈り】

やさしい天の父なる神様。私たちの救い主イエ
 スさま。あなたを悲しませてごめんなさい。イエ
 スさまを信じて、生きることができますように。
 イエスさまのお名前によってお祈りします。アー
 メン。

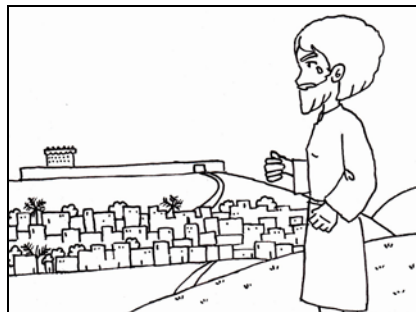
〈幼稚科カテキズム（救い）〉

すくいとは、い
 えすさまを、し
 んじ、

くいあらため
 ることです。

〈暗唱聖句カード〉

いきよ



わたしは誰の死をも喜ばない。
 お前たちは立ち帰って、生きよ。
 （エゼキエル18:32）



ねらい

人間の傲慢がアダム以来の罪の根源と言われている。神を信じるユダヤ人もいつの間にかこの傲慢に陥り、儀式や型どおりの外側のみを整え、自分は神の前に正しいと考える偽善者となってしまった。正義や慈悲、誠実や内心の真実が神の前では求められている。彼らがイエスを否定し、十字架への道を歩ませたことは最大の悲劇、皮肉である。しかし、神はそれを救いの成就と変えたのである。「あなた方が十字架につけて殺したイエスを神は主とし、またメシアとなさったのです」（使徒言行録2：36）と書かれている。

展開例

信仰深い人間が時おり、自分の信念を主張して、信者同志が争ったり、対立したり、分裂を

作ったりする例が多い。神によって信仰を与えられたことと自己主張は別物である。

現在の教会でも、イエスが嘆くケースがあるかも知れないと、謙虚に我が身を振り返る必要がある。教会の中に争い事が起これば、それは、かつてのイスラエルのためにイエスが十字架につけられたように、再びイエスを十字架へと追い立てることになるであろう。つまり、私たちがイエスを何度も十字架につけるようなものである。

祈り

私たちの罪のため、イエスさまは十字架に架かって贖いの業を成し遂げてくださいました。もうこれ以上罪を犯さないように、私たちを心の内側から清めてください。正義の心、慈悲の心、誠実の心を芽生えさせてください。

～ 話し合ってみよう ～

信仰深い人の争いがなぜ起こるのか
話し合ってみよう。



自由メモ



聖書日課

マタイ 23：29～39

暗唱聖句

あなたに、あなたのみにわたしは罪を犯し
御目に悪事と見られることをしました。
あなたの言われることは正しく
あなたの裁きに誤りはありません。

（詩編51：6）

〈ねらい〉

イエス様の深い愛、それは私たち罪人のために身代わりになって十字架におかかりになられたこと。それは、神様だけにできる深い愛であることを伝え導きたい。

〈展開例〉

- (1) わが家では、以前、鶏を飼育していた。何日も餌を食べずに母鳥が卵をあたため、ひなを翼の下にかくまっていた姿は感動深いものであった。37節には、雌鳥つまり母鳥がひなを翼の中へかくまう（これは比喩的表現ですが）ことをとおして、外敵が襲ってくる危険からまぬがれさせるために主が子どもたちを保護される、恵み深いみわざを表しています。なぜ、ここまでしてイエス様は、真のイスラエルの民に愛をそそがれたのでしょうか？
- (2) 外側は人に正しく見えるが、内側は（外側はもちろん）神様がしっかり見てくださる。内側

とは人間の心であります。内側が清められれば外側の行いも清くなる。そのことから、どのようにすれば、清められるのでしょうか？

- (3) 偽善者という言葉で出て来ますが、偽善者の意味は本当はそうでないのに、心や行いが正しいように見せかける人のことを言います。この聖書の箇所では律法学者やファイサイ派の人々をイエス様は偽善者だと語られました。なぜなら、彼らはキリスト否定する大きな罪を持っているからと言われています。ところで、この偽善という言葉は、23章で何回出てくるのでしょうか？

〈祈り〉

天の神様、イエス様の大きな愛を感謝いたします。どうかいつまでも神様の独り子、イエス様に従って歩むことができますように、お導きくださいませ。



対話の手掛かりとして……

- ①主イエスは、律法学者、ファリサイ派の人々の信仰をご覧になって「不幸だ」と嘆き悲しんでおられます。また、主イエスは、彼らの姿を「偽善」と呼んでいます。偽善とは、人に自分を実際よりも善く見せようとすることです。律法を守って正しく生きているという外側の姿とは裏腹に、彼らの心の中には、神さまを敬うよりも自分の誉を求め、人から立派な人と見られ尊敬されることを願う思いで満ちているのです。彼らの姿は、今日のクリスチャンの生き方にもよく当てはまります。神さまに喜んでいただきたいと願いながら、気付いたら人の目だけを気にするような、生き方にはなっていないでしょうか。

- ②「偽善」とは、御言葉を聞く私たちの姿勢にも深く関わってきます。27節以下で、主は律法学者やファリサイ派の人々が建てた墓や記念碑をに対して批判しておられます。墓や記念碑を建てることは、その人たちに敬意を表していることの証拠であり、良いことです。律法学者たちも、預言者たちを尊敬しているから墓を建てました。でもそれは表向きであって、その裏側とはまったく違っていたのです。彼らの心の裏にあった思いは、墓を建てることによって、預言者たちを、そして彼らが語った言葉を、遠い過去のものとして葬り、今の私たちの生活とは何の関係もないものとしてしまったことです。だから、御言葉を大事にして生きているように見せかけながら、御言葉が求める心に生きようとはしなかったのです。

- ③そのような生き方をしているのは、律法学者たちだけではありませんでした。エルサレムの歴史において起こり続けてきたことでした。御言葉を語り伝えるために神さまは、これまで何度

も預言者たちを遣わしました。そして、独り子イエス・キリストをもこの世に遣わし、救いに招いておられるのにもかかわらず、その恵みに気づかず、受け入れようとしませんでした。今、自分たちに語りかけられている主イエスの言葉に耳を傾けようとしなかったのです。その結果、多くの預言者を殺してきただけではなく、主イエスをも十字架につけることになるのです。このことは、遠い昔の話ではありません。今日においても、語りかけておられる神の言葉を葬ってしまい、私と関係ないものとしているならば、私たちもまた同じ過ちを重ねてしまっているのです。「あなたがたは不幸だ」という主の嘆きと怒りのもとに置かれているのです。

- ④「言うておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言うときまで、今から後、決してわたしを見ることがない」(39節)。主は驚くべき言葉で、この話を締めくくられました。今、主イエスを受け入れず、神さまの語りかけを聞こうとしない人々が、「主の名によって来られる方に祝福があるように」と言う時が来るとおっしゃるのです。十字架で死なれた主が、よみがえって、再びこの世界に来られるとき、主イエスに敵対していたものが、主をはめたたえるようになるのです。主イエスは、もう過ぎ去ってしまった過去のお方ではありません。目に見えませんが、今も生きて働いておられ、やがて必ず救いを完成するために来てくださるお方です。主の言葉に耳を傾け、主を待ち望み、主により頼んで生きていきましょう。そのとき、いかに自分をよく見せるかという偽善に陥ることなく、神さまのまなざしとみ翼の中に守られている自分の幸いをもう一度再発見することができるでしょう(詩編17:8)。

〈背景と文脈〉

主イエスは十字架の死を目前にして、終末に関して弟子たちを教えられた。14節では、特に終末と世界大の福音宣教を結びつけて語っておられる。弟子たちが時代を正しく認識して、これから託されようとしている宣教のわざを推進していくために、ヴィジョンを与えられたのである。主がそう言われてからすでに二千年が経過し、この間、教会が、さまざまな困難のなかでその使命を担ってきた。

〈神殿破壊の予告（1～2）〉

エルサレムは神の都と言われ、そこには神殿があった。神殿では礼拝が行われ、犠牲がささげられ、また祭りが祝われていた。このときも、過ぎ越しの祭りが近付き、多くの人々がそれを祝うためにエルサレムに集っていた。しかし、23章37節で指摘されているように、人々は神が遣わされた預言者たちを殺し、悔い改めを拒み、霊的には暗闇の状態だった。

主は24章2節で、エルサレム神殿の破壊を予告されている。契約の民の信仰生活の中心であった神殿の破壊は、民への裁きを象徴するものだった。ソロモンの神殿は紀元前586年にバビロン帝国によって破壊された。その後バビロン捕囚から帰還した人々によって神殿が建てなおされたのだが、その神殿をヘロデ王が拡張、修復して、この時代には立派で荘厳な建物になっていた。白い大理石の神殿はきらめくような美しさを誇っていた、と言われている。

このとき弟子たちは、その神殿の美しさに感嘆し、主の注意を喚起するために指さした、と思われる。すると主は「はっきり言うておく。ひとつの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない」と言われた。これは、エルサレム神殿が完全に破壊されることの比喩的表現である。主イエスが、神から遣わされたメシアとして来られたに

もかわらず、人々は主を拒否することによって、自ら裁きを招くことになるのである。神殿は紀元後70年にローマ軍によって破壊され予告は成就した。神殿破壊は、終わりのときの到来を告げる象徴になったのである。

〈終末の徴と福音宣教の完成（3～14）〉

「おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか」という弟子たちの問いに、主イエスは終わりのときに現れる様々な出来事について警告された。主イエスの名を語る多くの偽メシアの出現、民族間の戦い、国と国との間の戦争、飢饉や地震が終わりのときの徴として挙げられている。これらは人間の歴史の中でたびたび繰り返されてきたことであり、これからも繰り返されていくだろう。主は、「そういうことは、起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない」と言われた。狭義での、主の再臨がある終末に至るまでに、これからも、戦争や天災など起こるであろう。私自身の推測だが、終わりの時が近づくにつれ、ますます頻繁に、また、大きな災害が起こるのではないか、と思っている。

それだけではなく、主は、終わりの時代の福音宣教が、困難な状況のなかで進められていくことを予告されている。信仰の戦いがますます激しくなっていくことが予告され（9～12）、信仰に堅く立つように、と励まされている。「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。そして御国のこの福音は、あらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから終わりが来る。」（13～14）福音宣教の進展を阻むさまざまな困難に直面しながらも、宣教のみわざは確実に進展し、終わりの日まで続く。そのわざが完成するときに、主が来られる（14）。それは勝利のときであり、そのようにして信仰の戦いは報いられる。教会がこの確信をもちながら、託された使命を忠実に果たすことが求められている。（後藤公子）

テキスト マタイによる福音書 24章1～14節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問69
 ウェストミンスター大教理 問155
 ウェストミンスター信仰告 14:2

〔単元のねらい〕

今年も2月11日を迎えようとしています。国は、「建国記念の日」としてこの日を祝日にして、日本が神話に基づく神の国であることを国民の心に意識付けようとしています。しかし、私たちキリスト者は、この日を「信教の自由を守る日」として、やがては滅び行く国家権力や偶像ではなく、いつまでも残り、私たちに本当の平安をお与えくださる主なる神さまへの信仰を確認致します。

異教社会に生きる日本人キリスト者のみならず、すべてのキリスト者は、地上の歩みの間、主の支配に反抗するサタンとの戦いを免れることは出来ません。また、戦争や饑饉、様々な自然災害もあり、地上に生きるキリスト者は、常にキリストを神として生きる信仰が試されています。キリストは、御自身の十字架によりサタンに勝利してくださいました。だからこそ、キリストにあって与えられる神の国における永遠の祝福は、私たちに揺るぎなく与えられています。

子どもたちにも、それぞれの生活の場において、日々、信仰が試されています。だからこそ、主によって与えられる救いの素晴らしさを伝え、信仰の戦いに勝利が約束されていることを伝えて頂きたい。

「今の時を知ろう！」

今週の土曜日は2月11日です。みんなは、何の日か知っていますか？ 今年も土曜日だけれども、「建国記念の日」という国民の祝日であり、休日になっていますね。しかし、主なる神さまを信じている私たちは、この日を「建国記念の日」とは呼ばず、「信教の自由を守る日」と呼びます。なぜ、教会は、主なる神さまを信じている人たちは、この様に呼ぶのでしょうか？

「建国記念の日」が定められたのは、神話に基づいており、神社において天皇が即位した日とされています。そして「建国記念の日」を祝おうとするのは、天皇を神に位置づけようとする狙いがあるのです。現実には、戦争が行われていた頃までは、日本に住む全員に神社参拝をすることが求められ、さらに「天皇が神である」と告白し、天皇の写真に頭を下げるのが求められたのです。

しかし、天皇は神でしょうか？ 一人の人間にすぎません。神さまは、父・子・聖霊なる主なる神さま以外にいません。そして神社にも神は存在

しません。だからこそ私たちは、神ではないものを神としようとしていることに対して、そうではないんですよとの抗議の意味と、私たち自身の信仰を貫く意志を明らかにするために、2月11日を、「信教の自由を守る日」と呼んでいるのです。

さて、イエスさまの弟子たちは、イエスさまに対して、「世の終わりのときには、どんな徴があるのですか」と尋ねます(24:3)。

イエスさまは弟子たちに対して答えられます。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたし（イエスさま）の名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがメシア（救い主→神）だ』と言って、多くの人を惑わすだろう」。イエスさまの言葉を、現在の私たちにあてはめて考えますと、「天皇は神だ、神社に参拝しなければならない」と語る人たちが必ず出て来るのです。これが世の終わりである証拠であるのです。

世の終わりには、戦争や飢饉、地震がいろんな

所で発生します。昨年、大きな地震が発生しましたし、世界を見渡せば飢餓状態にある人たちも多くあります。世の終わりは近いのでしょうか？確かに今は世の終わりの時代です。しかし、あわてはいけません。イエスさまが、十字架の死から復活を遂げられ、天に昇って行かれましたが、この時から終わりの時は始まっているのです。ずっと、終わりの時です。そして、イエスさまが、もう一度この世に来てくださる時、最後の審判が行われ、神の国が完成し、この時に神さまを信じているクリスチャンは神の国（天国）に行くのです。イエスさまは、いつ、この時が来るかは、あなたたちは知らないから、準備をしておくようにと、語られているのです。準備さえしていれば、あわてたり、おびえたりする必要はないのです。

では、私たちは、どのようにすればよいのでしょうか？主なる神さまが唯一の救い主であり、イエスさまが再び来られる時に、神さまを信じている私たちは、永遠の祝福である天国に入れられる喜びにあることを、はっきりと信じることです。イエスさまは、十字架の上で死を遂げられましたが、三日目の朝に復活してくださいました。だからこそ、イエスさまを信じていれば、私たちが地上に生きている間に、イエスさまが再び来られなくても、イエスさまは私たちをイエスさまと同じように復活させてくださり、天国に導いてくださ

います。

そうすれば、「天皇を神として拝みなさい」、「神社に参拝しなさい」、「〇〇が神だ」、「〇〇を拝まなければ祟（たた）りが来る」といったことを言われたとしても、「神さまはイエスさまだけだよ」、「天皇は一人の人間でしょ」、「神社では神を拝めないよ。教会こそ、神さまを礼拝する場所だよ」……と語ることが出来るのです。

今の時、それは、イエスさまが再び来られる時を待っている終末（終わりの時）です。こういう時には、必ず、神さまを信じる私たちを混乱させ、私たちを神さまから離れさせようとする人たちがいるのです。しかし、神さまは、イエスさまの十字架によって私たちを救ってくださり、そして私たちが神の国に導いてくださるのです。だからこそ、私たちは、永遠の生命の希望に生き続け、どのような時にも、神さまを裏切ることなく、神さまを信じ続け、神さまを証しし続けることが求められています。どのような時にも、神さまを信じ続け、耐え忍ぶ人のことを、神さまは喜んでくださいます。

今日でも、明日でも、いつ、イエスさまが私たちを神の国に迎えに来てくださってもよいように、イエスさまを救い主として信じて、神さまを証しし続けていきましょう。（辻 幸宏）

〔今週の暗唱聖句〕 エフェソの信徒への手紙 6章11節

悪魔の策略に対抗して立つことができるように、
神の武具を身に着けなさい。



〈ねらい〉

説教展開例では、世の終わりのしるしと信仰の戦いとを関連づけて記されていますが、幼稚科では主題どおり神殿崩壊の予告にしばって展開します。さまざまな終末のしるしを語るとは、恐怖感をあおってしまうので、イエスさまの再臨に話を持っていきました。これで次回以降に話がつながると思います。

〈展開例〉

【お話】

イエスさまが地上におられた頃、エルサレムには神殿がありました。とても立派な神殿で、屋根は金、壁はきれいな石でできていて、お日様の光に照らされるときらきら輝いていたそうです。弟子の一人が、その神殿を指さして言いました。「イエスさま、なんてすばらしい建物でしょう！」

ところがイエス様はこう言ったのです。「この神殿は必ず破壊されてこなごなになります」「えっ！」弟子たちは驚きました。でもその70年後に本当に神殿はローマの兵隊たちによってこなごなに破壊されてしまいました。イエスさまの言ったとおりになりました。

神殿がこなごなにされることは悲しいことでした。でもイエスさまは、楽しいことも約束してくれました。それは天におられるイエスさまが、再び戻って来てくださるということです。イエスさまがおっしゃったことは必ずそのとおりになるし、イエスさまは必ず約束を守るお方です。イエスさま、はやく来てください、とみんなでお祈りしましょう！

【祈り】

大好きなイエスさま、どうかはやく来てください。そしてわたしたちを天国へ連れてってください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈幼稚科カテキズム（再臨）〉

てんにおられ
る、いえすさま
は、

くもにのって、
またきてくだ
さいます

〈暗唱聖句カード〉

やくそく



^{ばしょ}場所を用意したら、^{もど}戻ってきて、
あなたがたをわたしの^{むか}もとに迎
える。(ヨハネ^{よはね}14:3)



ねらい

ここでは終末のしるしとして飢饉や地震や戦争の騒ぎが起こると書かれているので、暗いイメージを持ちがちである。しかし、それらはすべて「産みの苦しみのはじまり」であり、新しいものが生じる希望を感じることができる。神殿の崩壊は悲劇かもしれないが、その代わりに、神の子の復活の生きた体の交わりという新しい出来事が生じたのである。目に見える神殿は崩壊したが、いつでもどこでも、生きた礼拝を可能とする神と人の出会いの霊的な場所が生まれたのである。

展開例

ここでは終末のしるしとして、否定的なことが多く語られている。不法がはびこり、多くの人の愛が冷え、つまずき、裏切り、憎み合う

人々が増えると語られている。すなわち、人間の力だけでは、世界が減ぶ方向へと向かっていると言えよう。

しかし、神の国の福音は全世界に宣教されている。それゆえ、救われる者が起こされるという神の働きとしての「産みの痛み」の歴史とも言えよう。

肝要なのは、最後まであきらめしないで、福音宣教の業に励むことである。最後まで耐え忍ぶ者は救われるのである。

祈り

人間の働きは罪がともなうので、よい行いができず、世界を減ぼす方向に向かってしまうことを懺悔します。ただ、神の福音、神の恵みによる産みの苦しみの力を信じて、最後まであきらめることがないようにお守りください。

～ 話し合ってみよう ～

世の終わりが滅びとなるのか、それとも救いとなるのか、あなたはどちらの可能性を信じますか？
話し合ってみよう。



自由メモ

**聖書日課**

マタイ 24：1～14節

暗唱聖句

悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。

(エフェソ6：11)

〈ねらい〉

エルサレムの崩壊をとおして、さらに、やがてキリストが再び来られる約束をとおして、キリストへの信頼を強める。つまり、まず、あの栄えたエルサレムが崩壊を迎えるに至り、事実、崩壊したこと。次に、この世はいつまでも続くのではなく、神様によって終わりが来ることを教えて、いつ、そのようになってよいように心構えをうながす。

〈展開例〉

- (1) イエス様は、エルサレムの崩壊を予告されました。そして、そのとおり、エルサレム神殿は、やがてローマ軍によって崩壊しました。地上から神殿はなくなり、神様が共に住まわれる選びの民は消え去ったのでしょうか。決して、そうではありません。神殿崩壊の後、神様は手で作られた宮に住まわれるのではなく、イエス様への信仰によって作られる霊的な宮に共に住んでくださることになりました。そのことから私たちは目には見えない神様を心から信頼して歩もうではありませんか。

質問として、「皆さんの心の中に礼拝をじゃまするようなものがありますか」と尋ねる。いくつか出してもらって、礼拝に出席する心の態度はどうすれば良いか話し合う。

- (2) 終末の前ぶれについて、9節では、飢饉や地

震等、外部からの迫害について記されていますが、10節～13節では、教会自体の腐敗を記しています。ここでは多くの人という言葉が出てきますが、これは多くの信者のことで、教会の大部分がつまづき、惑わされていきます。内容としては、金銭を愛する者、傲慢な者、大言壮語する者等が対象です。さて、この「多くの人」という言葉は24章5～14節の短い箇所は何回出てくるのでしょうか？

- (3) 終末のしるしとして、イエス様は人に惑わされないように気をつけよ、とおっしゃられました。そして、それから最後が来るのです。終わりの時です。それでは、「その時」という言葉は、24節9～31節の間に何回でてくるのでしょうか？

- (4) このように終末を迎えるのですが、決して悲しむべきことではありません。その日、その時は神さまお一人だけが定めてくださっていますので、私たち、イエス様を信じる者たちは神の国の到来を希望を持って迎えることができるのです。

〈祈り〉

天の神様、私たちが終末をいつ迎えても良いように心構えができますように。祈りある生活を行っていただけますように、お守りください。



対話の手掛かりとして……

- ①この世の終わりについて考えたことがあるでしょうか。この世の終わりなんて遠い現実のことだと思ふ人もいれば、いったいどんなことが起こるのだろうかと興味を持っている人もいるでしょう。そのような関心から聖書を、謎を解くようにして読む人たちもいるかもしれません。聖書には確かに世の終わりに起こる出来事の数々が記されているからです。しかし、聖書が本来語ろうとしている意図を理解しなければ、本当に聖書に聴いたということにはなりません。
- ②今回のテキストでは、主イエスご自身が世の終わりの前兆として起こる様々なことを挙げておられます。そこを読むと戦争、飢饉、地震、偽預言者の出現、不法などがはびこるということです。主イエスの言葉と現実の世界の状況を照らし合わせると、その通りだと思ふことがいくつもあることに気付かされます。ますます世の終わりだと騒ぎ立てる人もいるでしょう。世の終わりについて、興味半分だった人も、ここに記されていることが、自分のこととして現実に迫って来たならば、面白おかしく聖書など読めないはずです。このままでは、どこかで終わりが来てしまうという不安が私たちを支配するようになります。
- ③不安な時、私たちは安心を求めようとします。世の終わりが来ても、滅びることのない確かなものを求め、それにより頼もうとします。弟子たちは当時エルサレムにあった立派な神殿により頼もうとしました。私たちも弟子たちと同じように、終わりへの不安の中で、何かを指さして生きているのではないのでしょうか。ここには確かなもの、支えとなるものがある、これに依り頼んでいれば安心できる、私たちはそういうものを指さしながら、また探し求めながら生きているのです。しかし、私たちが依り頼んでい

るものは、本当に崩れることのない確かなものなのでしょうか。

- ④この世の終わりと聞くと、戦争や天災といった光景をすぐに思い浮かべてしまいます。しかし、世の終わりは、そういったこの世的な出来事によって終わりは来ないのです。主イエスの言葉に注目してみると、「そういうことが起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない」(6節)とあるとおりです。本当の終わりは、主イエスが再臨することによって、この世の終わりがもたらされるのです(3節)。だから、戦争、飢饉、地震、偽預言者、不法がはびこり、多くの人の愛が冷えるという事態も起きたとしても慌てたり、騒いだり、必要以上に心配するのではなく、主の言葉に聴くものでありたいのです。そのためには、日頃から主に依り頼んで生きる者でありたいのです。
- ⑤私たちの生きるこの世界や人生において、主が語られたような様々な苦しみや悲しみがおとずれます。苦勞して築き上げてきたものが音をたてて崩壊していくことや、命さえも奪い取られていくような、そういう苦難や悲慘が必ずやたくさん起こってくることでしょう。そのようなことを聞くと、私たちの将来は何の希望も喜びもないのだ。辛いことがこれから先待ち構えているのだったら、生きていてもつまらないではないかと思うかもしれません。しかし、やがて来られる主イエスを待ち望みながら生きる時、何の希望もないと諦めていたそのところで、思いもしなかった福音の力に圧倒される経験することでしょう。地上の教会は、2千年の間、この福音の奇跡を見てきたのですから。その証しが今の私たちのところにまで届いています。私たちもこの恵みに連なりましょう。「産みの苦しみ」であることを信じ、最後まで耐え忍ぶことができるように祈りを熱くしましょう。

この箇所では、再臨の時の不確定性と、主の再臨に伴う世の終わりについて示されている。その時はいつなのか分からないので、信仰者は常に準備が出来ているように命じられているのである。

〈36節〉 主の再臨の時、すなわち終末の時は、誰も知らない。天使達も主も知らず、父なる神だけが御存知であると記されている。この話では36節の、再臨の時の不確定性が、全体のテーマとなっている。再臨の時は神のみに属する秘密で、私達の知る限りではない。時を憶測するのではなく、むしろ備えをすることが人の成すべきことである。

〈37～39節〉 37節と39節は共に「人の子が来る場合も、このようである」という言葉で並列になっている。主の再臨とノアの洪水の時間が類似していると言っている。ノアの時、神は洪水による滅びとその起こり方を預言されていた。ノアは神に従い、晴天の時に備えをしていた。

38節の「食べたり、飲んだり、めとったり、嫁いだり」は四つが同じ調子で並んでおり、毎日の通常の生活を言い表している。ノア以外の人は、現世的世俗的関心だけに心を奪われ、預言と前兆を信じなかったのである。警告を聞きのがした者は、神の尊厳が突然現れるまで、神を否定し続け、洪水が起こるまで「何も気が付かなかった」とある。不意に襲われることになったのである。その時にはノアの家族以外、一人残らずさらわれた。それは神を信じぬ者達に対する圧倒的な裁きというかたちで、突然の滅びが世界を覆う時である。そして主の再臨も、類似したかたちで来ると記されている。

〈40～41節〉 40節と41節は並行であり、主の再臨の時の人間の分離を表している。ある者は連れて行かれ、ある者は残されるのである。外面的な生活は似ていても、突然ははっきりと分離が打ち立てられる。一見何の区別も見いだされないとともに、分離が行われる。不敬虔に御言葉を侮った人

は天に引き上げられることはない。御言葉を信じ、備えをしていた人々は「連れて行かれる」。これは31節の「天使達によって選ばれた人達」と呼応する。主が来られ、彼らの生活を無限に高める新しいものをもたらししてくださるのである。その時は突然来る。

〈42節〉 『だから』目を覚ましていなさい」と言われている。いつ「自分の主」が帰って来られるかは、分からないからである。主に従う者は常に主の再臨に備えていなくてはならないのである。42節と44節は並行で思いがけない時に来られることを強調し、「目を覚ましている」こと、「用意している」ことを強く描いている。

〈43節〉 家の主人は、泥棒が夜のいつごろ家に押し入るかを知っていたら、目を覚まして、押し入れさせないであろう。泥棒がいつ来るか分かっていながら、居眠りしていたなら、自ら責任を負う。しかしその時は分からず、突然予期せぬ時に主は来られるので、絶えず目を覚ましていないといけないのである。

〈44節〉 再び「だから」で始まり、全体の結論が述べられている。「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」42節と44節は並行で、強調されている。用意をしていないといけない理由は、主の再臨の時が前もって知られることが無いからである。

私達は聖霊の導きの下に常にキリストを見つめ、主の誉れを受け入れ、教会生活をし、神を見る用意を持ち続けることが大切なのである。そして主の預言の確かさを信じ、ゆだねられた務めに誠実に没頭する生活をするのが大切なのである。弟子は弟子らしく振舞い、霊的に目覚め、主との交わりに生きること、そして主に忠実に生きることが大切なのである。いつ起ころうとも、再臨の時に恥じ入らないよう生きよう。この話は、必ずやって来る現実の備えて生きよう、私達に語りかけている。(袴田清子)

テキスト マタイによる福音書 24章36～44節
参照カエキズム 子どもカテキズム 問81

〔単元のねらい〕

「ノアの信仰に倣い、再臨のキリストを待ち望み、信じて備えよう。」 単元目標の通り、「その日、その時」すなわち「人の子が来る日、キリストの再臨の時」は、ノアの時に譬えられ、思いがけない時と結ばれる。「目を覚ましていること」そして「用意していること」は、その時をわきまえて、いつその時が来てもよいように、生活の基盤とすべての営みを、主の日へと方向づけることである。それは、家族や友人を終末的祝福へと導く、伝道の営みと一つである。

「いつその時が来ても」

ある日、ある時。何の前ぶれもなく、そのことは起こりました。とても現実とは思えないような出来事を目の当たりにして、すべての人が息をのみました。人々が食べたり飲んだりして、いつものように穏やかなランチタイムを過ごした後に、とてつもなく大きな地震が起こったのです。結婚式を挙げた花嫁と花婿を囲んで、披露パーティーが続いている最中に、恐ろしい破壊力を持つ津波が押し寄せたのです。午後の仕事を始めていた人のうち、ある人は波にさらわれ、ある人は高台に残されました。夕食のメニューを考えていた人のうち、ある人の命は保たれ、ある人の命は失われたのです。

なぜ、あんな大地震が起こったのか。どうして、そんな大津波が襲ったのか。誰一人、その理由を知る者はいません。造り主なる神さまを信じる者が、どんなに祈り問いかけても、神さまは沈黙なさったままお答えになりません。波にさらわれた人と高台に残された人との間に、人としての違いがあったわけではありません。失われてしまった命と保たれている命との間に、命の尊さにおいて違いがあったわけでもありません。皆ひとしく、命の源なる神さまから、尊い命を授かって生まれたのです。皆ひとしく、養い主なる神さまによって、生きるための必要を与えられて生きていたのです。そして、生と死を分ける出来事が、計り知ることのできない神さまの御心によって起こった

のです。命拾いした人のうち、ある人は立ち上がりましたが、ある人はうずくまったままです。波にさらわれた人のうち、ある人は神の御手に抱かれ天に召されましたが、ある人は地上のどこかに残されたのです。

その日の出来事は、人間の力ではどうも防げない。その時の物事は、人類の知恵ではどうしても説明がつかない。その日・その時を、誰も予め知ることができない。神の圧倒的な業の前に、人間は沈黙するほかない。これだけが真実でした。

これと同じような「その日・その時」が来ると、イエスさまは仰せになります。日本の国の他の地域で大災害が起こる、というわけではありません。「ノアの時と同じ」ように、全世界の全地域で大洪水のような出来事が起こる、ということです。その時こそ「人の子が来る」日だ、ということです。「人の子」と呼ばれるメシア（キリスト）、すなわち復活なさって天に上げられた主イエスさまご自身が「大いなる力と栄光を帯びて、天の雲に乗って」地上に再び来られる日が訪れる。人の子イエスさまが「天使たちを皆従えて来て、栄光の座に着き、すべての国の民を集めて、羊飼いが羊と山羊を分けるように、すべての人を選び分ける」世界の終わりの日・最後の裁きの時が来る。そう仰せなのです。

世界の終わりの日に、キリストが再び地上に來られて、全人類を裁かれる。その時は、いったい、

いつなのでしょうか。イエスさまはこう仰せになります。「その日・その時は、誰も知らない。天使たちも知らない。ただ父だけがご存知である。」父なる神さまだけが知っておられて、独り子イエス・キリストご自身も、それがいつなのかわからない、と仰せなのです。イエスさまが知らないことを、私たちは知ることができません。知ろうとする必要もありません。「いつ」かは分からないが、その日・その時は必ず「来る」。そのことを知っておきなさい、忘れてはならない、と仰せなのです。

ノアとその家族は、大洪水が来ることを神さまから知らされて、命じられたとおり丘の上で箱舟を造りました。その様子を見ていた人々も、大洪水が来ることを知らされたのです。しかし、信じていることができませんでした。あるいは、その日・その時が来ることを信じた人もいたかも知れません。しかし、まだ来ないだろうと思っていたのです。そして、毎日の生活のさまざまなことを考えて時を過ごしているうちに、そのことを忘れてしまったのです。

私たちは、どうでしょうか。2011年3月11日の東日本大地震・大津波を知っている私たちは今日、その大地震・大津波と同じような出来事が、やがて全世界で起こることを改めて知らされたのです。世界の終わりの日に、キリストが再び地上に來られて、全人類を裁かれる。その時は必ず来る。いつかは分からないが必ず訪れる。そうイエスさまから知らされたのです。もしも、そのことを知らされても信じないなら、私たちはノアの家族ではなく、箱舟を見ながら笑っている人と同じです。その日・その時が来ることを信じて、まだ来ないだろうと思って忘れてしまうなら、箱舟のこともノアの家族のことも無視する人と同じなのです。ある日突然、世界の終わりが大地震のように起こり、最後の裁きが大津波のように襲うのです。日曜日の礼拝を守っていても、その日のこ

とを忘れない人は「祝福された人」とイエスさまから呼んでもらえますが、その時のことを忘れてしまう者は「呪われた者」と最後の裁きが下るのです。まして、その日・その時のことをまだ知らずにいる家族や友人や仲間が大勢いるのです。このまま私たちが知らせないでいたら、最後の大地震と大津波に呑みこまれてしまうのです。どうして、そのままにしておけるでしょう。

イエスさまは、私たちに勧めておられます。「だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って來られるのか、あなた方には分からないからである。」「だから、あなた方も用意していなさい。人の子は思いがけない時に來るからである。」世界の終わりの日が、いつ來てもよいように、目を覚ましていなさい。最後の裁きの時が、いつ訪れてもよいように、用意をしていなさい。そう勧めておられるのです。

目を覚ましていること。それは、ノアのように、その日・その時が来ることを、いつも忘れずにいることです。用意をしていること。それも、ノアのように、大洪水に備えて、丘の上に箱舟を造り、そこに招き続けることなのです。イエスさまは、そのことを譬えて言われます。「わたし（イエス）のこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川が溢れ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。」生活の土台を、岩の上に置く。人生の基盤を、やがて再び來られる人の子キリストを信じる信仰の上に置く。そして、生活のすべての営みを、その岩の上に建て上げてゆく。人生のすべての目的を、世界の終わりの日に備えることに集中してゆく。その人こそ、裁きの時に、イエスさまから祝福をいただけるのです。イエスさまの言葉を聞いて、それをひたすら行った。その人こそ、たとい一度は死んでも、復活して永遠に生きるのです。この福音を隠しておくことはできないのです。（二宮 創）

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 7章24～25節

わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。

雨が降り、川が溢れ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。

〈ねらい〉

「目を覚ましていなさい」を「信じ続ける」「忘れない」という言葉に置き換えて話を構成しました。

〈展開例〉

【お話】

イエスさまは地上のおられた時に、約束してくれました。「わたしはまた雲に乗って帰ってきます。」今イエスさまは、どこにおられるのでしょうか。そうです。天におられます。天におられて、わたしたちを見ておられます。守っておられます。愛してくださっています。それにイエスさまは、天国で、わたしたちのために家を用意してくださっています。そのイエスさまが、いつ帰ってこられるのか？ それは教えてくれませんでした。明日かもしれません。来年かもしれません。100年後かもしれません。1000年後かもしれません。でも必ず帰ってきてくれます。

だからイエスさまは、「目を覚ましていなさい」と言われました。それは、わたしを忘れないで、いつまでもわたしのことを信じていなさい、ということです。イエスさまが帰ってこられた時、「誰だっけ？」と言う人がいたら、イエスさまもその人に向かって「私もあなたを知らない」と言われます。そんなことにならないようイエスさまのことを信じ、忘れないようにしましょうね。

【祈り】

愛するイエスさま。あなたが帰ってくる日が

とってもたのしみです。どうかイエスさまのことを忘れないで、信じ続けることができますように。イエスさまのお名前で、お祈りします。アーメン。

〈幼稚科カテキズム（再臨2）〉

いえすさまが
いつくるのか
は、

だれにもわか
りません。

〈暗唱聖句カード〉

めをさましていなさい



だからあなたがたも^{ようい}用意していな
さい。人の子は^{ひと}思いがけない^こ時^{おも}
に^く来るからである。（^{また}マタイ24:
44）



ねらい

「洪水が襲って来て一人残らずさうまで、何も気がつかなかった」と書かれている。東日本の大地震では、その後の洪水によって、多くの人が犠牲となった。福島原子力発電所の事故も「想定外」とみんな口にした。「目をさましていなさい」ということばは、万が一に備えて「用意しておきなさい」という意味である。「思いがけない」ことが起こっても想定外と言わず、すべてに用意しておく心がけが大切であろう。

展開例

ノアの洪水の聖書の話はきいたことがありますか？「洪水が襲って来て一人残らずさうまで、何も気がつかなかった」と書かれていましたが、実は、ノアとその家族は、洪水が来ることを知っていて、ノアの箱舟を造る作業を毎日していましたね。どうして、ノアの家族だけは洪水が来ることを知っていたのでしょう

か？ ノアは神様を信じていたので、神様から洪水が来ることを知らされていたからです。

神様だけは、これから何が起こるのか、未来のことを全部知っていらっしゃいます。ノアはその神様から知らされていて、動物や人間が入ることのできる大きな船を造ったのです。みんなが助かるように、神様はノアに船を造ることを命じたのです。

ノアと家族は、船を造って、助かりましたが、ほかのみんなはその船に乗りませんでした。神様がおっしゃる言葉を信じなかったからです。神様の言葉をしっかり聞いて、ノアの家族のように、「用意する」ことをしていきましょう。

祈り

私たちは明日どんなことが起こるのか、予想できますので、その予想に基づいて用意をする人間にさせてください。何でも知っておられる神様を信じて生きていけますように。

～ 話し合ってみよう ～

雨が降るという天気予報を聞いて、傘を用意しますか？ 傘を用意しないとどうなるか、話し合ってみよう。



自由メモ

**聖書日課**

マタイ 24：36～44

暗唱聖句

わたしの言葉を聞いて行う者は皆、
岩の上に自分の家を建てた賢い人に
似ている。

(マタイ7：24)

〈ねらい〉

ノアの信仰にならって目を覚ましていきましょう。私たちも、終末の時を迎える備えをしながら、イエス様に信頼する生活を行っていくように促す。

〈展開例〉

- (1) キリストは思いがけない時に人の子が来ることの説明として、ノアの洪水の例をあげられました。洪水が突如襲ってきてすべてのものをさらって行くまで、人々は気づかなかったとおっしゃいました。人々が気づかなかった原因は何だったのでしょうか？ 預言や前兆はなかったのでしょうか？ 調べてみましょう。
- (2) 同じことを43節から盗人と家の主人のたとえで、イエス様は以下の内容で説明されています。

家の主人は、盗人がいつ来るのかわかっているなら、目を覚ましていて、自分の家にみすみす入り込ませないようにするでしょう。そのことから、今に生きる私たちも気をつけなければなりません。主人の帰りが遅いため油断して傲慢な生活に陥らないようにしましょう。

ここで傲慢な生活にはどのようなものがあるか、また、逆に主に喜ばれる生活にはどのようなものがあるか話し合しましょう。また、どうしたらノアのように素直に神様を信じて従うことができると思いますか？

〈祈り〉

天の神様、私たちのまわりには、多くのサタンによる誘惑があります。どうか、それに打ち勝つ強い信仰を与えてくださいますように。

イエスさま...



対話の手掛かりとして……

- ①「目を覚ましている」とは、目を覚まして「待つ」ことです。また、「待つ」というのは、自分で何かをしようと言うよりも、相手の行動を待つことです。その相手とは、イエス・キリストです。キリストが来られるのを待つのが、私たちの信仰であり、目覚めていることなのです。では、キリストの再臨を信じて待つとは、具体的にどういうことでしょうか。それは、神さまのこの世界に対するご支配を信じて生きることです。今、この世界は神さまによって支えられていること。そして、やがてイエス・キリストがもう一度来られる時、そのご支配が完成し、この世が終わることを信じて生きることです。

- ②逆にそれを信じない生き方というのは、神さまのご支配とか、主イエスによる救いの恵みなど目に見えないではないか、そんなものがあるという証拠もないではないか。だからそんなことは嘘っぱちだ。この世界は、私の人生は、神さまの導きなどではなく、この世の力、人間の迷惑によって動いているのだ。だからその中で自分も、自分の思い通りに、自分がしたいように生きようとうすることです（37節以下の「ノアの洪水」の物語を参照）。私たちも日々の歩みの中で、神さまのご支配が見えなくなることが幾度もあるのではないのでしょうか。神さまは、なぜこのような辛い出来事や試練をこの世界に、そして私の人生の中にお与えになるのだろうかという、答えの分からない問いの中に立たされることがあります。そして、そのひとつの解決として、「もう神など知らない」と言って自分の好きなように生きようとするのです。

- ③主イエスの再臨を待ち望むことは、今をどう生きるかということと深く関わってきます。世の終わりは、神さまのご支配を忘れたり、見ようとしないう人々にとっては、滅びの日ですが、主

イエスによって示された神さまの愛を信じる者には、救いの日です。だからこそ、私たちは自分の将来を心配し過ぎて、おどおどとする必要はありません。

また、世の終わりを見つめるというのは、すべてのものの終わりを見つめ、自分の人生の終わりである死を見つめて生きることでもあります。それは、どうせ死んでしまうのだから好き勝手に生きればいいということではありません。そうではなく、終わりを見つめるからこそ、「今日」という日を、誠実に生きることです。なぜなら、私たちが見つめ、待っている終わりが、単なる滅びではなく、主イエスの再臨による救いの完成の日だからです。私たちのこの世における労苦や涙が、そこでこそ報われるからです（黙示録21:4）。この世界が、そのような神さまのご支配の完成へと向かっていることを信じているからこそ、私たちは今この時を、忍耐と希望に生きることができるのです。

- ④今回のテキストの直前には、「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」（35節）という御言葉があります（イザヤ40:8参照）。神さまのご支配が見えないという現実の中に置かれたとしても、神の言葉を聴き続ける、それに従って生きる時に、必ず神さまのご支配が見えて来ます。神の言葉を聴き続ける群れである教会において、神の恵みは明らかになります。教会の子どもたちも忙しい日々を過ごしています。教会に行っているから、自分の好きなことができる、自分の将来に向けての準備を十分にすることができないと思っている者たちもいることでしょう。しかし、事柄は逆なのです。この世が滅びても、決して滅びることのない神の言葉が教会に与えられているがゆえに、自分の将来や世の終わりしっかりと見つめて生きていくことができるのです。

この箇所は24章45節の「賢い僕」についての解説にあたる。婚宴を待ち望む譬えは、主を信じる者の生活があたかも婚礼の祝いの前夜であることを示す。婚宴までの間、用意を整えて、待ち望む必要があることを示している。終末の主の再臨は突然やって来るからである。

〈1～2節〉 天の国は、おとめたちに起こる事に譬えられている。おとめたちとは、婚宴の時に花嫁に付き添う友人のことと考えられる。花嫁の友人たちが真夜中に来る花婿を、ともしびを灯して迎え、一緒に婚宴祝いの場所に行くという、実際の習慣を用いている。またマタイ9章15節から、花婿は主イエス様であると理解できる。

〈3～4節〉 賢いおとめたちは、壺に予備の油を用意していた。愚かなおとめたちは花婿が遅れることを想定した、予備の油を用意するという洞察を持たなかった。婚礼においてともしびを灯していることは、花婿を迎える条件である。賢いおとめたちは、婚礼の際に油が不可欠である事を正確に理解していたことと、また予備の油を実際に「用意」していた慎重さの点で賢いのである。出迎える「用意」が出来ているか否かがこの話の重要な点である。

〈5節〉 花婿の遅れのゆえに、全員が眠ってしまった。「遅れ」が話の中で扱われるのは、主の再臨の時が不確定であるからであろう。

〈6～7節〉 しばらくの時が過ぎて真夜中となり、ともしびの油が少なくなって来た頃、叫び声がした。「花婿だ、迎えに出なさい」。おとめたちは飛び起きて、それぞれのともしびを準備して油をさし、灯を整える。

〈8～9節〉 しかし、愚かなおとめたちのともしびは、油がほとんど無くなり、灯が消えそうであった。「油を分けてください。わたしたちのともしびは消えそうです」。賢いおとめたちは「だめです。分けてあげるほどはありません」と断った。そし

て自分自身で買いに行くように指示した。

油は聖霊と理解できるであろう。賢いおとめとは、主の再臨を待つに当たり、信仰生活や教会生活を、「聖霊」という最も奥深い内的原理に直結させている人と言える。また再臨が遅れても、いつでも備えているという堅忍・耐久性・恒常性が大切なのである。

〈10節〉 愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿は到着し、婚宴の戸は閉められた。愚かなおとめたちは、油を求めるのが遅すぎたのである。花婿の到来、つまり主の再臨の時も、このように油の用意が出来ている者だけが入る。

〈11～12節〉 愚かなおとめたちは新しい油を買ってきた。そして「御主人様、御主人様、開けてください」と言ったが、「はっきりしておく。わたしはお前たちを知らない」という厳しい返事が返ってきた（ルカ13:25参照）。突然やってくる主の再臨に際して、準備を怠ったおとめたちは入れないのである。

主の再臨の時に、閉じた扉は決して開けることはできない。イザヤ22章22節に「わたしは彼の肩に、ダビデの家の鍵を置く。彼が開けば、閉じる者はなく、彼が閉じれば、開く者はないであろう」と記されているとおりである。

〈13節〉 『だから』私達は「目を覚まして」いないといけない。これは身体的な意味ではなく、霊的な目覚めを意味している。いつ主が到来されても大丈夫なように、備えていることが大切なのである。主の日は前もって知らされないからである。

神との関係は各人が個人的に、神と築くものである。聖霊による神の賜物も兄弟姉妹の間で取引できない。霊的な祝福、賜物は直接神に求める以外にないものである。それ故に、私たちは聖霊に助けられて信仰生活を築き、常に霊的な目が開いていることを大切にしなければならぬのである。

（袴田清子）

2月19日 「『十人のおとめ』のたとえ」 説教展開例

テキスト マタイによる福音書 25章1～13節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問81

〔単元のねらい〕

「日々、御言葉に聴き、主との交わりに生き、信仰のともし火をともし続けよう。」この単元目標の内容が、譬え話の筋に沿って物語られねばならない。「十人のおとめ」と「花婿」との関係、「ともし火を持って出迎える」その役割、「油を用意する」ことが「賢い」とされる意味、「眠気がさして眠り込んでしまう」その事実、「油を分けてあげられない」その理由、「婚宴の戸が閉められる」その秘儀。これらを、当時の婚礼の習慣と情景によって、いきいきと物語りたい。

「灯火の油を用意する」

今日は、結婚式のお話です。それも、イエスさまの時代の、ユダヤの国の花婿と花嫁の物語です。一人の若者が一人の乙女を見初めて、二人が愛し合い、結婚の約束を交わして夫婦になる。そのような結婚もありましたが、多くの場合は、二つの家の親どうしが約束を交わし、息子と娘を許嫁にして、一年ほどの婚約期間のあと結婚させる。それが普通でありました。

結婚式は、花婿の家で行われます。婚約期間の終わりが迫ると、いよいよ婚礼の日に向けて準備に大わらわです。披露宴の席には、すべての親戚が呼ばれ、花婿と花嫁のすべての友人、友人の友人、そしてすべての村人が招かれます。花婿の家は、満席の客人を盛大にもてなすのです。結婚式を取り仕切るのは、花婿の友人たち（若者たち）です。彼らは、常に花婿の側にいて、すべてに気を配り、楽しく愉快に振る舞う介添え人です。結婚式の前日、披露宴の準備が整う夕方頃、花婿は婚礼のために仕立てられた晴れ着を纏い、ソロモン王のように冠を頂きます。介添え人らの指揮のもとに行列が組まれ、花嫁を迎えに出かけてゆくのです。

一方、花嫁の家では、花嫁の装いに余念がありません。髪をふさふさと垂らし、顔をヴェールで覆い、額の上に金の飾りをつけ、宝石の装身具で飾ります。花嫁に付き添うのは、花嫁の友人たち（乙女たち）です。彼女らは、花嫁の家の玄関先で、

灯火を持って待ちます。花婿と若者らを出迎え、花嫁を輿に乗せて、花嫁の家から花婿の家まで、壮麗な花嫁行列に付き添うのです。そして、結婚式と披露宴でも、花嫁の付き添い役を務めるのです。

いよいよ婚礼の日の前夜、花嫁の家の玄関先には、十人の乙女が灯火をともし待っています。五人の乙女は灯火を持っていましたが、油を用意していませんでした。他の五人の乙女は灯火とともに、花嫁行列に必要な分の油を壺に取り分けて用意していました。今か今かと待つのですが、いっこうに花婿は現れません。とつぷりと夜はふけてゆきます。待ちくたびれて、緊張が途切れたせいか、十人の乙女は居眠りを始めます。油を用意していた乙女らは、いつ花婿が訪れても大丈夫、そう安心して居眠りできたでしょう。しかし用意していない乙女らは、どんな気持ちだったのでしょうか……。

すると突然！「花婿だ！ 迎えに出よ！」。真夜中に叫ぶ声がして、十人の乙女らは目を覚まします。灯火が消えかけています。油を用意していた五人は急いで、灯火を整え直し、迎えに出ようとします。しかし、油を用意していなかった五人は慌てて、「油を分けてください」と頼みますが、断られてしまうのです。もしも油を分けたら、十人とも行列の途中で灯火が消え、花嫁の付き添いを果たせなくなるからです。花婿に対して、礼を

失することになるからです。

灯火を整えた乙女らは花嫁行列に付き添ってゆき、灯火の消えかけた乙女らは急いで油を買いにゆきます。しかし真夜中に油を売ってくれる店は見つかりません。彼女らが手間取っているうちに、花嫁と付き添いの乙女らは、花婿の家に着き、結婚式に臨み、披露宴の席に着くのです。そこで、花婿の家の玄関戸は閉められます。遅れてきた乙女らは、「ご主人様！ ご主人様！（主よ！ 主よ！）開けてください！」と叫びますが、家の主人から「お前たちを知らない」と言われ、閉め出されてしまうのです。

花婿の家の玄関戸が閉められる。イエスさまがそう語られるのを聞いて、ユダヤの人々は「アレ！ 変だぞ」と思ったでしょう。婚礼の日から7日間、宴会は延々と続き、花婿の家の玄関は開けっ放しで、あらゆる人が出入り自由のはずだからです。そこで人々は気付いたでしょう。「さては？」これは普通の物語ではないと。イエスさまの譬え話に違いないと。

アーメン！ その通りです。「花婿」は十字架のキリスト、すなわち復活の主イエスのことで、「花婿の介添え人」は預言者、すなわち福音の伝道者のことです。「花嫁」は主の民、すなわちキリストの教会のことで、「花嫁の付き添い役」は教会の奉仕者、すなわち主のしもべ・はしためのことです。「花嫁の家」は地上の住まいで、「花婿の家」は天の永遠の住まい。「婚礼の日」は人の世の終わりの日で、「結婚披露宴」は神の国の完成を祝う宴会。そこで「玄関戸が閉められる」のは、最後の審判があるからです。

なぜ、花婿は遅れたのでしょうか。宴席がなかなか満員にならなかったからです。呼んでいた親戚や招いていた人々が来なかったのです。花婿の家の主人は、なんとか満席にしようと、召使いを町の大通りに送り出し、誰彼かまわず宴会に連れて来させます。招かれた人のうち、礼服を着ていない者は婚礼の客には選ばれず、宴席に着くことは許されませんでした。そんな事情で、花婿も

介添え人らも、花嫁を迎えに行くのが大幅に遅れたのです。これは、神の国が「すでに」到来したものの「いまだ」完成していない今の時代、すなわち、福音がまだ全世界に宣教されておらず、神の民の全員がまだ召されていない今の時代を譬えているです。

花嫁の付き添い役が持つ「灯火」とは、信仰に他なりません。十人の乙女らは、同じ信仰を持つ姉妹たち、教会の奉仕者たちです。そこで、油を用意していなかった乙女らは「愚か」と呼ばれます。花婿はすぐに来る。そう信じ込んで、遅れることを想定していなかったからです。一方、花婿が遅れる場合も考え、花嫁行列に必要な油を取り分けて用意しておいた乙女らは「賢い」と呼ばれるのです。

灯火は持っていたが油を用意していなかった乙女らが、婚宴から締め出されたように、イエスさまを主と呼ぶ信仰は持っていても天の父なる神さまの御心を行わない者は、天の国に入ることできません（7:21）。主のしもべたち、教会の奉仕者たちが信仰を持ち、光を輝かせる（5:14～16）ために用意しておく「油」とは、神の御心を行うことに他なりません。

だから目を覚ましていなさい。あなた方は、その日・その時を知らないのだから。このご命令を聞き違ってはなりません。世の終わりの日がいつ来るか分からないから、常に緊張して善き行いに励みなさい、という命令ではありません。恐れにかられて不眠不休で働け、ではなく、むしろ喜びと感謝に満ちて、愛と平安のために奉仕しなさい、というご命令です。賢い乙女たちを御覧なさい。彼女たちは安心して居眠りできたのです。花婿と花嫁を愛し、婚宴に招かれたことに感謝し、喜びを共にしようと最善を尽くしたのです。そのために油を用意したのです。イエスさまと教会を愛し、洗礼と聖餐に招かれたことに感謝し、喜びを共にしようと最善を尽くす。そのように灯火の油を用意する賢さを、私たちも祈り求めましょう。

（二宮 創）

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 7章21節

わたしに向かって、「主よ、主よ」と言う者が皆、天の国に入るわけではない。

わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。

〈ねらい〉

イエスさまはたとえでもってお話をされましたが、それは聞く者が悟るためでした。幼稚園の子供たちには、御言葉を聞いて悟った大人が、もっとかみくだいてお話をすることを主から求められています。灯火の油＝聖霊＝御言葉と共に働くお方、ととらえてお話をつくってみました。

〈展開例〉

【お話】

イエスさまはいつか帰って来られます。どんなお顔なのか、どんなお声なのか、楽しみです。みなさんはお客さんをおむかえするのに、どんなしたくをしますか。（手を上げて）お部屋をかたづけする人？ 掃除機をかける人？ 玄関のはきものをきれいにならべる人？ お飲み物やお菓子を用意する人？ いろいろやって、用意しますよね。それでは、イエスさまをお迎えする用意はどうしたらよいのでしょうか。普通のお客さまはピンポンと鳴らして玄関から入ってこられます。でもイエスさまは天から雲に乗ってやってこられます。そしてイエスさまを信じる人を、世界中から集めてくださいます。どんな人を集めてくださるのかというと、心が明かりで照らされている人です。ふつうの明かりではありませんよ。（聖書を持ちながら）それは聖書という明かりで照らします。聖書の言葉を聞けば聞くほど私たちの心は神様の光で照らされ明るくなります。もし明かりが消えていたら、その人は連れてゆかれません。

ですからイエスさまをおむかえするためには、聖書の言葉で私たちの心を照らし続けることです。毎週教会へ来て、聖書の言葉をどんどん聞きましょうね。そうすれば私たちの心の明かりは消えません。いつイエスさまが来られても大丈夫です。

【祈り】

天の父なる神さま、いつイエスさまが来られてもよいように、聖書のお話をたくさん聞いて、心が明るくなりますように。イエスさまのお名前でお祈りします。アーメン。

〈幼稚園カテキズム（聖書）〉

せいしよは、わたしたちの

ところをてらします。

〈暗唱聖句カード〉

せいしよ



あなたの御言葉は、わたしの道の光（詩編119:105）



ねらい

「花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた」と書かれている。残りの五人はともし火の火を絶やさないようにする油が切れてしまっていたので、慌てて買いに行っているうちに戸が閉められて、間に合わなかったという話である。

信仰者に対する厳しい警告が語られていると解釈できる。しかし、この話は、同時に十人のおとめにとっての喜ばしい花婿との婚宴の話でもある。従って、この喜ばしい婚宴への期待を膨らませて、前向きに喜んで用意する心構えをまず確認する必要があるであろう。

展開例

結婚式は楽しい喜びの日ですね。結婚の日を待ち望んで毎日、喜んでその日を数え、準備

をします。みんなそうだと思います。そのような準備をしない花嫁は、本当に結婚する気があるのかどうかが問われます。ですから、たぶん、残りの五人のおとめたちは、本当に真剣には結婚のことを考えていなかったのではないのでしょうか。

本当の心が通わない、形だけの結婚はあまり楽しくないし、幸せでもないですね。

イエス様を信じ、神様を信じる場合にも、「本気で心から」がお互いにとって幸せなことだと思います。残りの五人にならないように、神様を心から真剣に信じて頼っていきましょう。

祈り

心から神様を信じて毎日喜びを持って生活できるように、神様の聖霊を私の心に満たしてください。

～ 話し合ってみよう ～

将来の楽しいことを想像して、その実現に向けて、毎日生きているかどうか、話し合ってみよう。



自由メモ



聖書日課

マタイ 25 : 1～13

暗唱聖句

「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。」

(マタイ7:21)

〈ねらい〉

五人の賢いおとめたちと五人の愚かなおとめたちとは、どこが違ったのでしょうか。その違いをとおして、イエス様が再び来られる時、天国を受け入れていただくためにどういう生活（準備）をしないといけないかを考える。

〈展開例〉

賢い五人のおとめたちは花婿が来るのが遅くても、ともし火に必要な油を用意していた。いつ来てもいい様に準備をしていた。しかし他の愚かな5人のおとめたちはともし火は持っていたが油の準備ができてなかった。賢いおとめたちに「油をわけてください。ともし火が消えそうです」と頼んだが、「分けてあげるほどはありません。それより店に行って自分の分を買って来なさい」と言われた。買いに行っている間に花婿が到着して、

用意のできている五人は花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。その後、他の五人のおとめたちも来て、戸を開けてくださいとお願いしたが、「わたしはおまえたちを知らない」と言われ、入ることができなかった。

花婿＝イエス様はいつ来られるか、わからない。私達もイエス様がいつ来られてもいいように、いつもイエス様の教えを守り、聖書の教えに聞きしたがった生活を努力し、準備をしよう。信仰のともし灯をともし続けよう。

〈祈り〉

神様、いつも聖書をとおしてイエス様の話を学ぶことができてありがとうございます。いつイエス様が来られても神様の子供として受け入れていただけるよう、私たちの生活を導いてください。イエス様のみ名によってお祈りします。



対話の手掛かりとして……

- ①花婿を待っている十人のおとめたちの中には、五人の愚かな者と五人の賢い者がいました。両者の違いばかりが目立つこの譬え話ですが、共通点もあることに気付かされます。5節を見てみましょう。「ところが、花婿が来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった」とあります。ここに記されていることは、花婿を待っているおとめたち全員が、つまり、主イエスの再臨を信じて待っているクリスチャンたちが眠り込んでしまうことを前提として語られているのです。

- ②しかし同じように眠り込んでしまう者たちの中に、賢い者と愚かな者という違いがあるのです。3～4節を見ると、その違いが、予備の油を持っているかどうかであることが分かります。そうしますと、この予備の油とは、私たちがどれだけきちんと主イエスの再臨に備えているかということだけを意味しているのではないと思います。もし、私たちが用意周到にいつも備えをしているということだけであれば、それは「いつも目を覚ましている」ということです。信仰的に、弱さや欠けがないように、どこにも隙がないように万全の体制をとっているということです。しかしこの賢いおとめたちの姿が語っているのは、そういうことではありません。彼女たちも、他の人たちと同じように、弱い者であり、眠気に負けてしまう者であり、いつもちゃんと待っていることができない者だったのです。

- ③賢い五人のおとめたちが持っていた予備の油は、主イエスの再臨をいつも目覚めて待つことができる弱い者を持っている者であっても、いざという時に、目を覚ましてちゃんと主

イエスを喜んで迎えることができるものです。それは決して、私たちが自分の内に持っているものではありません。あるいは自分の努力や決意によって維持することのできるものでもないと思います。私たちが、信仰において眠り込み、主イエスの到来を覚えて待っていることができなくなってしまうということは、神さまのご支配を疑いということです。それは私たちの罪です。でも、その罪人である私たちが、それでもなおクリスチャンとして、主イエスを喜び迎える者となることができるとすれば、ただひとつ、主イエスによる罪の赦しの恵みによるしか他ありません。この主イエス・キリストの恵みこそが、予備の油なのではないでしょうか。予備の油があるとは、自分の中に何らかの信仰的な蓄えがあるということではなくて、主イエス・キリストによる罪の赦しの恵みを知っていて、それに依り頼むことができる、ということです。それ以外に、眠り込んでしまう私たちが、再び目を覚まし、主イエスを喜び迎える者となる道はないのです。そのために今、主イエスは十字架に向い、その途上でこの譬え話を語っていることを覚えましょう（26章～）。

- ④ところで、なぜ賢いおとめたちは、愚かなおとめたちに油を分けてやらなかったのか、不親切ではないかという素朴な疑問が生まれるかもしれません。しかし、この油は、人に分けてあげることができるようなものではないのです。人のものを借りて間に合わすことのできるようなものではないのです。ですからここで、ひとり一人が、自分の信仰を問われます。主イエスの十字架が、自分のためであり、自分の罪の赦しの恵みがそこにあると受け入れるかどうかを問われるのです。



〈背景と文脈〉

主イエスは十字架にかかられる前、終末について弟子たちを教え、それに関して多くの警告を与えられた。それらはマタイ24～25章に収められている。特に24章45節～25章30節には、主が語られた三つの譬え話が収められていて、再臨を待つキリスト者はどうあるべきかの指針を与えてくれる（註、25:31～46を譬え話に分類する人々もいるが、現代は、そうでない考える人の方が多いようである）。

24章45～51節（忠実な僕と悪い僕）と25章1～13節（十人のおとめ）の二つの譬え話は、いつかわからない再臨に備えることの大切さを教えているのに対して、今日学ぶタラントンの譬え話は、再臨を待つ者の生き方について教えている。

〈タラントンを預けられた僕たち（25:14～18）〉

「旅行に出かける」（14）とは、主イエスが昇天されることを指し、「主人が帰って来て」（19）は、主の再臨を指す。主の昇天から再臨までの間、私たちはどのように生きるべきかが、この譬え話の主題である。

主人は旅に出るにあたり、三人の僕を呼んで、彼の財産を預けた。彼らの能力に従って、それぞれ五タラントン、二タラントン、一タラントンを預けた。タラントンはギリシャで用いた計算用の単位で、6,000デナリオンに値する。一デナリオンは当時の労働者の一日分の賃金に相当するので（マタイ20:1～16参照）、一タラントンでもかなりの額であることがわかる。

五タラントン預かった僕は、早速出て行き、それで商売をして五タラントンの利益をあげた。また二タラントン預かった僕も同様にし、二タラントンもうけた。しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人から預かった金を隠しておいた。先のふたりの僕が、すぐ出て行って預かったタラントンを活用したのに対して、三人目の僕は、それを全く活用しなかった。

〈主人の評価—称賛と叱責（25:19～30）〉

主人が旅から帰り、清算の時が来た。五タラントン預かった僕は、その五タラントンと共にもうけた五タラントンをもって来て、主人に差し出した。また二タラントン預かった僕も、その二タラントンと共にもうけた二タラントンを差し出した。主人は、この二人の僕を忠実な良い僕と称賛し、わずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう、と言った。しかし、三人目の僕は預かった一タラントンだけを持って来て差し出した。彼はそれを全く活用しないで、穴の中に隠しておいたからである。

タラントンは何を指すだろうか。「タラントン」という語から、才能という意味をもつ英語のタレントが派生した。それで、タラントンについても、特別な才能、賜物と解釈する人が多い。しかし執筆者自身は、そのように狭義に解釈するより広義に解釈する方がいい、と考えている。実際に、私たちに属するものは何もなく、すべてのものは主からの預かりものだからである。すなわち、命、体、家族、社会的地位、財産、教育、才能、知識、霊的な賜物など数え上げればきりが無い。それらは僕である私たちの持ち物ではなく、活用して主に利益をもたらすために、私たちに一時的に預けられているものである。預けられているものに私たちは責任を負っており、いつの日か清算のときが来る。

称賛されたふたりの僕は、僕としての意識とそれから生まれる使命感によって、彼らの利益にならないと知りながら、忠実に主人のために働いた。「怠け者の悪い僕」と叱責された僕は、「あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方」（24）と言っているように、主人に対しての見方が曲っていた。僕としての意識と使命感、また主人に対する畏敬の念が欠如していた、と言える。（後藤公子）

※第34号（7月26日聖書研究）からの再掲載です。

テキスト マタイによる福音書 25章14～30節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問61, 62

〔単元のねらい〕

幼稚園の年中・年長ぐらいから小学校低学年を対象に、説教展開例を考えてみた。小さな子どもには、タラントンという表現でなく、思い切って、お金・金貨といった表現に置き換えても良いかも知れない。いずれにせよ、私たち人間は、神さまからたくさんの預かりものをいただいていることをおぼえさせて、それらを自分自身の楽しみだけでなく、友だちなど周りの人たちの楽しみのためにも用いる生き方へと子どもたちを促したい。

「神さまからの預かりもの」

こどもの教会（日曜学校）の愛するお友だち、おはようございます。

まだまだ寒いけれど、みんな、元気ですか？今週も、みんなが、風邪のばい菌に負けないように、元氣一杯、遊んで、勉強できるように、先生、お祈りしているね。

さあ、今日も、イエスさまがしてくださった、たとえ話をしましょう。イエスさまは、こういうお話をしてくださしました。

とってもお金持ちのご主人が、遠い遠い国に旅をすることになったの。ご主人は、召使いさんたち、三人を集めて言いました。

「はい、ご主人さま、何のご用でしょうか」。

「わしは、しばらく、遠い遠い国へ旅をすることにした。わしが留守の間、しっかりお仕事をしておくれ」。

「はい、ご主人さま」。

ご主人は、旅に出る前に、召使いさんたちにお金を預けて、そのお金で、何かお仕事をし、お金を増やすように言い付けました。それで、ご主人は、召使いのAさんには五タラントン（金貨50枚）、召使いのBさんには二タラントン（金貨20枚）、そして、召使いのCさんには一タラントン（金貨10枚）預けました。そして、ご主人は、遠い遠い国へ旅に出かけました。

すると、五タラントン（金貨50枚）預かった、Aさんが言いました。

「よし、ぼくは、このお金で、お百姓さんから作物を買って、市場で売ることしよう！」

すると、二タラントン（金貨20枚）を預かったBさんも言いました。

「よし、ぼくは、このお金で、漁師さんからお魚を買って、市場で売ることしよう！」。

そして、この二人の召使いさんは、一所懸命、市場で、お仕事をしました。

ところが、一タラントン（金貨10枚）を預かったCさんは、とっても困ってしまいました。そして、いろいろ考えて、「そうだ！」って、ついに思い付きました。

何と、Cさん、地面に一所懸命、穴を掘りました。そして、預かった一タラントン（金貨10枚）を埋めてしまいました。いったい、どうするのかな？

しばらくして、ご主人さんが、遠い遠い国から帰って来ました。五タラントン（金貨50枚）を預かったAさんが言いました。

「ご主人さま、ご覧ください。あと五タラントン（金貨50枚）増やしました」。

ご主人は、にこにこしながら、「よくやった。よし、もっと多くのものをお前にまかせよう」とほめました。

二タラントン（金貨20枚）を預かったBさんも言いました。

「ご主人さま、ご覧ください。あと二タラントン（金貨20枚）増やしました」。

ご主人は、にこにこしながら、「よくやった。よし、もっと多くのものをお前にまかせよう」とほめました。

もう一人の召使い、Cさんも、地面の中に埋めておいた一タラントン（金貨10枚）を持ってやって来ました。「ご主人さま、お預かりした一タラントン（金貨10枚）です」。

「何、お前は、何かお仕事をしなかったのか？」

「はい、地面の中に埋めておきました」。

「どうして、お仕事をしなかったのかね」、そう言って、タラントンを全部取り上げてしまいました。

イエスさまは、こういうお話しをしてくださっ

たの。

今日のイエスさまのたとえ話から、みんなにおぼえてもらいたいこと、それは、こういうことです。

みんなも、神さまから、とっても大切なものをいっぱい預かっているの。親切な心を預かっている人は、お友だちに親切にしましょう。力を預かっている人は、お友だちが困っていたら助けてあげましょう。私たち、ぼくたちは、神さまから、とってもすばらしいものをたくさん預かっています。それをお友だちのために役立てようね。神さまは、とっても喜んでくださるよ。 (長谷川潤)

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 25章29節

だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、
持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。



〈ねらい〉

イエスさまが帰ってこられる日への備えとして、

- ①イエスさまのことを忘れず信じ続けること
- ②聖書の言葉を聞いて心を照らしていただくこと

を学んできました。そして本日は、

③自分を神と人のために用いることを学びます。聖書のお話の展開例は、説教展開例が大変参考になります。幼稚科ではそのお話を受けての展開例にいたしました。

〈展開例〉

【お話】

イエスさまが帰って来られた時、イエスさまはわたしたちにこうたずねることでしょう。

- ・〇〇くん、きみはその手や、足をつかって何をしてきましたか？ おとうさん、おかあさんのお手伝いをしましたか？ テレビゲームばかりやってましたか？ なまけていませんでしたか？
- ・□□ちゃん、きみはその目と耳をつかってなにをしてきましたか？ 聖書のおはなしをたくさんききましたか？ 好きなテレビばかり見ていましたか。

その時、「はい、僕はたくさんお手伝いをしました。」「はい、私は聖書のお話をたくさん聞きました。」と言える人は、イエスさまからよいしもべだ、とほめていただけます。

わたしたちがいただいている手や足、耳、目、鼻、そして体は、全部神様からいただいたものです。わたしたちはいつかイエスさまにお会いする時、それらのいただいたものをどのように使ったか聞かれます。そしてそれらを神様と人のために使った人はイエス様からほめていただけます。大好きな先生からほめられるととてもうれしいように、大好きなイエスさまからほめられるほど、嬉しく、

幸せなことはありません。

【祈り】

天のおられる神さま、せいしゅのお話をたくさん聞き、おとうさん、おかあさんのお手伝いもたくさんできるようにしてください。そしてイエスさまにほめていただくことができますように。イエスさまのお名前によって、お祈りします。アーメン。

〈幼稚科カテキズム（人生）〉

わたしたちにとっていちばんのしあわせは、

いえすさまからほめていただくことです。

〈暗唱聖句カード〉

よいしもべ



ちゅうじつ よ しもべ
忠実な良い僕だ。よくやった。
またい
(マタイ25:21)

ねらい

人間は誰でも神から職務を与えられている。「タラントン」は「タレント」と同じ意味で、才能や能力を意味する。各自、神から賜物（能力）を与えられており、その賜物を用いて、仕事することが求められている。その際、能力の点で、他人と比較して仕事をするのではなく、神からの呼びかけ（calling, 職業の意味もある）の声を聞いて、それに応答することが仕事の意味である。

展開例

ここにてでくる、ニタラントン預かった人、五タラントン与えられた人は、タラントンの量

が違うが、神は、それぞれに二倍に増やして仕事をした、その神への応答に注目して、まったく同じ評価を下している。

一タラントンを与えられた人は、その才能を使わず、仕事をしなかったので、神から叱られている。能力の差に注目するのではなく、たとえ小さな仕事であっても、それを神から預かった仕事と考えて、この世の中で忠実に仕事することが求められている。

祈り

他人の能力を羨んだり、自己の能力を卑下することなく、神への感謝の気持ちをもって、喜んで仕事をさせてください。

～ 話し合ってみよう ～

神から与えられている自分の適性は何か、お互いに話し合ってみよう。



自由メモ

**聖書日課**

マタイ 25 : 14～30

暗唱聖句

だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。

(マタイ 25 : 29)

〈ねらい〉

主人が旅行に出かけるとき、三人の僕（召使い）を呼んで、各々の力に応じて、一人には五タラントン（金貨50枚）一人には二タラントン（金貨20枚）もう一人には一タラントン（金貨10枚）をあずけた。主人が旅から帰って来た時、三人は主人からあずかっていたそのお金をどのように使ったのか、また、主人がその三人をどのように評価したのかを見てみましょう。

〈展開例〉

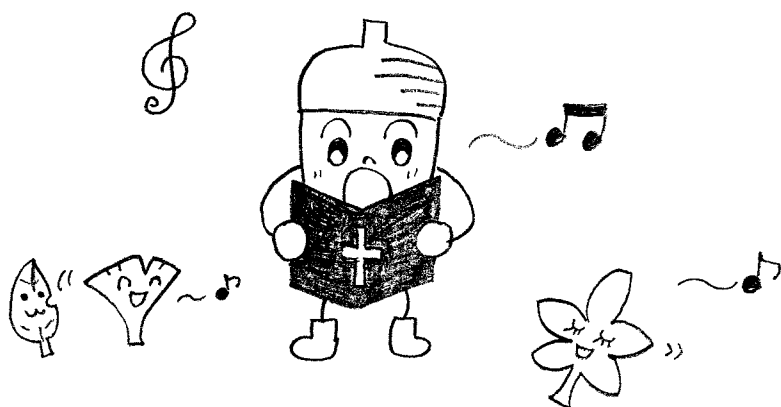
五タラントンを預かった者はすぐに出て行き、熱心に商売をし、ほかに五タラントンをもうけた。二タラントを預かった者は二タラントンをもうけた。一タラントンを預かった者は、出て行って穴を掘り、金貨を隠しておいた。しばらくして、主人が旅から帰ってお金の清算をはじめた。五タラントン、二タラントンの僕の報告に、「よくやった。わずかなものに忠実であったから多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」と言った。

しかし、一タラントンの僕の報告には、「怠け者の悪い僕だ」と言い、タラントンを取り上げてしまった。

タラントンは金貨であるが、神様から私たちに与えられている才能、賜物、命、体等々と考えてもよい。神様からの預かりものである。そういうタラントンをご主人（イエス様）の為に使わなければいけないということである。自分のためではなく、友達、近所の人、おじいさん、おばあさん、体の不自由な人、困っている人、そういう人たちのために、自分が喜んでできることをしよう。そして、神様に喜んでいただける様な生活をしましょう。

〈祈り〉

神様から与えられているタラントンを、自分のためではなく人々のため、役立つよう使うことができるよう、導いてください。イエス様の御名によってお祈りします。



対話の手掛かりとして……

①神さまから与えられている人生の条件、能力や環境が違う中で、周りの人と自分とを見比べてしまうことがあります。そして、僻みの思いに陥り、自分が自分であることを喜べなくなり、自分に与えられているものを生かして前向きに、積極的に生きることができなくなってしまいます。しかし、主イエスは、そんな私たちに、自分に与えられている一タラントンの素晴らしさを、譬え話をとおして教えようとしています。

②神さまは、最初のふたりには五タラントンや二タラントンをお与えになりました。最後の者にはそれより少ない一タラントンです。ここに表われているように、自分より恵まれた人、より豊かな賜物を与えられている人は周りにたくさんいます。そういう意味では神さまは人間を決して平等に造っておられません。人それぞれに違ったものを与えておられます。しかしそれは、人よりも賜物が少ないと感じている自分が、神さまに愛されていないとか軽んじられているということではありません。私たちは、自分に与えられている一タラントンが、素晴らしい賜物であり、それを生かして用いて行くなれば必ず豊かな実りが生まれるのです。ですから、人と自分とを見比べて、あの人には何が与えられているか、この人はどうかと、人のことばかりを見つめている目を、神さまの方に向け直したいのです。

③主人は何のためにしもべたちにお金を預けたのでしょうか。しもべたちに働かせて、その労働の実りを奪い取るためだと三人目のしもべは言っています。要するに、自分の財産を増やすのが主人の目的だと言っているのです。しかし、しもべたちがそのお金を元手に商売をしたところで、それが必ずしも成功するとは限らないのではないのでしょうか。失敗して、投資したものを全て失ってしまうとことだって起こり得るで

しょう。三番目のしもべは、そうならないようにお金を地の中に埋めておいたのです。そうしたら主人は、それならこの金を銀行に入れておけばよかった、利息がついたのにと言いました。だから、この主人がもしも自分の財産を守り、それを確実に増やすということを第一に考えていたならば、五タラントンも二タラントンも一タラントンもすべて、銀行に預けておいた方が危険が少なかったはずです。しかしこの主人は、あえてリスクを犯して、しもべたちにそれを預けました。それはしもべたちを信頼し、期待し、大切に思っているからです。主人は、しもべたちを愛しているからこそ、自分の財産を預けたのです。私たちが、それぞれに違った様々な人生の条件を与えられて、今こうして生かされているのには、この神さまの愛があります。

④神さまが私たちに投資してくださっているのは、私たちのこの体や、能力、才能だけではありません。神さま私たちに、さらに大切なもの、ご自分にとってかけがえのないものを与えてくださいました。それが独り子イエス・キリストです。それは、神さまがその独り子を私たちのために投資してくださったということです。そこには、当然リスクが伴います。投資された私たちが、その宝を本当に生かして、それに相応しく用いて、良い実りを生み出していくとは限りません。にもかかわらず、神さまはこの世に主イエス・キリストを遣わしてくださったのです。

⑤主イエスの十字架を見ると分かるように、私たち人間はイエス・キリストという豊かな恵み、賜物を無駄遣いしてしまいました。しかし、そのような罪人を、神さまは見捨てることなく救ってくださったのです。その神さまが、ひとり一人に豊かな賜物を信頼して与えてくださるのですから、神さまに感謝し、失敗を恐れず、神さまのためにすべてを献げて生きていきたいのです。

主イエスが十字架に上られる受難の道行が26章から始まっている(26:2)。十字架による贖いの御業は旧約の掟に命じられた過越祭と暦を重ねており、神による救済は旧約から新約へ一貫する計画的な働きであることが明かされる。

17節以下場面は、主が弟子たちと最後に共にされた過越の食事を描き出し、後の教会が大切に保持してきた聖餐式の原型がここに置かれる(26～30)。共観福音書は皆この場面を記載しているが、マルコ福音書の記事を基本にマタイ・ルカそれぞれ独自の強調点がある。歴史的な現場をリアルに再現しようと三者(あるいはヨハネも含めて四者)を総合して一つの像から想像力も豊かに語ろうとする試みも意義なしとはいえないが、各々の福音書記者が御言葉において伝えようとしている独自の使信を見失う恐れがある(その為には比較して読むことも必要)。

最後の晩餐は「除酵祭の第一日」のことと記されているが、厳密にはユダヤ暦ニサンの14日が小羊を屠る過越祭で、除酵祭はその翌日15日からの一週間となる(出12:17、レビ23:5～6)。ここでは過越祭を含めて「除酵祭」と呼ぶ習わしを背景としている。イエスは過越の晩餐に先だって弟子たちに場所を用意させた。マルコはそこを具体的に丁寧に叙述するが、マタイは簡潔にイエスの命令だけを記す。これは主イエス御自身が晩餐のホストであり、その準備も御自身が既に定めておられたことを伝えるため。弟子たちは命じられたことを主の言葉通りに果たす(19)。新共同訳にある「あの人」とは特別に意味深長な言葉ではなく、「これこれの人」という程のことで(新改訳)、マタイはそこに関心を示していない。むしろマタイの特別な関心は「わたしの時が近づいた」と弟子たちに語らせているところで、これは他の福音書にはない。イエスが罪人の手に引き渡され、いよいよ十字架による死と復活によって贖いを果たされる時(45)。イエスを取り巻く人々はそれぞれ自分の思いで行動しているが、時を支配するの

は神と意思を一つにするイエス御自身である。

食事の席では二つの主題が現れる。まず、21～25節ではユダの裏切りについて。十二使徒の一人イスカリオテのユダが、イエス殺害を謀っていたユダヤ人の指導者たち(「祭司長や民の長老たち」、26:3～5)に組したことは直前の段落にある(26:14～16)。ユダの人物像や背信の動機については古くから様々な憶測がなされるが、マタイが描き出すユダは、そこにいるイエスをキリストとして受け入れることができないで滅びる人物の代表である。イエスから裏切りを指摘された弟子たちは22節で「主よ、まさかわたしのことでは」と問い返しているが、同じ言葉を返したユダは「先生」と呼ぶ。25節での「それはあなたの言ったことだ」との主の返答はほぼ直訳で、ユダの心を見抜いているイエスが彼の言葉の責任を問う言い方だろう。すべては神の計らいによって果たされるとはいえ、ユダ自身の裏切りは彼の思いと言葉と行動において責任が問われる。食卓に招かれた弟子たちといえども、イエスとの関係は自分ではっきりさせねばならない。

26～29節では文体が多少変わって主イエスの言葉による命令が主体となる。細かく見れば「パン」は「種入れぬパン」とは言われておらず、祈りや食事の順序も過越の手順に乗っ取ってはいない。キリストの制定された晩餐は、過越の晩餐という時の設定と28節に明示された言葉により、罪の赦しを与える契約という中心的な意義を担う新しい記念事である。主の食卓を囲む共同体として教会に集められた者たちは、ここに記された最後の晩餐の場面を思い起こしながら、主御自身が身をささげて勝ち取ってくださった罪の赦しに感謝しつつも、主から離れて行った弟子たちの(31節以下も参照)罪深さを真剣に思わざるを得ない。マタイは決して死んだ人の思い出を記しているのではなく、今も生きて教会において働いておられる主のことを、教会の現実と突き合わせながら我々に告げている。(牧野信成)

3月4日 「過ぎ越しの食事・主の晩餐」 説教展開例

テキスト マタイによる福音書 26章17～30節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問41, 66～68, 71, 74

〔単元のねらい〕

最後の晩餐の記事が今日の私たちに伝える大切なことは、聖餐式制定の歴史的な経緯ばかりでなく、まさに主と共にその場に集う弟子たちが仲間の「裏切り」という痛ましい行為によってどのように自分の罪を自覚し、また、それをご存じの上で御自分の命を弟子たちに与えられた主イエスの愛がどれ程深いものであったかを、いつもまざまざと想起できるようになることです。あいまいなキリスト信仰を子どもたちに与えるのではなく、聖餐式の意義を繰り返し教えながら、子どもたちも自分の目でパンと杯を見つめることができるように導きたいものです。

「イエスさまの過ぎ越し」

教会の礼拝堂には前の方に必ずテーブルがある。普段は献金袋がその上に置いてあったりするから、ただ便利だからあるんだろうなあと考えているかも知れない。でも、そのテーブルは本当は食卓だ。ご飯を一緒に食べる時に使うもの。みんなのお家にもあるのと同じもの。教会の礼拝堂には食卓があるものなんだ。

この食卓が本領を発揮するのは聖餐式の時だ。礼拝に出ていれば時々その様子を見ることができる。月に一度ぐらい聖餐式をする教会が多いと思う。その時には食卓の上にパンとぶどう酒を入れた器が並んで、清潔な白い布が被せてあったりする。行く回数は多くないとしても、聖餐式はとても大切に、その時は周りの大人たちも少し緊張しているのが分かる。

教会は初めから聖餐式を大切にしてきた。それを始めたのはイエスさまだ。今日読んだところにも書いてあった。イエスさまは十字架にかかる前に十二人の弟子たちと一緒に最後の食事をなさった。ご飯を一緒に食べただけではなくて、一緒に食べるパンとぶどう酒に特別な意味を与えて、ずっと今日のことを忘れないで集まって食事をしなさいと弟子たちに教えられた。それで、今も教会では聖餐式が行われている。

けれども、実はイエスさまが聖餐式を始める前から、礼拝と食事には大切な関係があった。それ

は旧約聖書を読んでいると分かるのだけれど、神さまはイスラエルの人々と食事をするのが好きだったんだ。昔モーセとイスラエルの民がシナイ山のふもとで神さまと契約を結ぶ儀式を行ったことがある。神さまはモーセを通じて十戒をくださった。イスラエルの人々はそれを大切にいただいて、十戒とモーセが教えてくれる神さまの言葉に従いますと誓いを立てた。これが契約を結ぶということだ。そこで、モーセとアロンとイスラエルの長老たちが、一緒に集まって神さまを見ながら食事をした、ということが出エジプト記24章に書いてある(11節)。モーセより前の人々も神さまを礼拝する時には牛や羊を祭壇で屠って神さまにおささげしたけれども、祭壇で焼いたお肉は人間が食べてよかった。だから、イスラエルの礼拝は食事と深い関係があった。

そしてイスラエルの人々にとって一番大切な食事は、過ぎ越しの食事だった。これも神さまがモーセを通じてお命じになったことで、一年に一度、イスラエルは過越祭を行った。過越祭というのは、イスラエルの人々がエジプトで奴隷にされていたところ、神さまがモーセをお遣わしになってイスラエルの人々を自由にしてくれた、という出エジプトの出来事をお祝いするお祭りのこと。モーセはエジプトの王様ファラオのところへ行行って、イスラエルは神さまのものだから自由にしてくれる

ようお願いしたのだけれど、神さまを信じないファラオはそれを許さなかった。そこでモーセとアロンは沢山の奇跡を行って本当の神さまの力を伝えようとした。そして最後の奇跡では、エジプト人の男の子、家の跡取りである長男がみんな死んでしまうことになった。その時に神さまがイスラエルにお命じになったことは、イスラエルの家では玄関の門の柱に小羊の血を塗ることで、そうすることで神さまの裁きがイスラエルの家の前を通り過ぎることだった。それで「過ぎ越し」という。また、犠牲にした小羊の肉はその夜に家族や隣近所の人と一緒に食べるようになっていた。こうして、過ぎ越しの出来事が昔エジプトで起こって、イスラエルの人々は自由になり、神さまに仕えて生きる人々になった。過越祭は、こうして神さまの救いをいつも忘れないでいるために、イスラエルの人々が毎年行うようになった、大切に楽しいお祭りだった。

今日読んだマタイ福音書にあるように、イエスさまが弟子たちと一緒に最後の食事をしたのも、過越祭の時だった。「除酵祭」と書いてあるけれども、これは同じこと。イエスさまと弟子たちは、昔神さまがモーセを通じてイスラエルを自由へと解放してくれたことを心でお祝いしながら、神さまの救いを願ってお祭りの食事をしたんだ。その時に、イエスさまは「聖餐式」の話をされた。

聖餐式は、イエスさまによる新しい過ぎ越しだ。イエスさまは食事の後、逮捕されて十字架につけられてしまう。しかし、それはイエスさまが過ぎ越しの小羊になることだった。昔、小羊の血が流されて、イスラエルの家の前を神さまの裁きを通り過ぎて行ったように、イエスさまの血が流され

て、イエスさまを信じる人たちの前から死の裁きが通り過ぎていく。つまり、神さまの前に信じる人たちの罪が赦されて、死んでも滅びない新しい命の自由が与えられる。昔、イスラエルの人々が、神さまを信じて、モーセの言葉の通りに過越祭を守って来たのと同じように、今度は弟子になったあなたたちが、私の言葉の通りに聖餐式を守って、神さまが罪から救いだしてくださることを忘れないでいなさいと、イエスさまはお命じになった。

私たちはそれで、教会の聖餐式を大事にしている。パンはイエスさまの体だという。またぶどう酒はイエスさまの血だという。パンとぶどう酒というのは毎日のふつうの食べ物。ごはんを食べることができないと人は死んでしまうのと同じように、イエスさまは御自分の命を差し出して、私たちの命を支える、いわばご飯になってくれた。聖餐式は、いつでも私たちに、人が生きるのに何が必要か、ということを教えてくれる。イエスさまの十字架によって罪の罰が過ぎ越されたから、私たちは生きることができる。それも、神さまの御前で、恐れなくて、元気に生活することができる。

みんなが大人になって、自分の罪のことが分かるようになって、イスカリオテのユダのようにお金や他の人の言うことを信じるのではなくて、イエスさまの言葉を守って行くのが何より大切だと思えた時、信仰告白をして聖餐を受けることができる。今はパンも杯ももらえないけれども、皆のために準備してあるのだから、いつもよくその様子を見ていることにしよう。聖餐式のテーブルの周りには、いつもイエスさまと弟子たちがいるんだ、ということを心に思い浮かべながら。

(牧野信成)

〔今週の暗唱聖句〕 コリントの信徒への手紙一 5章7節

いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。

現に、あなたがたはパン種の入っていない者なのです。

キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです。



3月4日

「過ぎ越しの食事・主の晩餐」

幼稚科

〈ねらい〉

聖餐式ついて、パンとぶどう酒が示すことと、それが祝いの食卓であることをおぼえることを目標としました。

〈展開例〉

【お話】

みなさんはきっとパーティーが好きだと思います。誕生日パーティーとか、クリスマスパーティーとか、きっと大好きですね。そんなパーティーが好きなわたしたちのために、イエスさまは、ある記念パーティーをお決めになりました。それは、「せいさんしき」と言います。せいさんしきでは、イエスさまを思い出すためにパンとぶどう酒(ジュース)を皆でいただきます。そのパーティーのプレゼントはイエスさまご自身です。イエスさまはわたしたちが罪ゆるされて、生きることができるために、十字架の上で死んでくださいました。パンはそのイエスさまのおからだ、ぶどう酒はイエスさまの血をあらわしています。パンとぶどう酒を見ると、十字架の上で、手足をくぎでうたれ、血を流して苦しまれたイエスさまを思い出します。そのくるしさ、そのいたみは、ほんとうはわたしたちがうけなければならないものでした。イエスさまはすべての人に、パンとぶどう酒をいただきなさいと言われます。つまり、「わたしは、あなたがたへのプレゼントです。わたしを信じ、受けいれなさい。そうすればあなたがたは必ず救われます。」とイエスさまは、みなさんに語りかけておられるのです。

【祈り】

私たちの救い主イエスさま、あなたのきねん

パーティーをありがとうございます。わたしたちもパンとぶどう酒を受けることができますように。イエスさまのお名前で、お祈りします。アーメン。

〈幼稚科カテキズム（聖餐式）〉

せいさんしき
は、いえすさま
がくださった

すくいの きね
ん ぱーていー
だ！

〈暗唱聖句カード〉

ぱんとぶどうしゅ



とって食べなさい。これはわたし
の^{からだ}である。(マタイ26:26)
みな^{みな}この^{さかずき}杯から飲みなさい
(マタイ26:27)



ねらい

神の子イエスの受難と復活の道は、神の道であって、人間はその道を創造することができない。弟子全員がイエスの後に従う行いにおいて失格者であったことを示している。裏切ったのはユダだけではない、弟子全員であることを知る必要がある。

展開例

イエスが「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている」とおっしゃって、弟子たち全員が「主よ、まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めます。

有名なバッハの「マタイ受難曲」では、私たち全員が神の前で罪人であり、イエスを裏切る罪を犯すと歌います。しかし、神には深い憐み

があるので、私たちはその神の恵みに頼り、赦していただくことができます。

結果としてユダが裏切りの行為をしますが、弟子の代表であるペテロも三度イエスを否定しました。ユダが自殺し、ペテロは弟子として再起した、その違いは、ペテロが神の憐みにより頼んで、泣いて赦しを求めたからでした。私たちも悪いことをしてしまった時には、すぐに神に赦しを願って祈りましょう。

祈り

神様は私たちの弱さをよくご存じていらっしゃるのです、悪いことをしてしまった時には、正直に神様に告白し、赦しを求めることができますように。

～ 話し合ってみよう ～

悪いことをしてしまったとき、それを隠して黙っていた方がよいかそれとも、神様に告白してしまった方がよいか、話し合ってみよう。



自由メモ



聖書日課

マタイ 26：17～30節

暗唱聖句

古いパン種をきれいに取り除きなさい。
現に、あなたがたはパン種の入っていない者なのです。キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです。
(コリントー5：7)

〈ねらい〉

イエス様は、十字架にかけられる前の晩、弟子たちと最後の食事をされた。その席で、弟子の一人イスカリオテのユダが裏切ることを話された。そして、パンをさき、また、ぶどうの杯を皆に配られた。現在も聖餐式として続いている、その意味を知ろう。

〈展開例〉

(1) イエス様は弟子たちと最後の晩餐をしました
が……

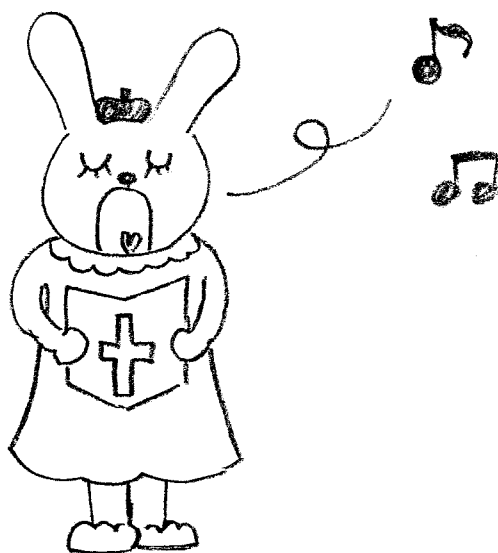
- ・ イエス様を裏切るのは誰ですか？
- ・ イエス様はパンを取り、それを裂き、弟子たちに与えながら言われました。そのパンとは何でしょうか？
- ・ また、杯を取り、感謝の祈りをささげ、杯を渡して言われました。その杯は何でしょうか？ パンと杯はそれぞれ何を表しているのでしょうか？

(2) 現在、おのこの教会では、月一回、または数カ月に一回の割合で、聖餐式が行われています。2000年前に行われたこの出来事ですが、今も、イエス様を私たちの救い主と信じ信仰告白をする人は、誰でも聖餐式にあずかる、参加することが出来ます。イエス様は、私たちの罪を救うために自分の命を投げ出し十字架にかかってくださったのです。私たちもイエス様の大きな愛に感謝したいものです。

(3) 人間は弱いものです。教会から少し離れるとすぐ悪い考えを持ち、悪いことをします。イエス様を心から信じ、神様の前に信仰告白をして、聖餐式に参加できるようになりたいものです。

〈祈り〉

イエス様、私たちの罪を取り除いてくださるために十字架にかかってくださって、ありがとうございます。信仰告白をして、聖餐式に参加できるよう導いてください。



対話の手掛かりとして……

- ①最初の聖餐となった主イエスと弟子たちとの食事は、主イエスが弟子たちと共に食べた最後の食事です。この夕食の後、主イエスは人々に捕えられ、翌日には十字架につけられて殺されてしまいます。主イエスは、弟子たちとの最後の食事になるということを覚えつつ、彼らに聖餐をお与えになりました。聖餐と主イエスの十字架の死は切り離すことができません。聖餐にあずかる時、私たちは、主イエスの十字架の死を覚えるのです。

- ②主イエスが十字架の死について、様々な言い方をすることができると思いますが、今回、心に留めたいことは、主イエスが「過ぎ越しの小羊」として血を流してくださったということです。出エジプト記第12章を見てみましょう。小羊の血が流され、家の柱と鴨居にその血が塗られている家には、神さまの裁きが降ることなく、命が守られたことが記されています。主イエスも、過ぎ越しの小羊として、十字架の上で死んでくださったのです。そのことによって、神さまの裁きが私たちの前を通り越し、罪のゆえに死ぬはずの命が守られたのです。教会は、主の十字架によって、罪の奴隷から解放し救い出してくださいました恵みを忘れることのないように、今も聖餐をお祝いしているのです。

- ③またここでは「契約の血」ということが言われています。過ぎ越しの小羊である主イエスの血が流されることによって、契約が結ばれるのです。契約を結ぶと言っても、それは人間同士の取り引き契約ではなく、神さまから恵みとして与えられるのです。その契約が結ばれる時に、「契約の血」が注がれます。旧約聖書の時代には、動物の血でした。しかし今、神さまは御子イエスをお遣わしになり、主イエスの血を注いで、私たちと新しい契約を結んでくださいました。聖餐の杯は、この主イエスの血によって立てられた新しい契約の印です。聖餐の杯を飲むごと

に私たちは、主の十字架によって、神さまが私たちと新しい契約、を結んでくださり、私たちを神の民としてくださったことを覚えるのです。また、この新しい契約は、主イエス・キリストを神の子、救い主と信じ、その十字架の死が自分の罪の赦しのための犠牲の死であったことを信じる者に与えられます。その信仰を言い表すことが、洗礼を受けることであり、信仰告白をすることです。

- ④聖餐式の様子を見ると分かるように、そこでは、小さなパンと小さなぶどう酒が教会員に配られています。いずれもわずか量です。もしこれだけを食べていたら、私たちの肉体は飢え、死んでしまうことでしょう。けれどもクリスチャンたちは、わずかなパンとぶどう酒から肉体の命にまさる恵みをいただいているのです。パンは主イエスのからだであり、ぶどう酒は主イエスの血です。主イエスが十字架の上で、体を裂き、血を流して死んでくださったこと、またよみがえってくださったことの中に、私たちの希望があるからです。

- ⑤また聖餐は、主イエスが十字架にかかってくださった恵みを思い起こすだけのものではありません。聖餐は将来の救いの約束の印でもあります。29節に記されているように、主は、弟子たちをご自身の再臨によってもたらされる救いの完成にも眼を向けさせようとしておられます。神の国が完成する時、主は私たちを復活の恵みにあずからせ、死に勝利する新しい命、新しい体が与えられます。以前、病床で聖餐をお祝いしたことがありました。病のゆえに自分の力で起きあがって教会に集うことはできません。けれども、病の床で共に賛美をうたい、御言葉を聴き、聖餐を祝いました。肉体の死を前にして、主が与えてくださる永遠の命の希望をそこで共に見ることができました。聖餐を味わうことの喜びを再確認することができた時でした。

〈背景と文脈〉

主イエスは十字架にかかれる前夜、12弟子との最後の晩餐の席でパンを裂き、「これはわたしの体である」(26:26)、また杯を取り、「これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」(26:28)、と言われた。主は過ぎ越しの小羊としてご自分が間もなく贖罪の死を遂げられることをご存じだった。ペトロの信仰告白以来(16:13～16)、ご自分の受難について弟子たちに繰り返し予告されてきたが、今やその受難が現実になりつつあった。

〈ゲツセマネの園での祈りと弟子たちの無力さ(26:36～45)〉

主は弟子たちと共にゲツセマネという園へ来られた(36)。「ゲツセマネ」とは「油絞り」という意である。オリーブ山のふもとにあった園の名称で、多くのオリーブの木が植えられていた。そこは、主イエスが弟子たちと度々行かれた場所である(ルカ22:39; ヨハネ18:2)。主はペトロとゼベダイの子(ヤコブとヨハネ)を伴われ、「石を投げて届くほどの所に離れ」(ルカ22:41)で行かれた。

そのとき主は「悲しみもだえ始められた」(37)。主イエスはまことの神であるが、また、まことの人間である。悲しみもだえられたのは、人間として死に直面するとき感じる恐怖心のためだけではなかった。主の死は罪の贖い主としての死であり、罪人の身代わりとして、父なる神から審かれ、見捨てられ、離されることを意味していた(マタイ27:46参照)。それまで御父との親しい交わりの中にあった主イエスにとって、それは最大の試練であった。主は、その試練に祈りによって立ち向かわれたのである。

最初に「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」(39)、と祈

られた。「杯」は、神の怒りと審きを象徴している。主は罪のないお方であられたのに、罪人の身代わりとして、父なる神に審かれ、怒りを受けなければならなかった。そのような御父との関係における最大の試練のなかでも、「父よ」と呼びかけ、全面的な信頼を寄せておられる。「できることなら」という表現は、「御心ならば」と同じ意、と考えられる。それが神の御心にかなうことであり、可能なら、この杯を過ぎ去らせて欲しい、と願っておられる。父なる神から審かれ、怒りを一身に受けて死ぬことに激しい抵抗感を感じながらも、父なる神の御心にご自分の思いを一致させようとしておられる。

第二の祈りは「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように」(42)である。もしこれ以外の方法がないならば、御心が行われるように、と祈られた。主の思いと父なる神の御心が衝突するなら、自分の思いでなく、父の御心が行われるように、と願っておられる。主イエスの御父に対する究極的な服従がこの祈りに現れている。三度目も二度目と同じ言葉で祈られた(44)。

そののち、「時が近づいた。人の子は罪人たちの手に渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た」(45)と言われ、立ち上がられた。この場合の「時」とは21節で予告されていたユダの裏切りと、その結果としての逮捕、また十字架上の死を指すと思われる。祈りを通して勝利された主は、与えられた杯を飲むために、ご自身を積極的に罪人の手にゆだねられたのである。

主が弟子たちの支えを最も必要としておられる時に彼らは眠ってしまい、主を支えることに失敗した。ここに描かれた弟子たちの無力さは私たちの姿でもある。しかし主は祈りによって勝利され、このような私たち罪人を贖うために、自らの決意で十字架へ向かわれたのである。(後藤公子) ※第36号(3月21日聖書研究)からの再掲載です。

テキスト マタイによる福音書 26章36～46節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24

〔単元のねらい〕

ゲツセマネの祈りにおいても、御子イエスさまが、私たちの身代わりとして、御父から十字架で罰を受けられることが示された。御子を十字架で罰することが、御父の御心であった。私たちを愛するがゆえに、この御父の御心に従われたイエスさまのお陰で、今、罪赦されて、永遠の命にあずかっている私たちがいることをおぼえて、感謝の思いでいよいよ満たされたい。

「ゲツセマネの祈り」

こどもの教会（日曜学校）の愛するお友だち、おはようございます。

今年も、もうすぐ、イエスさまの復活をお祝いするイースターです。今年のイースターは、4月8日の日曜日ですから、その前の4月1日の日曜日から一週間が、イエスさまが苦しまれ、十字架で死なれたことをおぼえる一週間です。“受難週”と呼ばれています。

さて、実は、『マタイによる福音書』では、第21章からが、イエスさまの受難週のお話なのですが、先週は、どんなお話でしたか？ イエスさまがお弟子さんたちと最後のお食事をした時のお話でしたね。“最後の晩餐”と呼ばれています。イエスさまが最後のお食事をされたのは、今で言う木曜日の夜のことでした。それで、今日のお話は、その木曜日の夜に、イエスさまが、お弟子さんたちと最後の食事をなさってから、“オリーブ山”と呼ばれる山に行かれて、ゲツセマネという場所でお祈りをなされた時のお話です。ですから、この時、イエスさまがなさったお祈りは、“ゲツセマネの祈り”と呼ばれています。

ところで、イエスさまは、今で言う金曜日に十字架につけられて殺されました。イエスさまは、十字架につけられる前の日の夜、木曜日の夜に、お弟子さんたちと最後の食事をなさってから、ゲツセマネで、神さまにお祈りをなさったことになります。それで、どうして、イエスさまは十字架につけられたのかというと、ユダヤの国の偉い人

たち、祭司長とか律法学者たちが、イエスさまを憎んだからです。そして、お弟子さんの一人のイスカリオテのユダが裏切って、イエスさま、捕まってしまったのですが、その後、裁判にかけられて、ローマの総督ポンテオ・ピラトによって十字架刑を言い渡されて、とうとう、十字架につけられて殺されてしまったのです。ところが、イエスさまが十字架につけられて殺されたのは、本当は、どうしてだったかと言うと、それは、私たち、ほくたちの罪のためでした。この後も歌いますが、「わたしたちの罪のため 十字架にかかった 主イエスさま」（こどもさんびか38番）なのです。私たちの身代わりに十字架の上で神さまから罰を受けるために、イエスさまは十字架につけられて殺されることをよしとされたのです。そういう十字架の死を前にされて、イエスさまは、とっても大きな悲しみ、恐れを感じられました。愛する私たちのためとは言え、神さまから罰を受けることぐらいとっても悲しいこと、恐ろしいことはありません。ところが、イエスさまは、とっても悲しい、恐ろしいからと言って、十字架への道から逃げ出すようなことはなさいませんでした。まず、神さまにお祈りをされたのです。それが、イエスさまのゲツセマネの祈りです。

イエスさまはこのようにお祈りなさいました。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」（マタイ26:39）。「こ

の杯」というのは、イエスさまの十字架の死のことです。ですから、イエスさまはこういうようにお願いなさったのです。「神さま、あなたがお許しくださるならば、十字架の死を避けることができるようにしてください」。さっき言ったように、愛する私たち、ぼくたちのためとは言え、神さまから罰を受けることぐらいとっても悲しく、恐ろしいことはないからです。けれども、イエスさまは、神さまのお考えを第一となさいました。神さまがどのようにお考えになっているのかを第一となさって、このようにお願いなさったのです。「しかし、私のお願いではなく、神さまがお考えになっている通りに行ってください」。このようにイエスさまがお祈りなさっている時、たぶんイエスさまの額（おでこ）のどこから、血がポタポタと落ちるように汗が地面に落ちたと『ルカによる福音書』には書いてあります（22:44）。それぐらいにイエスさまは苦しかったのです。私たち、ぼくたちのために十字架の上で神さまから罰を受けることは、とっても悲しく、恐ろしいことだったのです。

そのようにして神さまにお祈りするイエスさまのところに、天使が神さまのどこから遣わされて、イエスさまを力づけたとも『ルカによる福音書』には書いてあります（22:43）。そして、イエスさまは、とうとう、神さまのお考えを受け入れて決心することができました。その神さまのお考えとは、愛する独り子イエスさまを私たち、ぼく

たちの身代わりとして十字架の上で罰することによって、私たち、ぼくたちを救うことです。イエスさまが十字架の上で私たち、ぼくたちの身代わりに罰を受ける以外に、私たち、ぼくたちが罰から救われて、天国に行くことのできる方法はなかったのです。

イエスさまは、神さまの独り子でいらっしゃるのに、私たち、ぼくたちを罰から救うために、十字架にかかる前から苦しんでくださいました。今日のお話では、苦しみながらお祈りしてくださいました。また、この後、お弟子さんの一人、イスカリオテのユダに裏切られました。イエスさまの悲しみ、苦しみはとっても大きかったのです。そして、イエスさまは、私たちを罪への罰から救うため、武器を持った大勢の人たちに捕まって、十字架へのとっても辛い、苦しい道を歩んでくださったのです。私たち、ぼくたちを罪への罰から救うため、兄弟げんかをしたり、「ばか」とか「ぼけ」とか悪い言葉を使ってしまったたり、お父さん、お母さんの言うことを聞かなかったり、わがまま言ったり、そういう罪への罰から私たち、ぼくたちを救うために、神さまのお考えを第一とされて、十字架へのとっても辛い、苦しい道を歩んでくださったのです。そういうイエスさまをいつもおぼえて、イエスさまに「ありがとう、感謝します」と言って、今週も、聖書の御言葉に喜んで従って行く神さまの子どもでありたいと願います。

（長谷川潤）

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 26章39節

「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。

しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」。



〈ねらい〉

ゲツセマネの園での、イエスさまのお苦しみを、子供たちにお話します。

〈展開例〉

【お話】

イエスさまは何度も、ご自分が十字架の上で死なれ、三日後によみがえると、あらかじめ弟子たちに話していましたが、その時がついに来しました。それは木曜日の夜でした。イエスさまはゲツセマネという園で祈りましたが、まもなく、とても苦しそうな様子になりました。イエスさまはなんとお祈りしたのでしょうか。すこし離れたところにいたペトロやヨハネさんたちに聞こえた言葉は、「父よ、どうしても、十字架の刑罰を受けなければなりません。できれば受けないようにしてください。でもあなたがそうしなさいと言われるのなら、そのとおりにいたします。」それから弟子たちのところへ行き、「わたしは死ぬばかりに悲しい。」と言われました。

イエスさまは神様ですが、地上におられたときは、人間でもありました。人間の代わりに、父なる神様から見捨てられ、十字架の上で死ななければならないことはわかっていましたが、いざその死刑を前にして悲しかったし、つらかったのです。イエスさまは、もう一度お祈りしました。「わたし以外に誰もできないことであれば、あなたのみこころどおりにいたします。」だんだんとイエスさまのこころはかたまってきました。イエスさまは三度目に祈りました。「父よ、あなたのみこころどおりにいたします。」苦しいお祈りでしたが、お祈りを通してイエスさまの決意は固まりました。イエスさまは、お祈りを通して、さらに強くなり、十字架から逃げたいという弱い自分に打ち

勝たれたのです。

【祈り】

イエスさま。わたしたちの代わりに苦しんで、十字架の罰を受けるために強くなってくださって、ありがとうございます。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈幼稚科カテキズム（受難）〉

イエスさまの
おくるしめは、

わたしたちの
ためです

〈暗唱聖句カード〉

げっせまね



わたしの^{ねが}みこころの願いだおりではなく、
御心の^{また}まに。(マタイ26:39)



ねらい

「人の子は罪人たちの手に引き渡される」と書かれている。受身形で書かれているので、「人の子＝イエス」は、神によって罪人の世界に引き渡される。イエスが罪人の仲間に数えられ、神から見捨てられ、死の刑罰を受けることは、神の御心である。

このイエスは、一人の人間でもあるので、この自己犠牲について三度神に祈り、神が与えた道であることを確認して、「立て、行こう」と自ら決断する。そうして、十字架の道をひたすら黙認される。このイエスの神への服従の強さは、だれも真似ができないものである。そして、弟子たちに一緒に祈ることを求めるイエスの姿は、弱さを持つ人間の一人として当然のことであったであろう。

展開例

イエスさまと一緒に祈っているように頼まれた三人の弟子たちは、ひどく疲れていて、ひと時も祈ることができませんでした。

「心は燃えても、肉体は弱い」と、イエスは同情していただきました。肉体は弱いことは仕方ないとしても、「心が燃えて」いるかどうか、反省しましょう。心が燃えるというのは、熱心であるということです。熱心にイエス様を考え、イエスさまの弟子になるという熱心さを求めていきましょう。なぜなら、イエス様は、この私のために、十字架の道を苦しくても、進む決意をされたからです。

祈り

イエス様は三度も神に祈り、私たちがを罪から救い出すために、決意して、十字架の道を黙々と歩んで行かれたことを感謝します。

～ 話し合ってみよう ～

困ったとき、神様に祈ったことがあるか話し合ってみよう。



自由メモ

**聖書日課**

マタイ 26:36～46

暗唱聖句

「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」

(マタイ 26:39)

〈ねらい〉

どんなに苦しいときでも、父なる神の御心を第一としてお従いしたイエス様のお祈りの態度に学ぶ。

〈展開例〉

(1) 並行記事であるマルコ福音書14章32～42節、ルカ福音書22章39～46節も読んで、みんなで考えましょう。

質問① イエス様は、ゲツセマネの園で何をされましたか？（お祈りをした）

質問② 弟子たちの誰をつれていかれましたか？（ペトロ、ヤコブ、ヨハネ）

質問③ 「死ぬばかりに悲しい」のはなぜ？（イエス様は神であるが、まことの人間でもある。人間として死に直面した時の心の中は、とても恐ろしくてさびしい。また、イエス様は、ご自分が人々の救いのために死ぬ時が近づいていることを知っていた。）

※ほかにも子供の意見を受けとめて考えるようにしましょう。

質問④ 弟子たちは、目を覚まして祈っていましたか？（眠ってしまった。）

※人間の弱さについて話し合ってもよいでしょう。

質問⑤ 「この杯」とは、何の意味でしょうか？（神様の怒りと裁きのことで、イエス様の十字架の死をあらわす。）

(2) イエス様の祈りに注目！

「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」。

イエス様は、罪のないお方であるのに、罪人（ぼくたち、私たち）の身代わりとして、父なる神の裁きを受けてくださった。神様のお考えを、受け入れて、ご自分の願いではなく、父なる神のご計画に従うことを最初から承知しておられました。しかし、実際にすぐ迫って来る死、それは大変なことでした。イエス様のお顔から汗が血の滴りのように地面に落ちたとあります。ついにイエス様は、神様のお考えに従う決心をされたのです。

神様にお従いすることがたいへん難しいことがあります。自分の心の中にサタンが入ってきて、神様に従おうとする心を邪魔することがあります。けれども、サタンの声に負けず、イエス様のように、自分の考えではなく、神様のお考えに従いたいですね。誘惑に負けないように祈っていきましょう。

〈祈り〉

天の父なる神様、今日、分級の時をお守りくださってありがとうございます。私たちのお祈りも、イエス様のお祈りのように、自分のことだけでなく、神様のおよろこびになることを考え、どんな時も、神様のお考えの通りになりますようにと祈ることができるようにしてください。イエス様のみ名によって祈ります。アーメン。



対話の手掛かりとして……

- ①死ぬばかりの悲しさ、苦しみの中で主イエスは
何と祈られたのでしょうか。「わたしの願いど
おりではなく、御心のままに」とあるように、
主は、父なる神の御心が成就することを願われ
たのです。私たちも、祈りの中で、「神さまの
御心がなりますように」と祈ることがよくあり
ます。何よりも、主イエスが「祈る時にはこ
う言いなさい」と教えてくださった「主の祈り」
の中に、「みこころの天になるごとく地にもな
させたまえ」という祈りの言葉がありました。
しかし、ゲツセマネで祈られている主のお姿を
見る時に、主のように苦しみに耐えながら、激
しく祈っているのだろうかとおれませ
せん。ここで、神の御心が行われることは、十
字架の死や神さまの裁きから決して免れるこ
とはないということです。今、自分が抱えている
悩みや悲しみが消えるならば、御心が行われ
ることを必死になって祈るでしょう。でも、もし
その反対であったらばどうでしょうか。御心
が私たちの間に成就することによって、より
いっそう自分が苦しまなければいけないとし
たらば……。御心になるようにと祈りながら、
如何に自分に都合のよい祈りをしているのだろ
うかと、自分の祈り・信仰の姿勢について改め
て問われるような思いがするのです。
- ②祈ることにおいてさえ、罪を犯してしまう私た
ちです。この時、一緒にいた弟子たちも、目を
覚まして主と共に祈ることができず、眠り込ん
でしまいました。でも、主イエスの願いは、私
たちが目を覚まして、祈りの戦いに参与するこ
とです。主イエスは、祈りにおいて戦っておら
れます。自分の思いと神さまの思いがぶつかる
中で、祈りつつ戦っておられるのです。私たち
の人生において、どのようなかたちで神さまの
御心が成就されていくのか、そのことがすべて
分かるわけではないでしょう。自分が願ってい
ること、考えていることとは正反対のかたちで
御心が示されることも十分にあり得るのです。

だから、御心を受け入れることができるように、
また信仰の歩みを耐え抜くことができるよう
に、目を覚まして神さまにお祈りしましょう。

- ③弟子たちは、なぜ、目を覚まして、祈ることが
できなかったのでしょうか。おそらく十字架の持
つ深さをこのときはまだ十分に理解していな
かったからではないでしょうか。祈り抜きに、
主の十字架の意味を理解することはできません。
この後、主の側にいた弟子たちは、イエス
を見捨て、ペトロも「イエスなど知らない」と
否んでしまったのです。主イエスの十字架の意
味を知識のうでで理解していても、すぐに「私
のため」であると理解できるとは限りません。
そういうところで悩んでいる人たちもきっと多
いことでしょう。伝える教師・牧師たちの側も
どうしたら、主の十字架を信じていただけるの
かいつも労苦します。しかし、信仰に至るひと
つの道は、主イエスが「目を覚まして祈りな
さい」とおっしゃっているように、「主の十字架
が私のためであることを信じることができます
ように」と共に祈ることから始まるのではない
でしょうか。
- ④主イエスは、ゲツセマネの祈りにおいても、神
さまのことを、幼子がお父さんを信頼して呼ぶ
ように、「父よ（アッパ）」と呼ばれました。私
たちも、主と同じように、「父よ」と呼ぶこと
へと招かれています。神さまを信じる自信がま
だないとしても、不確かな自分を父なる神に委
ねることができます。しかもそれは、ただ「バ
バ」と甘え続けることではありません。「父よ」
という祈りは、主イエスの祈りの中に表れてい
るように、苦しみや悲しみ、また激しさ、戦い
を伴う呼び名でもあります。この祈りの中で、
私たちは御心を求め、それを受け入れることが
できるのではないのでしょうか。そして、主の十
字架のリアリティーがいつも自分に迫って来る
のです。

テキスト マタイによる福音書 26章69～75節

〈ペトロの決意〉

主イエスが弟子たちに「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずく」（マタイによる福音書26章31節）と語った時に、ペトロは、主イエスに、「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」（33節）と力強く決意を表した。

このペトロの発言に対して主イエスは、「はっきり言っておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」（34節）とあっさりペトロの決意を否定する。

それでもペトロは、「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどと決して申しません」（35節）とさらに力強い決意を表した。

〈ペトロの失敗〉

しかし、ペトロの決意は、あっさりくずれることとなる。そのことがマタイによる福音書26章69節から75節に記されている。

ただしペトロは、何とか主イエスに従って行こうとする。「ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで行き、事の成り行きを見ようと、中に入って、下役たちと一緒に座っていた」（58節）と記されている。

ところが、屋敷の一人の女中がペトロに気付き、近寄って来て、「あなたもガリラヤのイエスと一緒にいた」（69節）と言い出した。ここで、ペトロは、女中に、「何のことを言っているのか、わたしには分からない」（70節）と言って逃げようとした。すると今度は、門の方で、ほかの女中にも、「この人はナザレのイエスと一緒にいました」（71節）と言われる。ここでもペトロは、「そんな人は知らない」（72節）とうそをつく。また、しばらくしてそこにいたほかの人々も、「確かに、お前もあの連中の仲間だ。言葉遣いでそれがわか

る」（73節）と言い始めた。そこでペトロは、彼らを呪いながら、「そんな人は知らない」（74節）と誓い始めた。こうしてペトロは、主イエスを完全に否定した。その時に、鶏が鳴いた。ペトロは、主イエスの「はっきり言っておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」と言われた言葉を思い出して激しく泣いた（75節）。

〈自分の罪を思い知る〉

ペトロは、自分の罪が引き起こしてしまった醜い状況の中で、ただ泣くことしかできなかった。

マタイによる福音書において、次にペトロが登場するのは、ガリラヤの山の上で、復活した主イエスが十一人の弟子たちに語った場面である。

ペトロは、復活の主イエス・キリストに出会ってから、もう主イエスを裏切ることはなかった。ペトロは、大きな失敗をすることで、自分の力ではどうすることもできない自己の罪を思い知ることができた。自分の決意がどんなに一時、力強くても自分の決意だけで主イエスに従っていくことはできない。ペトロは、自己の罪深さを思い知ることで、その罪深さを最初から見抜いていた主イエスに用いられて生きる者となった。すべてを知ってくださる主イエスに信頼して生きる者となった。

私たちも自分の決意に頼る信仰ではなく、私たちの良い部分も悪い部分も知っていてくださる主イエスにのみ信頼して生きていくことが求められている。
(浅野正紀)



テキスト マタイによる福音書 26章69～75節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問28, 29

〔単元のねらい〕

ペトロ自身は、主イエスに従おうとして、大祭司の屋敷の中庭にまで忍び込んだ。しかし、その人間の強さは何ともろいことであろうか。ひとたび自らに危険が及ぶと、たちまち弱さがあらわになってしまう。主イエスに従うどころではなく、主イエスを否定してしまうのである。その人間の弱さと、そこにひそむ罪を引き受けて、主イエスは十字架につけられてくださった。わたしたちの信仰は、この主イエスの十字架によって支えられるほかない。そして、主イエスの十字架は、御父の御心として成し遂げられたことである。わたしたちの信仰の根拠は、ただキリストの十字架と神の愛にあるのである。

「イエスさまに支えられる信仰」

先週、主イエスがゲツセマネで祈りをささげられたことを学びました。そのあとすぐに、ユダヤ人の指導者たち、祭司長と長老たちがやって来て、主イエスは捕まえられてしまいました。今日はペトロのお話なのですが、まず、捕まえられた主イエスのことを簡単にお話ししましょう。

祭司長たちは、主イエスを捕まえると、そのまま大祭司カイアファの屋敷に連れて行きました。主イエスを裁判にかけて、主イエスを死刑にする口実を見つけ出そうとしたのです。次々に、主イエスに不利なウソを言う人が登場しました。けれども、主イエスは、何もお答えになりません。旧約のイザヤ書に、「屠り場に引かれる小羊のように、毛を切る者の前に物を言わない羊のように、彼は口を開かなかった」（イザヤ53:7）とあります。その預言のとおり、主イエスは何もお答えになりませんでした。神の御心として行われる十字架の処刑を、ご自分の身に起こるべきこととして、すでに引き受けておられたからです。

ただ一つ、主イエスがお答えになったことがあります。大祭司の「お前は神の子、メシアなのか」という質問に対して、「それは、あなたが言ったことです」と答えました（26:64）。この主イエスのお答えが「神を冒涇した」と言われて、十字架につけられる理由になるのですが、大切なことなので、お話ししたいと思います。

「それは、あなたが言ったことです」。この言葉は、決して神さまを冒涇する言葉ではありません。主イエスが「わたしが神の子、メシアである」と名乗るかどうかではない。ここでは、質問している大祭司自身が、主イエスを見てどう考えるのか。そのことが大切だということです。もちろん、主イエスは、ご自分のことを救い主である、メシアであるとおっしゃっておられます。そのところで、「本当に救い主なのか」と言って迫るのではなく、「あなたこそ神の子、メシアです」と言って信仰を告白することが大切なのです。大祭司のようにではなく、わたしたち自身が主イエスを信じて、「あなたこそ神の御子、まことの救い主です」と告白することが大切です。

さて、その裁判のとき、弟子たちはどうしていたでしょうか。主イエスが捕まったとき、大祭司の手下に剣で切りつけた弟子がいました。けれども、その弟子を主イエスが止めました。剣で戦うのではない、ということです。そして、主イエスは、大祭司の屋敷に連れて行かれました。弟子たちは、何の抵抗もしない主イエスに驚いたでしょう。主イエスの戦いは、剣の戦いではありません。人の罪との戦いです。そのために、十字架につけられることが必要でした。しかし、弟子たちはまだ御父の御心と主イエスの決断が理解できていま

せん。そのため、捕まえられた主イエスを見捨てて、弟子たちはみな逃げ出しました。

ペトロもたいへん驚いたでしょう。主イエスが捕まえられて、そのまま連れて行かれてしまう。何の抵抗もしない。その様子にあっけにとられていたかもしれません。ただペトロは、逃げ出すのではなく、とどまりました。「たとえ、一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」(26:35)と主イエスに言っていたからです。約束したことは守らなければならない。ペトロはそう思っていました。

ペトロは、遠く離れて主イエスに従い、主イエスが連れ込まれた大祭司の屋敷に忍び込みました。主イエスの弟子であると気づかれないよう、群衆たちに紛れて、そうっと忍び込んだのです。屋敷の中庭で、人々は思い思いに座って、主イエスの裁判を見つめていました。ペトロも、主イエスの裁判をじっと見つめていました。

すると、一人の女中がやって来て、「あなたもガリラヤのイエスと一緒にいた」と言いました。ペトロはいつも主イエスと一緒にいましたから、それを知っている人がいたのでしょう。ペトロは、忍び込んで、びくびくしながら主イエスのことを見ていましたので、思わず答えました。「何のことを言っているのか分かりません」。このときはまだ、それが主イエスを裏切ることにつながるなどと、思いもしなかったでしょう。

別の女中が言いました。「この人はナザレのイエスと一緒にいました」。そう続けて言われて、あたりが少しざわついてきたのでしょう。ペトロは、「これはまずい。自分も捕まえられるかもしれない」と思ったかもしれません。自分の身の危険を感じたのです。それでとっさに「そんな人は知らない」と答えました。しかし、さらに「確かに、お前もあの連中の仲間だ。言葉遣いでそれが分かる」と言われました。ペトロはガリラヤ出身で、言葉に少しガリラヤのなまりがあったのです。

こうして、ペトロは、ついに「そんな人は知らない。ウソならば、自分は呪われたってかまわない」と言って、主イエスを否定してしまいます。主イエスに従いたい、主イエスのおそばにいたいと願っていたペトロが、「主イエスなど知らない」と言ってしまうことになったのです。

そのとき、鶏が鳴きました。鶏の声を聞いて、ペトロは主イエスの言葉を思い出しました。「あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」。主イエスがそうおっしゃっておられた。そのことを思い出して、ペトロは気づきました。主イエスは、主イエスに従いたいと思っていた自分が主イエスを裏切ることになることを知っておられた。知っておられて、その上で、主イエスは、わたしを愛してくださっていた。そして、主イエスを裏切るわたしのために、その罪を引き受けて、裁判にかけられ、十字架につけられてくださるのだ。ペトロは、そのことに気づいて、激しく泣きました。ペトロは、自分の言葉がもろいこと、自分が強くあろうとすることがどんなに傲慢であるかを知りました。そして、主イエスがそんな自分を愛して憐れんでくださることを知りました。主イエスの愛と憐れみ、そして、罪を背負って死んでくださる決意の大きさを知って、激しく泣くほかなかったのです。

人間の決意は、何ともしろく、弱いものでしょう。主イエスに従いたいと思っていても、主イエスに従い抜くことができない。神さまを信じたいと思っても、信じ抜くことができない。それがわたしたちなのです。大切なことを申し上げます。信仰とは、わたしたちのものではありません。主イエスの十字架によって支えられているのであり、神さまから与えられているものです。自分で強くあろうとしても、それはとてももろく、弱いのです。自分の弱さを知って、主イエスに依り頼む。そこに、信仰の出発点があります。(望月 信)

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 26章75節

ペトロは、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。

〈ねらい〉

誰でもこわくなった時、逃げ出してしまう……、誰もが持っている弱さを、ペトロのお話を通して見つめましょう。そしてイエスさまのゆるしを覚えましょう。

〈展開例〉

【お話】

ペトロさんはイエスさまがだいすきでした。イエスさまからしかられたこともありましたが、イエスさまのそばからはなれませんでした。さいごはイエスさまといっしょに死んでもいいと思ってイエスさまにずっとついてきました。イエスさまに、あなたはにわとりが鳴く前に三度わたしを知らないと言うでしょう、と言われたこともありましたが、ペトロは言いました。「いいえ私は裏切りません！」

ところがイエスさまがゲッセマネの園で苦しうなお祈りの後、やってきた兵隊たちに黙ってつかまり、連れて行かれた時、ペトロは怖くなり逃げ出してしまったのです。逃げながら、ペトロさんは「こんなはずでは。僕がイエスさまを見捨てて逃げるなんて……。」ペトロは思い直して、イエスさまがつかまっている建物の門に入り、お庭に入りました。そこから中の様子が見えるのです。お庭には何人かの人々がたきぎを囲んでいました。寒い夜だったのです。

すると、ある女の人が言いました。「あなたもあのイエスと一緒にいたね。」ペトロはドキっとして、「ちがいます。あなたはなんのことを言っているのかわからない」と言いながら、そこを離れ、門の方へ歩いていきました。すると、そこにいた他の女の人が、「この人はイエスと一緒にいた男です」と叫んだので、またペトロはドキ！「そんな人は知らないよ」と言いました。すると、周りにいた人たちが近寄ってきてペトロを囲み、言いました。「たしかにお前はあのイエスという男と一緒にいただろう」と言われ、「そんなことは知らない！」とあわてて打ち消しました。すると「コケコッコー」とにわとりが鳴きました。その時ペトロは思い出しました。イエス様の言うとお

り、にわとりが鳴く前に三度イエスさまのことを知らないと言ってしまったのです。ペトロは外へ出て「イエスさま、ごめんなさい。」と激しく泣きました。

イエスさまには、そんなペトロのあわれな姿が見えていました。イエスさまは祈りました、「父よ、ペトロを立ち直らせてください。」イエスさまは裏切ったペトロをゆるし、ペトロのためにお祈りしてくださったのです。

【祈り】

イエスさま。弱いわたしたちのためにお祈りくださってありがとうございます。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈幼稚科カテキズム（罪の赦し）〉

イエスさまは、つみをおかしたわたしたちを

ゆるしてくださいます。

〈暗唱聖句カード〉

うらざり



しかし、わたしはあなたのために、^{しんこう}信仰が^な無くならないように^{いの}祈った。（ルカ22:32）

ねらい

「たとえば、みんながあなたにつまずいても、私は決してつまずきません」と、ほかの弟子よりも自分は立派な人間であると考えていたペテロも、三度もイエスを知らないと言って、裏切ってしまいました。言葉と行動が一致しない典型的な例ですね。いくら立派なことを口で言っても、行動がまったく違うという自分の姿を思い知らされる時があると思います。そのようなとき、このペテロの話を思い出して、イエス様の助けを祈る機会としましょう。

展開例

ペテロは、三度もイエス様のことを知らないと言って、皆の前で、イエス様を否定してしまいました。そして、外に出て激しく泣きました。しかし、イエス様はそのようなペテロの弱さを

よくご存じでした。

ルカ福音書 22 章 32 節に、「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った」と書かれています。私たち一人ひとりのつまずきや弱さをイエス様はあらかじめよく知ってくださり、信仰が無くならないように祈ってくださっています。今、信仰を持っている人がいれば、その人はこのイエスの祈りの結果であることを学びましょう。

祈り

イエス様は、ペテロの弱さをよく知っておられて、ペテロの信仰が無くならないように祈ってくださったことを感謝します。なぜなら、イエス様はこの私のためにも、信仰が無くならないように祈ってくださっていると信じることができるからです。

～ 話し合ってみよう ～

イエス様は今、天におられて、私たちを執り成し（助け）ておられることを聖書から探して確認しましょう。



自由メモ

**聖書日課**

マタイ 26：69～75節

暗唱聖句

ペトロは、「鶏が鳴く前に、あなたは三度私を知らないというだろう」と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。

（マタイ 26：75）

〈ねらい〉

ペトロの裏切りを通して人間の弱さ、罪深さを
知り、全てをご存じのイエス様に「ごめんなさい」、
「ありがとう」が言えるように導かれる。

〈展開例〉

(1) ペトロの決意

並行記事を見ておきましょう。マルコ福音書
14章66～72節、ルカ福音書22章56～62節、ヨ
ハネ福音書18章15～18, 25～27節。それら聖
書の御言葉からペトロの発言を再現してみま
しょう。

ルカ22章33節、「主よ、御一緒なら……死ん
でも、よいと覚悟しております。」

マルコ14章30節、ペトロの発言に対してイ
エスは、「はっきり言うておくが、あなたは、
今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしの
ことを、知らないと言うだろう。」さらにペト
ロは、「たとえ……、あなたのことは知らない
などとは決して申しません。」

(2) ペトロの失敗を通して罪を知る

ペトロは罪の弱さを持つ人間です。そして、
ペトロ以上に、私たちも、とっさに「うそ」を
ついてしまいます。「うそ」をついて逃れた経
験はないですか？ 妹や弟に自分のやった過ち
をなすりつけたり、同じ悪いことをしても一人
で逃げ出して叱られることからまぬがれたり、
生活の中でもペトロさんのような弱い所が自分
にあることに気づきましょう。罪に気づかれ
たら素直に「ごめんなさい」と言えるよう、心
を変えていただきましょう。

イエス様は、このような人間の弱さを知って
おられます。

(3) 泣いたペトロ

ペトロは、最後の晩餐の時には、「私は、イ
エス様と一緒に死んでもいい」と思っていまし
た。けれども、イエス様は、ペトロが「イエス
様なんか知らない」と言うのを、分かっておら
れました。イエス様は、ペトロの弱さ、人間の
弱さをご存じなのです。ペトロは、そのことに
気づいて、門の外でオイオイ声を上げて泣きま
した。

イエス様は、弱くなったペトロのために、ず
っとずっと祈ってくださっていました。そして、
守ってくださっていました。イエス様が怒って
ペトロを責めることはありませんでした。ペト
ロは、そんな優しいイエス様に「ごめんなさい」
をしました。それが、ペトロの涙だったのです。

今でもイエス様は、私たちのために、天のお
父様にとりなしの祈りをしてくださっています
よ。イエス様を心から信じて「ありがとう」が
言えるように導かれますね。

〈祈り〉

天の父なる神様、今日の分級の時を感謝します。
自分の中にある罪をしっかりと見つめて、人を非
難せず、神様からのゆるしをいただく素直さを与
えられますように。いつも神様が守ってくださる
ことを心に留めることができますように祈りま
す。イエス様のみ名によってお祈りします。アー
メン。



対話の手掛かりとして…

- ①ペトロは他の弟子たちが、主イエスを見捨て
中、最後まで強い意志を持って、主イエスに従
っていたようです (26:56, 58)。否認の予告を主
イエスから聞いた時に誓った言葉を (26:35)、
最後まで守り抜こうとしたのです。しかし、も
ろくもその決意が崩れ去ってしまう様子が記さ
れています。なぜ、「イエスなど知らない」と言っ
て、主との関係を絶ってしまったのでしょうか。
その理由の一つとして、「人間の弱さ」だと言
われることがあります。でも「弱い」というこ
との中に、罪の問題をごまかしてはいけません。

- ②75節には、ペトロが激しく泣いたことが記さ
れています。今回は、ペトロの涙の意味につい
て考えてみたいと思います。涙のひとつの理由
は、自分は何ということをしてしまったのかと
いう「後悔」です。あんなに信じ、すべてを投
げ打って従ってきた主イエスを、たとえ殺され
てもどこまでもついていくと本当に思っていた
主を裏切ってしまったこと。三度も「知らない」
と言ってしまったこと。呪いの言葉さえ口にし
て、関係を否定してしまったこと。そのことに
対する悔やんでも悔やみ切れない思いが彼の心
を捕えたのです。いざとなると、自分の決心も
誇りも何の役にも立たないことに気付かされた
のです。

- ③しかし、ペトロの涙は、後悔の涙だけではな
いでしょう。夜明けを告げる鶏の泣く声を聞いた
時、もうひとつのことを思い起こしたのです。
それは「イエスの言葉を思い出した」というこ
とです。「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたし
を知らないと言うだろう」と言われた主のお言
葉です (26:34)。この言葉を、自分の罪をア暴
き、断罪する裁きの言葉ではなく、恵みの言葉
として聞いたのです。もし、自分の裏切りを予
告なさった主の言葉を、裁きの言葉として聞き

続けていたのならば、ペトロは生涯、自分は主
を裏切ったという後悔の中で生きなければいけ
なかったはずです。しかし、ペトロは、主の言
葉の先に、福音の響きを聴き取りました。罪深
い自分の歩みのすべてが、実は主イエスのみ手
の中にあったこと。主イエスは自分の歩みのす
べてを、あらかじめ知っていてくださったのだ
ということに気付かされたのです。その主イエ
スが今、「イエスのことなど知らない」と言っ
た私の罪のために、裁判にかけられ、十字架に
つけられます。主の十字架が、まさに私のため
であることを深く知るようになるのです。

- ④私たちは、後悔と絶望の中で幾度も涙を流すこ
とがあります。でも、本当の意味で泣くことが
できるのは、むしろ、ペトロのように主イエス
の驚くべき主の恵みに気付かされること、その
恵みの御心の中に、罪深くどうしようもない自
分が置かれていることに目覚めさせられた時で
はないでしょうか。罪というのは、神さまによっ
て裁かれなければいけないものです。しかし、
主イエスの十字架のゆえに赦されています。私
のすべてを知っていてくださる主によって赦さ
れているからこそ、真実の悔い改めをすること
ができるのです。

- ⑤ペトロは復活の主にお会いし、再び主の弟子、
使徒として歩み始め、初代教会において大きな
伝道の働きをしました。しかし、それはペトロ
自身の決意や能力や努力によるものではありません。
こんなに罪深い自分を、神さまは憐れん
でくださり、赦してくださるという神さま
の大きな愛が原動力となったのです。私たちも
神さまの子どもとして、どこまでもお従いして
いきたい思いで溢れています。でも、何が私た
ちを前へと突き動かしているのかをいつも覚え
たいのです (Ⅱコリ5:14, 15)。

27章11～26節は、総督ポンテオ・ピラトの裁判を受けられる主イエスの姿を描きます。ピラトと、彼を取り巻く人々の罪の姿を通して、十字架の主イエスによる救いの計画のくすしさが浮かび上がってきます。

〈不当な判決〉

ポンテオ・ピラトは使徒信条の中に登場する唯一の固有名詞です。主イエスを裁き、十字架に引き渡した人として、彼はその名を教会の歴史にくっきりととどめることとなりました。

ただ、ピラトは主イエスに積極的に死刑判決を下したわけではなかったようです。彼は主イエスに罪を認めることができませんでした(23)。また彼が裁判の席についているときに、彼の妻が彼に伝言をし、主イエスとの関係を持たないようにと願います。これは彼女もまた主イエスの正しさを訴えているわけで、ピラトを相当動揺させるものとなったに違いありません。ともかくこの箇所から、彼が主イエスを何とかして釈放しようと努めていることが読み取れます。

にもかかわらずピラトは、結局は裁判を放棄するかたちで(24)、主イエスを十字架に引き渡すのです。そこには彼の政治的な判断と、自己保身の思いとが働いたようです。

祭司長たちが群衆をあおりたてた(20)のは、ピラトが真理よりも世論を恐れる政治家であったことをよく見抜いていたためでしょうし、またピラトは主イエスへの裁判のしかたによってローマ皇帝から不評を買うことになりかねないことをも恐れていたに違いありません。

このように、この世間的な打算に屈して罪なき神の子に死刑を宣告したピラトもまた、主イエスを十字架に追いやった罪人のひとりであり、このピラトの姿の中に、私たちは自分自身の姿をも見出すのです。「ナザレのイエスを／十字架にかけよと／要求した人／許可した人／執行した人／それらの人の中に／私がいる」(水野源三)。

〈貫かれる救いの計画〉

ピラトの罪は明白で、覆い隠すことはできません。にもかかわらず、彼は神の救いのご計画を決定的に押し進めたとも言えるのです。なぜなら、正しきお方である主イエスが、不義なる人間のかわりに十字架に死なれることこそ、私たち罪人を救うためにみ父が計画なさったことであるからです。この点で、「評判の囚人」(16) バラバ・イエス(ローマ政府は、被占領国であるユダヤの民の心をなだめるために、祭り等特別の場合に囚人をひとり特赦する慣例をもうけていました)が主イエスのかわりに釈放されたことには深い意味があるものと考えます。

このように、不当な裁判によって人間の罪の力が勝利したと思われたそのところでもイエスはまさに主であられ、このお方が罪人たちの手の中に引き渡されているかに見えるその時に、神の恵みのみ心が成就しつつあったのです。主イエスが十字架に引き渡されて死なれたからこそ、私たちは救われました。人の思いをはるかにこえて、神の恵みは大きいのです。(木下裕也)

※第9号(4月6日聖書研究)からの再掲載です。



テキスト マタイによる福音書 27章15～26節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問19, 59, 60

〔単元のねらい〕

ピラトは、主イエスに罪がないことを知っている。その真理を知りながら、その真理に立つことができない。たいへん憐れであるが、しかし、そこに、わたしたち罪人の姿がある。ピラトはわたしたちの一人である。主イエスは、そのピラトの罪を背負って死んでくださった。主イエスの死は、ピラトのための死でもある。そして、それゆえに、真理に立ち続けることができないわたしたちすべての罪人のための死なのである。真理に立っておられる主イエス・キリストの十字架によって、わたしたちも主イエス・キリストという真理に立つよう、招かれているのである。

「ピラトのためにも死なれた主イエス」

先週は、主イエスが捕まえられて、大祭司の前で裁判を受けたお話でした。ペトロが、大祭司の屋敷の中庭で、三度「主イエスを知らない」と言ってしまう、たいへん悲しい出来事を学びました。

主イエスは、その大祭司の裁判だけでなく、ローマ総督ピラトの裁判にも引き出されました。十字架につけるためにはローマ総督ピラトが死刑を言い渡すことが必要だったからです。そのため、夜が明けるとすぐに、祭司長たちは主イエスを総督ピラトのところに連れて行きました。こうして、主イエスは、大祭司の前だけでなく、総督ピラトの裁判も受けてくださいました。

しかし、今日の聖書の御言葉には、少し不思議なことが書いてありました。ピラトは、主イエスを十字架につけたくないのです。ピラト自身は、主イエスを十字架につけたいなどと、ちっとも思っていない。そんなふうに思われるのです。

祭司長たちは、「主イエスがユダヤ人の王だと名乗った」と言って、主イエスを訴えました。けれども、主イエスご自身は、その訴えに対して何もお答えになりません。その様子を見て、ピラトは気づきました。この訴えは、主イエスをねたんでいるからだ。本当には、主イエスに十字架につけられるような罪はない。主イエスは無実である。ただ、祭司長たちにねたまれて、訴えられている

のである。ピラトはそう気づいて、主イエスを釈放しようと思いました。

そこで、ピラトは、祭りのときに囚人を一人釈放する習わしがあるのを利用しようとしています。主イエスをいったんは犯罪人として有罪の判決を下すのですが、祭りのときの習わしによって釈放するという方法です。祭司長たちにねたまれていすから、ムチ打ちくらいはしなければならいでしょう。けれども、ムチで打ってきちんと懲らしめさえすれば、釈放するということでも、祭司長たちは納得するのではないだろうか。

ピラトは、人々の前で、バラバ・イエスという囚人のことを持ち出しました。「バラバ・イエス」とは、「バラバと呼ばれているイエス」ということです。不思議なことですが、こちら「イエス」という名前なのです。しかし、このバラバと呼ばれているイエスは、本物の犯罪人でした。「本物の」とは何だろうと思うかもしれません。バラバは、強盗をし、人殺しまでしていた、本当の犯罪人なのです。その頃、エルサレムを恐怖に陥れていた、有名な犯罪者でした。そして、ピラトがこのバラバ・イエスのことを持ち出したのは、バラバ・イエスと比べるならば、いくら何でも主イエスのほう、「救い主と呼ばれるイエス」を釈放してほしいと願うであろう。ピラトは、そんな計算をして、主イエスを釈放しようとしたのです。

けれども、祭司長たちは、主イエスではなく、バラバを釈放してもらうよう、人々を説得しました。祭司長たちは、強盗や殺人の罪を犯したバラバが釈放されるのでよいと考えるほど、主イエスをねたんでいたのです。ねたみとは、それほど恐ろしいものなのです。正しい判断を失わせてしまう力を持つのです。こうして、ピラトが人々に「どちらを釈放してほしいか」と質問すると、人々は、「バラバを」と答えました。驚いたピラトが、「では、メシアと言われているイエスのほうは、どうしたらよいか」と尋ねると、人々は「十字架につけろ」と答えました。ピラトは、あらためて問いかけます。「いったいどんな悪事を働いたから、十字架につけろと言うのか」。人々は、その問いに答えず、ただただ激しく「十字架につけろ」と叫び続けました。こうしてついにピラトは、それ以上言っても無駄である、かえって暴動が起こりそうだと感じて、主イエスを釈放することをあきらめました。ピラトは、バラバを釈放し、主イエスを十字架につけることにしたのです。

このピラトの裁判の出来事から、大切なことを学びましょう。一つには、ピラトは、主イエスを十字架につけることを決めましたが、それは正しいことだったのでしょうか。いいえ、ピラトは間違った判断をしました。主イエスに罪はありません。ですから、どれほど祭司長たちが訴えようとも、どれほどユダヤ人が叫ぼうとも、ピラトは主イエスを釈放すべきでした。ピラトは水で手を洗って、「この人の血について、わたしには責任がない」と言いましたが、そうではありません。ピラトには、主イエスの血の責任があります。罪のないお方である主イエスを十字架につけたのであって、ピラトには大きな責任があります。

そして、主イエスには罪がない。ピラトは、その真理を曲げてしまいました。また、真理を曲げることによって、自分自身を裏切ってしまいました。真理を曲げること、また自分を裏切ること、

これはたいへん大きな罪であり、自分自身を傷つける、悲しいことなのです。ピラトの妻が、「わたしは昨夜、夢でずいぶん苦しめられました」と言っていました。しかし、このときから、ピラト自身、苦しむことになったのではないのでしょうか。真理を曲げてしまった。自分を裏切ってしまった。そのことが、どんなに自分の心を苦しめるのでしょうか。ピラトは、主イエスの血の責任を背負い、真理を曲げた罪も背負い、生涯、苦しみを抱えてしまうことになってしまったのです。

そこで、大切なことを申し上げなければなりません。主イエスは、このピラトの罪を背負って、十字架につけられてくださいました。ピラトの苦しみも背負って、死んでくださいました。ピラトが、主イエスを救い主として知って、信じることでできたなら、何と幸いだったでしょう。ピラトが果たしてどうだったかは、分かりません。ただ、わたしたちには、その恵みと幸いが与えられています。主イエスが十字架につけられてくださったとは、父なる御神が、わたしたちの罪を主イエスに背負わせて、主イエスを裁いておられるのです。主イエスは、わたしたちの罪、わたしたちの苦しみを背負って、神の裁きを受けておられます。そうして、わたしたちに罪の赦しをもたらしてくださいます。わたしたちに平安をもたらしてくださいます。そのために、何の抵抗もなさらずに、十字架につけられてくださいました。

わたしたちは真理に立ち続けることができません。その苦しみは主イエスをご存じです。主イエスが背負ってくださっています。そうして、わたしたちは、罪を赦されて、やり直すことができます。主イエスに結ばれて、わたしたちは真理に立ち続けます。そのために、十字架の主イエスが、聖霊が、わたしたちを強くしてくださいます。主イエスに支えられて、わたしたちの人生がまっすぐにされます。わたしたちは、真理を大切に生きていくことへと励まされるのです。（望月 信）

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 27章26節

そこで、ピラトはバラバを釈放し
イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

〈ねらい〉

イエスさまを助けることができなかったピラトの姿を伝えます。その姿は、やっぱり自分の命が一番大事という、わたしたちの姿そのものです。そしてピラトと対照的なお姿のイエスさまこそ、まことのメシア、救い主です。

〈展開例〉

【お話】

イエスさまが兵隊たちに捕まった時、エルサレムの町でいちばんえらい人は、ポンテオ・ピラトという総督でした。ピラトは、大勢の人々がイエスという男を捕まえて来るのを見ました。「何事だ」人々は「この男を死刑にしてください。」と言ってきたのです。「いったい何をしたというのだ。」とピラトが聞くと、「この者は神にさからっているのです。」と人々が言うのです。

ピラトはイエスさまを調べました。でもイエスさまの悪いところがみつかりませんでした。イエスさまは何も悪いことをしていないことがわかりました。そして、人々がイエスさまを憎んでいるのは、イエスさまが正しい人で、誰もかなわないからだということがわかりました。みんなイエスさまのことをねたんでいたのです。

ピラトはイエスを助けようとして人々に言いました。「この者はいったいどんな悪いことをしたのか。」人々は叫びました。「十字架につけろーっ。」「十字架につけろーっ。」ピラトはこれ聞いて思いました。『何を言っても無駄だ。このままだと、みんな狂ったようになってあばれだすかもしれない。そうすると、この私も人々におそわれて殺されるかもしれない。しかたがない、このイエスという男には気の毒だが、死刑をしてはやくこのさわぎをおわらせよう……。』こうしてピラトはイエスさまを助けることをあきらめ、十字架で死刑にすることを許しました。

人間はやっぱり自分が大事。自分を助けるためなら、人の命はどうなってもいいと思うのです。

ところが、イエスさまはご自分の命を捨てて、人々を罪から救ったのです。イエスさまこそ、罪のない、まことの人間であり、まことの神、メシアです。

【祈り】

イエスさま。罪深い、わたしたちのために、命を捨ててくださって、ありがとうございます。私たちが、もう罪を犯さず、あなたを愛し、あなたをよろこび、あなたに従ってゆくことができますように。イエスさまのお名前でお祈りします。アーメン。

〈幼稚科カテキズム（イエス・キリスト）〉

イエスさまは、
つみのない

まことのにん
げんです

〈暗唱聖句カード〉

ぴらと



わたしはこの男^{おとこ}に罪^{つみ}を見^みいだせない。^{よはね}(ヨハネ19:6)

ねらい

民衆は、祭司長たちから説得されたとはいえ、バラバよりもイエスを十字架につけろと激しく叫び続けて、「この人の血の責任は、我々と子孫にある」と答えた。これは、結果的に、私たちみんながイエスを十字架につけたこととなり、その血の責任も私たち皆とその子孫にまで及ぶという意味をもっている。その点、ピラトは策略的に、「わたしには責任がない」と逃げている。こうして、イエスの十字架の死刑判決は決定した。ここから、この私たちがイエスを十字架につけたのであること、十字架の責任が私たちにあること、それゆえに、十字架が私たちの救いの道であることを学びたい。

展開例

「ねらい」で書いたように、イエスの十字架の死刑判決に私たち民衆が一役買っている。イ

エスの血の責任が民衆みんなに当てはまるとは、恐ろしいことである。ペテロが後に「イスラエルの全家ははっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺した」(使徒言行録2:36)と述べている通りである。

しかし、この「イエスを神は主としメシアとした」という言葉が続くことによって、私たちは悔い改めて、罪が赦される道が開けたのである。イエスの十字架は民衆みんなの責任問題であり、同時に民衆みんなの罪からの救いの道でもあることがわかるのである。

祈り

私たちは、イエスを十字架につけて殺した罪人であり、その罪を悔い改めることによって、罪の赦しを与えてくれる神からの奇跡を感謝します。

～ 話し合ってみよう ～

民衆が一斉に叫んでイエスを十字架につけろと言って、イエスを殺したことになった、その深い意味を語り合ってみよう。



自由メモ

**聖書日課**

マタイ 27:15～26

暗唱聖句

そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

(マタイ27:26)

〈ねらい〉

ピラトの「お間違い」の裁判決定は、イエス・キリストの十字架のあがないを必要とする、弱い人間の罪深い姿である。ピラトの罪をも背負って死んでくださったことを知る。

〈展開例〉

(1) 「総督ピラト」になりきって聖書箇所を読んでもらう。(生徒さん二人ぐらいにしてもらう。)

(2) さて、総督ピラトさんでどんな人だと思えますか？ どんなイメージをもったのでしょうか？
(自由に生徒の意見を聞こう)

この裁判では、正しい罪なき人を十字架につけてしまう、間違った判決がなされました。祭司長やユダヤ人がわめいて訴えても、ピラトは、主イエスを釈放すべきでしたね。

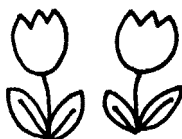
ピラトは、24節で「……わたしには責任がない……」と言っていますが、皆さんはどう思いますか？ たとえば、クラスのトップリーダーが正しい判断ができなかったり、正しい道から離れていく決断をしたりした時、クラスの中はようになっていくのでしょうか。本当は、ピラトさんも、イエス様には、罪がないので釈放したかったのです。だから、囚人のバラバという犯罪人

と天びんにかけて、どちらを赦すのかと民衆に聞いたわけです。それは、当然イエスを赦し、釈放するようになるだろうと思っていました。ところが結果は、バラバを赦して、「イエスを十字架につけよ！」という声に負けてしまったのです。

ピラトも一人の人間です。罪に負けてしまう弱さを持っていました。そのような人間の弱さをイエス様はすべててご存じで、「ピラト＝私たち」の弱さを背負って十字架刑にかけられてくださいました。ですから、ぼくたち私たちは、この救い主のことを信じて正しい道に歩ませていただけるチャンス、方向転換できるチャンスをたくさんいただいています。やり直しができるようにされています。イエス様のあがないのみわざ、十字架のみわざに感謝しましょう。

〈祈り〉

天の父なる神様、み名をさんびします。今日のこの時をありがとうございます。みんなで礼拝を守ることができて感謝します。今日、学んだことを心に留めて、イエス様が十字架につけられることをの深い意味を聖霊様によって理解していくことができるように導いてください。イエス様のみ名によってお祈りします。アーメン。



対話の手掛かりとして……

- ①率直にこの裁判の様子をどう思うか尋ねてみたらよいと思います。何の罪もない主イエスが、人間のねたみのために裁判にかけられ、十字架につけられるというのは、誰が見ても不当にしか思えない裁判だからです。さらに恐ろしいことは、この裁判は不当だと知りながら、群衆を満足させ、自分の身を守るために、イエスを十字架に引き渡した総督ピラトの姿にも気付かされるでしょう。群衆を恐れ、群衆を満足させるために没頭したこの権力者には、本来、兼ね備えていなければいけない愛と正義が欠けていました。もし今日の裁判の席や政治において、イエスの裁判のように、正しいことと間違っていることがまったく反対になってしまったならば、それが常識となってしまうならば、私たちが生きる世界はどうなるのでしょうか。想像するだけで恐ろしくなってきます。

- ②ピラトの心を誘惑したのは、群衆です。でも、この群衆は、一週間前、主イエスがエルサレムに入城なさったとき、主を賛美して歓迎した者たちです（21:9）。その群衆たちの賛美の声が、イエスを「十字架につけろ」という叫びに変わってしまいました。主が私たちのためにどれほど深い憐れみをもって愛してくださっているかをよく知っていた群衆が、ここで「十字架につけろ」と叫んでいます。あまりの変わり様に、呻くような悲しみを覚えます。おそらく、群衆にとってイエスは、自分たちが望んでいた救い主ではなかったからでしょう。期待が外れると誰でもショックを受け、怒りさえ生まれます。その怒りが主を十字架につけたのです。しかし、主は人間の罪の悲しみを完全に受け止め、十字架についてくださいました。悲しみだけではなく、それでも群衆を愛するがゆえに、群衆による裁きによって十字架につけられたのです。

- ③「バラバ・イエス」という四人が出できます（16節）。ピラトは、人々に「どちらを解放しては

しいのか。バラバ・イエスか。それともメシアといわれるイエスか」と問いました。ユダヤの宗教的指導者たちが主イエスをねたんでいたとしても、人々は「主イエスを解放しろ」と言うに違いないと思っていたのです。しかし、実際はそうはいかなかったのです。バラバ(革命家・政治犯と言われる)の解放を望んだということは、私たちの望む救いは、主イエスによる罪の救いではなく、バラバがもたらす政治的解放の中にあるということでしょう。こうして罪の上に、罪がまた重なりました。軌道修正をすることができないが人間です。一度堕ちたらどこまでも墜ち続ける罪ある人間の姿が、主イエスの裁判の出来事の中で起こっているのです。しかし、墜ち続けるしかない人間の悲惨の中で、罪人バラバが解放されたこと。しかも、まったく罪のない主イエスと引き換えに、解放が起こっていることに、神さまの驚くべき計画を見ることができます。

- ④今回のテキストに登場する人物、ポンテオ・ピラトも群衆もバラバ・イエスの中に表れ出ている人間の姿は、私たちの姿でもあります。例えば、「使徒信条」という教会の信仰告白があります。その中に、「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」という告白の言葉があります。昔、教会学校の先生から教えられたのは、「ポンテオ・ピラト」のところに自分の名前を入れて、「〇〇のもとに苦しみを受け、十字架につけられ」と告白をしてみなさいということでした。呆れるほど身勝手に、ねたみに満ち、残酷な人間は、他の誰でもない私のことである。キリストを十字架につけたのは私であり、それゆえに、本来、裁かれるべき者は私であることを知った時、恐ろしくて言葉を失います。しかし、キリストを十字架につけた私、裁かれるべき私が、驚くべきことにその十字架によって罪赦されている喜びを知っている。それが、キリストの教会なのです。

2012年4～6月カリキュラム（第45号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月 日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
単 元 の 目 標			
4月1日 進級・受難週	十字架のキリスト	－	子24、ウ小教理27
		マタイ27:32－50	マタイ27:46
	十字架の犠牲を支払われた神の極みまでの愛の中で、感謝と喜びに生きよう		
8日 復活祭	復活されたキリスト	－	子24、25、ウ小教理28
		マタイ28:1－10	マタイ28:9
	今も生きておられる復活のキリストの明るい光の中で、希望と勇気に生きよう		
15日	人生の目的―礼拝―	問1	ウ小教理1
		ヨハネ17:3	ヨハネ17:3
	神を知るとは神とのまじわりの中で生かされること。人の生きる道がここにある		
22日	神の栄光をあらわす	問1	ウ小教理1
		ローマ11:36－12:2	コリントー10:31
	人も被造物も神の栄光をあらわすよう定められている。気張らずに生きていこう		
29日	救われた喜び	問2	ウ小教理87、34、ウ大教理76
		ルカ15:11－24	ルカ15:24
	主イエスに救われて歩む幸いと喜びを知ろう。ここに私たちの人生がある		
5月6日	神の子とされた喜び	問2	ウ小教理34、ハイデ1
		ルカ19:1－10	ルカ19:9、10
	神の子とされている喜びに生きよう。ここに中心があり、出発点、ゴールがある		
13日 母の日	礼拝こそいのちの源	問3	ウ小教理88
		ヨハネ4:1－26	ヨハネ4:23
	人は神なしに生きられない。礼拝は神との交わり。潤される礼拝をささげよう		
20日	いのちのパンで生きる	問3	ウ小教理89、90
		ヨハネ6:1－15	ヨハネ6:35
	公同礼拝は日々の祈りの源、また目標。祈りと御言葉に親しむ日々励もう		
27日 聖霊降臨祭	神と人を愛する（一）	問4	子34、ウ小教理42、ハイデ4
		使徒2:1－4、43－47	コリント二8:9
	神の愛によって愛する幸いを与えられている。神と人を愛する愛に生きよう		
6月3日	神と人を愛する（二）	問4	子40、ウ小教理42、ハイデ4
		ルカ10:25－37	ルカ7:47
	御言葉を聞くことと行うことは一つのこと。善きサマリア人イエスにならおう		
10日 花の日	キリスト証言	問5	ウ小教理2、ウ告白1章
		ヨハネ5:39	テモテ二3:15b
	聖書はキリスト証言である。キリストとの交わりによってすべてが始まる		
17日 父の日	神の御言葉	問6	ウ小教理3、ウ告白1章
		ペトロ二1:16－21	ペトロ二1:21
	聖書はキリストの福音を告げ知らせている。神の愛と福音を聞き取る		
24日	霊なる神	問7	ウ小教理4、ウ告白2:1、2
		ヘブライ13:8	ヘブライ13:8
	神は霊であり、変わることがない。変わることのない主イエスの愛を知ろう		

2012年度 年間カリキュラム（第45～48号）

（2012年4月～2013年3月）

二年サイクル カテキズム カリキュラム 第一年（子どもカテキズム問1～20）

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2012年 第45号	4月1日	進級式・受難週	十字架のキリスト	－
	4月8日	復活祭	復活されたキリスト	－
	4月15日		人生の目的 ―神を知る―	問1
	4月22日		神の栄光をあらわす	問1
	4月29日		救われた喜び	問2
	5月6日		神の子とされた喜び	問2
	5月13日	母の日	礼拝こそいのちの源	問3
	5月20日		いのちのパンで生きる	問3
	5月27日	聖霊降臨祭	神と人を愛する（一）	問4
	6月3日		神と人を愛する（二）	問4
	6月10日	花の日	キリスト証言	問5
	6月17日	父の日	神の御言葉	問6
	6月24日		霊なる神	問7
第46号	7月1日		唯一の神	問8
	7月8日		生ける神	問9
	7月15日		三位一体の神	問10
	7月22日		主権者なる神	問11
	7月29日		天地創造	問12
	8月5日	（平和）	平和を創り出す	－
	8月12日		摂理の神（一）	問13
	8月19日		摂理の神（二）	問14
	8月26日		人間の創造	問15
	9月2日		人の罪	問16
	9月9日		罪と墮落	問17
	9月16日	（敬老の日）	罪の悲惨	問18
	9月23日		神の怒り	問19, 20
	9月30日		贖い主の必要性	問21

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第47号	10月7日		二性一人格	問22
	10月14日		罪からの救い主	問23
	10月21日		謙卑のキリスト	問24
	10月28日	宗教改革記念	高挙のキリスト	問24
	11月4日		預言者イエス	問25
	11月11日		大祭司イエス	問26
	11月21日		真の王イエス	問27
	11月25日		恵みのみ	問28
	12月2日	アドベント	選びと有効召命	—
	12月9日	アドベント	キリストを待ち望む	—
	12月16日	アドベント	キリストを待ち望む	—
	12月23日	降誕祭	主イエスの降誕	—
	12月30日	年末	一年の恵みの感謝	—
2013年 第48号	1月6日	新年	キリストとの結合	問30
	1月13日		罪の赦しと義認	問31
	1月20日		神の子とされる幸い	問31
	1月27日		聖化の恵み	問32, 33
	2月3日		愛の歩み	問32, 33
	2月10日	(11信教の自由) (13- レント)	良心の自由と尊厳	—
	2月17日	レント	主イエスと共に歩む	問34
	2月24日	レント	再臨の約束	問35
	3月3日	レント	再臨に備える	問35
	3月10日	レント	死のときの祝福	問36
	3月17日	レント	苦難のキリスト	—
	3月24日	受難週	十字架のキリスト	—
	3月31日	復活祭	復活のキリスト	—

〈執筆者よりひとこと〉

●幼稚園の子供たちに、主のメッセージが聴かれるよう工夫したつもりですが、まだまだです。少しでもみなさまの参考になれば幸いです。

(山口英俊)

●分級展開例は具体的にイメージできず、一般的に書いていますので、自由にお使いください。

(青葉台キリスト教会教会学校)

●子どもたちの上に、主イエスの恵みが豊かにありますように。

(芸陽教会日曜学校)

●諸教会の新しい年の歩みのうえに祝福がありますように。

(藤井 真)

●説教展開例の執筆奉仕を続ける中で、子供に届く言葉を獲得することの困難さを痛感します。教案誌を用いてくださるCS教師の兄弟姉妹に、その痛みと労苦を共にしていただけたら幸いです。そして、自分の言葉とは思えないような説教の言葉を与えられる、礼拝の現場で届く言葉が授けられる、そのような経験を共に重ねてゆくことができるなら、更に幸いです。

(二宮 創)

●子どもたち一人ひとりの信仰の成長に仕える教案誌でありたいと願っています。執筆者と読者の皆様に感謝しています。

(望月 信)

〈あとがき〉

●『教会学校教案誌』をお届けできますことを、神様と読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

●先号に引き続いて、昨年、東部中会で開催された「教会教育研修会」の発題を掲載させていただきました。多くの示唆を与えられるものであると思います。信仰の継承のために、取り組むべきことが多くあることを教えられます。各教会での取り組みに主なる神の祝福が豊かであるようお祈りいたします。

●今号で、救済史に基づく二年サイクルカリキュラムは終了します。来年度は、『子どもカテキズム』に基づく二年サイクルに戻ります。『子どもカテキズム』によるカリキュラムは、今度で四回目になります。マンネリに陥る危険を打破したいと願っています。

●同時に、カテキズムによるカリキュラムにおいて、「聖書研究」「カテキズム研究」「説教展開例」が一つに重なり合っていないというご指摘をしば

しばいただいて参りました。その克服ということを考えました。

●次のカリキュラムでは、「教理説教のための聖書黙想」と「説教展開例」の二本立ての形式で提供することといたします。説教展開例執筆者が、教理説教を執筆する道筋の中で、聖書研究とカテキズム研究を兼ね備える「黙想」を執筆することがふさわしいと考えるからです。

●しかし、お詫びしなければなりません。準備が整わず、新しい形式での提供は、第46号(2012年7・8・9月号)からとなります。第45号においては、なお旧来の形式となっています。ご寛恕を願い、また、第46号以降の新しい形式をお待ちくださいますよう、お願い申し上げる次第です。

●「信仰の証」を募集しています。受洗・信仰告白の証を分かち合うことにより、互いに励まし合うことを目指しています。教会で受洗者・信仰告白者がおられましたら、ぜひご連絡ください。

●日本キリスト改革派教会の聖書日課『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。教案誌編集部より提供させていただいています。それぞれの家庭で、また教会で、祈りの場が祝福されるよう願って取り組んでいます。

●様々なご意見、情報をお気軽に編集部までお寄せください。弊誌は、皆さまのものです。皆さまに奉仕することこそ、その使命、目標です。今後とも宜しくお願い致します。

●Soli Deo Gloria!

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、別冊『子どもカテキズム』(300円)をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第36号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。副読本『主は羊飼いい』(800円)のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

E-mail: yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

まえがき

弓矢健児（千里山教会牧師）

巻頭説教

吉岡契典（東北中会休職教師）

特別寄稿

島野美佳子（坂戸教会執事）

稲田正平（東京教会長老）

聖書研究

吉岡契典（東北中会休職教師）

酒井啓介（宿毛伝道所宣教教師）

浅野正紀（せんげん台教会牧師）

後藤公子（神戸改革派神学校講師）

袴田清子（園田教会会員）

牧野信成（西神伝道所協力牧師）

木下裕也（名古屋教会牧師）

説教展開例

木下裕也（名古屋教会牧師）

相馬伸郎（名古屋岩の上传道所宣教教師）

辻 幸宏（大垣伝道所協力牧師）

二宮 創（太田伝道所宣教教師）

長谷川潤（四日市教会牧師）

牧野信成（西神伝道所協力牧師）

望月 信（高蔵寺教会牧師）

分級展開例

幼稚科 山口英俊（豊明教会）

小学科下級 青葉台キリスト教会教会学校

小学科上級 芸陽教会教会日曜学校

中学科 藤井 真（堺みくに教会牧師）

イラスト作画

表紙 田口裕美（尾張旭教会）

本文 岡野美佳（青葉台教会）

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎（長） 名古屋岩の上传道所宣教教師

木下裕也 名古屋教会牧師

辻 幸宏 大垣伝道所協力牧師

長谷川潤 四日市教会牧師

二宮 創 太田伝道所宣教教師

望月 信 高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会『教会学校教案誌』

2012年1・2・3月号（季刊）

第44号

2011年11月27日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円（本体価格）
